
魔法戦記リリカルなのはStrikerS-R2 ～紅蓮の翼と黒き魔女～

なるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはStrikers-R2 〜紅蓮の翼と黒き魔女〜

【Nコード】

N6039M

【作者名】

なるち

【あらすじ】

イノベーターとの決戦の折、白き騎士はその姿を消した。それからしばらく穏やかな年月が流れた。しかし紅と黒の2人の少女が現れるとともに、謎の人型機械兵器の襲撃が新たな事件の皮切りとなることを感じさせる。

魔法戦記リリカル

なのはStrikers-R2 〜紅蓮の翼と黒き魔女〜 始まります。

——世界は戦いではなく、話し合いという手段を手に入れた。
それによってゆっくりと、だが確実に平和^{あす}へと向い歩み始めた。

その昔、人間は知恵というモノを得たおかげで時代の流れとともに高度な文明を築き上げていったが、それと同時に地上で、いや世界で一番愚かな生き物にもなっていた。世界中の人間が真に平和を望み、互いを尊重して言葉を交し合えば最小限の命^{だいしょう}の犠牲で、或いはそれすら無く話し合いという手段を得られたかもしれない。

しかしこの世界の人間はそれをしなかった。それ故に沢山の人の命^{いのち}を払い、その上で漸く話し合いという平和への最善の道を手に入れた。だがこれだけの犠牲を払ってもやがては忘れ、再び歴史は繰り返す事になるのだろう。しかしそうなら無い事を祈ってあの男は逝った。だからせめてこの世界の行く末は影ながら私が見守ろう。もうこの世界には居ない、私が愛したその男の代わりに。

魔法戦記リリカルなのはStrikerS-R2 紅蓮の翼と
黒き魔女 始まります——。

かつては黒き魔神であり、後に神聖ブリタニア帝国第99代皇帝

となった彼はあの日、世界中の人々の世界は調和的な未来へと進む
という願いに掛かった代償としてその命を世界に捧げた。そしても
う一人、ブリタニア帝国最強を誇った白き騎士は伝説の黒き英雄へ
とその姿を変え、命ではなく人生を世界に捧げた。それによってゼ
ロレクイエムは完遂され、この二人によって世界有り様は作り変え
られた。

それから約二カ月が過ぎ、世界が彼等の行動によって得た話し合
いという手段を行使している最中、田舎道を行く馬車の荷物台で大
きいぬいぐるみ——チーズくんを枕代わりに、明るい緑の髪をし
た少女が仰向けに寝そべっていた。彼女はこの馬車に乗った直後か
らずと青く澄み渡った空を見つめていた。しかし時折、声は発し
ないものの口が僅かに動いているということは、ただボーっと空を
見つめている訳ではないようだ。

「お嬢ちゃん、もうすぐ着くぞ。降りる準備は出来てるかい？」

その少女は『ああ』とだけ返事をして上半身を起こした。馬車を
引く主が指差す方向に顔を向けると町が見えた。もちろん田舎町で
あるためにビルなどは一切建っておらず、精々少し大きめのシヨッ
ピングセンター等がある程度だ。

少女は荷物を纏めだした。といっても彼女が持っているのは枕代
わりにしていたチーズくん、服などが入っていると思われる大きな
カバン、そしてピンクの折り紙で折られた鶴。

鶴を大切そうにしまい込んだカバンを右手で持ち、チーズくんを
左腕で抱き抱えるようにして持つと降りる準備は完了だ。最後に、

服についたワラを軽く叩たたいていると直ぐに町に着いた。

「ここへ来る足が無かったんだ、助かったよ。ろくに礼も出来ないが——」

「気にしないでいいさ。どうせこの町に来るところだったんだ。荷台に乗つけて来るくらい構いやしねえよ。それじゃ讓ちゃん、気をつけてな」

「ああ。——腹が減ったな。まずは何か食べるとするか。ピザがあるといいのだが・・・お前もそう思うだろ？」

少女は馬車の主と別れると食料、というかピザを求めて町を彷徨い——いや、探索しだした。こんな田舎町に来てまでもピザを探す辺り、相当それが好きなのだろう。そしてピザ探索を始める際に何故かチーズくんに同意を求めた。もちろんぬいぐるみであるため返答など返って来はしないが、彼女クラスにピザやチーズくんを愛していると彼の心の声が聞こえるようになるのだろうか。試してみる価値は十分にあるはずだ。何故なら彼女は美少女だから。理由はそれだけ十分すぎるくらいだ。

「ピザを作っている店が一軒も無いとは使えん町だ。お前もそう思うだろう？」

そして探索すること約30分。結局ピザ専門店は見つからなかった。そしてこの町は全然悪くないはずなのに八つ当たりまで始める

始末だ。それは同時に彼女の中でピザが極めて重要な物である事を証明していることでもあった。そしてやはりというか、チーズくんに同意を求める。もちろん返答は無いが、やはり彼女クラスになるとチーズくんの声が聞こえるに違いない。試してみる価値は(r y。

「冷凍食品のピザは嫌だしな。仕方が無い、ピザは諦めるしかないか。さて、無駄な時間を食ってしまったがあそこに向かうとするか」

公園にあったベンチに座り、この30分間歩き回った疲労を回復していた少女は立ち上がると、先程までとは違って周囲を見回す事無く前だけを見て歩き出した。

「——シュ、返しに行くぞ」

ポツリと呟いた言葉は風の音で全ては聞き取れなかった。そしてその言葉を最後に、彼女は無言で此処を去って行った。

STAGE 00

永劫の旅路（後書き）

始めました、完結編。

前二作で謎だった部分少量あったと思いますが、きっと明らかになるはずです。

そして第二部のようにパワーバランスが崩れすぎないようにしなければ・・・

では STAGE 01 でまたお会いしましょう。

STAGE 01

王のチカラ（前書き）

お待たせしました！

8 / 6 微修正。

STAGE 01 始まります。

拝啓

枢木スザク様

早いもので、イノベーターとの決戦から二年が経ちました。

私を含め、アロウズに所属していた魔導師の大半はその真実を知らされておらず、最終決戦では管理局側に付いた事もあり

ン准将を罪に問われる事はありませんでした。一方でグッドマイン准将を始めとする、真実を知って尚イノベーター側に付いていた局員達は

重い罪に問われ、指揮官だった准将は・・・自殺しました。

また、疑似GNDライブについては非常に危険な代物であると判断されたため、完全破棄が決定しました。

CBの人達については、彼等の功績も大きいため今回には罪に問わない事となりました。ですが今でも私は彼等がフイトちゃんや

でも、

ティアナ、大勢の人達を傷付けた事を許せずにいます。

憎むのは

いつか許せる日が来て欲しいと思っています。誰かを

とても悲しくて辛い事だっけ知ってるから。

終わった

にはは、何書いてるんだろうね私。あ、そうそう。これはCBの人達が言っていた事ですが、まだ全てが訳では無いそうです。詳しくはまだ何も分かっていま

せんが、

ーターが

あるそうなのですが、母艦・ソレスタルビーイングに

辿り着いた

時には既に無くなっていたとの事です。原因は不明で

すが、管理局は

この事態を重く受け止め、搜索を続けていますが今だ見つかりません。

悪い事が起こらない事を祈るばかりです。

の教導を行う

近況ですが、私は航空戦技教導隊に復帰し、新人達

のですが、

忙しい日々を送っています。久し振りに休暇が取れた

フェイトちゃん達とは休みが合わなかったので暇を持て余していたり。

はやっぱり

シグナムさん達に聞いたのですが、最終決戦の場に

来ていたそうですね。何時か別れの時が来る事は分か
っていましたが、

最後位はちゃんとお別れの挨拶をしたいと思っていま
した。

ですがそれすらする事が出来ず、スザク君は私達の前
から居なく

なっていました。

でも信じています。この無限に広がる世界の何処か
で、貴方が必ず

生きているという事を。再び会える事を祈りつつ。

「——高町なのはよりつと。ふう〜」

ミッドチルダにある高級住宅地を思わせる庭付きの一戸建て。こ
の家の主であるオレンジ掛かった茶髪をサイドアップにしているこ
の女性、つい今し方発した言葉の通り名前を『高町なのは』という。
時空管理局本局の航空戦技教導隊に所属している極めて優秀な魔導
師だ。

なのはは『エースオブエース』や『絶対無敵のエース』等という
異名を持っており、ミッドチルダでも雑誌などで取り上げられる程
の有名人である。また、彼女の教導は人気が高く次から次へと仕事
が入って来るため、一日の休暇を取るだけでも一苦労だったりする。

そして苦勞して取った休暇が今日なのだが、いざ休暇となると何
というか、『ゆっくり休みたい』という思いが勝ってしまったため、
結局何処かに出かけたりすることも無かった。それによりある意味

で暇を持て余しており、思い付いたのが嘗て共に戦い、今はもう会う事も声を聞く事も出来ないスザクに宛てた手紙を書く事だった。

勿論スザクはミッドチルダに家など持っていないし、次元漂流者である彼には特定の住所なんてもの在水里はない。いや、それ以前に彼は二年前の決戦時に行方不明となり、暫くの搜索の後にMissing In Action、通称はMIAと呼称し、戦闘中行方不明と断定された。だから彼に手紙など届く筈も無いが『書く事』そのものに意味があると、なのははそう思って手紙を書いていた。

「ママ、終わった？」

「あ、ヴィヴィオ。うん、今終わったところだよ」

丁度良いタイミングで部屋に入ってきたのは愛娘・ヴィヴィオだ。彼女は引き取られてから三年が経ち、レリックと融合していた時程ではないにしろ確実に成長しているのが見て取れた。なのはの髪型を真似して美しい金髪をサイドアップにしている辺り、相も変わらず彼女が大好きだという事なのだろう。

「ねえママ、せっかくお休みなんだから何処か行こう？」

「うん・・・」

正直、かなり迷っていた。忙しい日々から一日だけ解放された身としては、ゆっくり休んでまた明日から始まる教導漬けの日に備

えたいという思いがある。しかし、逆に言えばそれだけ忙しいという事は、普段はヴィヴィオを構ってあげられる時間が少ないという事を示している。

それが分かっているから無碍にする事も出来ないし、ついつい自分よりも愛娘を優先してしまいがちになってしまう。そしてそれは、今回も例外では無かったりする。

「分かったよ。じゃあヴィヴィオの行きたい所に行こうか。何処に行きたい？」

「えっとね、新しいケーキ屋さんが出来たって友達から聞いたの。だからそこに行きたい」

「うん、じゃあ行こっか。準備しておいで」

「はい」

可愛らしく返事をしたヴィヴィオは笑顔で部屋から出て行った。そんな彼女の後ろ姿を、なのはは微笑みを浮かべて見ていた。普通の子供とは違う特殊な出生をしているヴィヴィオ。しかし今となってはどこからどう見ても普通の子供にしか見えない。それに先程『友達』と言った。それがなのはにはとても嬉しい事だった。

——およそ三十分後、首都・クラナガンに最近出来たケーキ屋の店内にはなのはとヴィヴィオの姿があった。ちなみに店の名前は喫茶翡翠屋^{ひすい}。ヴィヴィオが『ケーキ屋さん』と言っていたが、純粋にケーキ屋というよりは名が示す通り喫茶店というほうがいいだろう。

ちなみになのはがこの店を一目見て直ぐに『……喫茶翠屋の二号店?』なんて思ったとか思わなかったとか。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

「ごゆっくりどうぞ」

中タイケメンのウェイトレスが二人の所へオーダー品を運んで来た。丸いテーブルの上に乗っているのは苺のショートケーキにモンブラン、アイスコーヒーとオレンジジュースだ。コーヒーは勿論なのはが頼んだものだが、意外にもケーキは苺のショートケーキを注文したのも彼女だ。それというのも実家が喫茶店であるだけに、美味しい苺のショートケーキを作れない店は駄目だという考えがあった。

「じゃあヴィヴィオ、食べよっか」

「うん。いただきます」

早速小さめに切ったケーキを口に運んだ。口いっぱい広がる味に思わず『あ・・・』と声を漏らしてしまった。

（なんか似てるかも。お母さんが作るケーキに）

思わぬ処で『お袋の味』ならぬ、『お袋の味に近い味』に出会ってしまった。それによってこの喫茶店の名前と場所は即座になのは頭にインプットされることとなった。

「ママ、美味しい?」

「うん。ヴィヴィオはどう?」

「すっごく美味しいよ」

「そっか。じゃあまた来ようか。何時になるかは分からないけど」

「・・・うん!」

なのはの言葉に最初は茫然としていたヴィヴィオだが、言葉の意

味を理解すると満面の笑みを浮かべて元気よく返事をし、再びケーキを食べ始めた。なのははそんな様子を見ながらコーヒーマグに口を付けていた。

（ていうか、フォーエバー・ロイヤルトウールラブ・マリッジピザって・・・結局何なの？ピザ？それとも他の何か的な？）

ケーキを食べながら改めてメニュー表を見ると、先程は気付かなかったメニューが乗っている事に気付いた。隅っこの方に名前だけが乗っているために気付かなかったのだらう。そしてそのメニューだが、ピザと付いているのだからピザなのだと思う。しかしその前に怪しすぎる文字が書かれている。それによってこの商品がピザなのかどうかすら分からないが、この店がピザとして扱っている以上はやはりピザという事になる。たとえ世間的に認められなかったとしても、だ。ちなみに値段は¥35000。高い。高すぎる。

何とも微妙なメニューを見つけてしまったのは即座にメニュー表を閉じて元に戻した。そして今見た文字を頭の片隅に追いやることも忘れない。まるで何事も無かったかのように再びケーキを口に運んだ。

しかし近い将来、微妙過ぎるうえに無駄に値が張っているそのメニューに再び関わってしまう事を、この時のなのはは知る由も無かった。

約二十分という時間をケーキを食べ、他愛ない話をしながら過ごした。そしてそろそろお会計をしようと席を立ちかけた時、店内に

あったモニターの画面が急に切り替わった。ただ切り替わっただけならば問題はないのだが、聞こえてきた内容には問題が大有りだった。

「番組の途中ですが緊急速報です。現在ミッドチルダ北部にある臨海第八空港及び、廃棄都市区画にて地上部隊と謎の勢力が交戦しているとの事です。謎の勢力は大量の人型をした機戒兵器で、これらは改良型のアインヘリアルもしくは戦闘機人ではないかという噂が飛び交っています。これに対し今のところ地上本部からは何の発表も無く――」

「・・・ママ？」

「ごめんねヴィヴィオ。私――」

「行って来てママ。行って皆を守ってあげて」

「ヴィヴィオ・・・本当にごめんね。絶対にまた休みの日を作るから、だから今度またゆっくり遊びに来ようね」

「うん。頑張つて、なのはママ。ヴィヴィオは先にお家に帰って待つてるから」

ヴィヴィオをギュツと抱きしめた後、なのはは翡翠屋を勢い良く飛び出して行った。笑顔で見送ったヴィヴィオだが、なのはが出て行くとその後ろ姿を少しばかり淋しそうな色を浮かべた瞳で見つめていた。

とある場所に一人の少女がポツンと立っている。容姿は明るい緑の髪に、黒くスカート部分が四つに分かれて足が見えているワンピースの様な服、その下には白いホットパンツの様な物、そして白のロングブーツに手首から二の腕にかけての黒いロンググローブ。胸の部分に碇のような模様があるのが特徴的だ。

そんな彼女は、何か信じられないものを見てしまったかのように目を見開き微動だにしない。それというのも彼女の瞳には信じ難い光景が映っていた。

「ナイトメア・・・だと？」

彼女の視界には廃棄都市区画のような廃れた街並みと空を飛ぶ人型のロボット、そして空を飛ぶ人間達が映っている。少女が飛んでいた、光を発している人間達に突っ込まないのはそれを当然と捉えているからなのか、ロボットの方へ意識が行きすぎている故なのかは分からない。だがそんな事は大した問題ではない。

問題なのは、彼女が先程人型ロボットの事を『ナイトメア』と呼

称した事だ。それが聞き間違いでないのであれば、現状でそのワードが当て嵌まるのはスザクやビスマルクの世界にあった人型自在戦闘装甲騎・ナイトメアフレームが最有力候補となる。そしてそれを知っているという事は彼女もその世界の関係者という可能性が高い。

撃墜され上半身だけとなった、少女曰く濃い紫色をしたナイトメアが彼女の後方へと墜ちていく。しかし少女はそんなモノには目もくれずに空を見上げている。しばらくそのまま空を茫然と見つめていた少女の視界に茶髪で白い服の女性が映り込んだ。その女性の姿が次第に大きくなっていく事から、彼女が自分に近付いて来ている事を理解する。自分も敵だと認識されたのかもしれないと思っていた。

警戒心を強め、直ぐに逃げ出せる体勢を作るものの相手は自由に空を飛んでいる。そんな相手から逃げる事が出来ないということくらい考えるまでも無く分かっていった。しかし無駄だと分かっているも本能に逆らう事は出来ない。無意識の内に一步、二歩と後ずさった。

「ここは危険ですから早く非難して下さい!」

逃げようとした瞬間に聞こえた言葉は予想に反し、避難を促すものだった。少女は一瞬何を言っているのか理解できなかったが、近付いて来る女性は自分を敵だと認識している訳ではないのだろうと思った。

「早く避難を」

「そんな事より此処は何処だ？皆目見当も付かん」

「え？」

「それにナイトメアが何故此処にある？それも人間と同サイズの物が」

「えっと・・・って、今はそれどころじゃないんです！」

そこまで言ったところで群青色をしたロボットが二人のいる場所へ突っ込んで来る。飛んでいる他のロボットと同様に、背中に赤いユニットを装備している。

「近付けさせない！」

< Accel Shooter . >

四発の桜色をした光球がロボットに向けて発射された。それは拳銃の弾丸等の様に直線で飛んで行くのではなく、僅かに弧を描きながら飛んで行き、二発が両足、二発が胴体に命中し爆発を起こす。そのダメージによってロボットは各部が破損して崩れ落ちた。そして女性は再び少女の方へ振りかえった。

「話は後で伺います。まずは避難を」

「・・・後で必ず話を聞かせてもらっぞ」

「はい。私が絶対に守りますから」

「別に守ってもらっ必要は無いがな」

「え？」

「何でも無い。ほら、早く案内しろ」

「じゃあ私に掴って――」

少女を保護するために安全な場所まで連れて行こうと地面に降りた矢先、少女の胸からは槍が生えていた。身体と槍の隙間から血が滲み出し、一切の言葉を発すること無く前方へ、なのはの方に向かってゆつくりと身体が傾いていく。そして地面に倒れ伏すと槍が抜けて滲み出る程度に留まっていた血が一気に溢れ出す。

女性が少女の後方へと視線をやると先程墜ちて来たロボットが上半身だけとなりながらも武装として持っていた槍を投げた後のポーズをしていた。

「う、あ・・・あああああああああ！」

女性が持つ機械の杖をそれへ向けると先程の光球よりも大きいそれが出現し、ビームの様に放たれた。それが命中したロボットは文字通り木端微塵に破壊された。

「しっかり！しっかりして！」

少女に駆け寄ると血が付くのも気にせずには抱き起こし、何度も必死に呼びかける。しかし少女が何らかの反応を示す事は無く、それはつまり息絶えた事を確認する事になってしまっただけだった。絶対に守ると言った直後の出来事だけにショックは大きかった。

「そんな・・・私が、私がもっと周囲に気を配っていたら。ゴメン、ゴメンね」

大粒の涙を流しながら少女をギュツと抱きしめる。そのせいで女性の白い服は大部分が赤く染まってしまったが、そんな事はどうでもよかった。ただ彼女を守れなかった事だけが悔しかった。

「守れなくてゴメン。本当にゴメンね」

何時までもこうしている訳にはいかない。まだ避難は完全には終わっていないのだから。少女を仰向けにそつと横たわらせ、まだ守れる命を守るために再び空へ上がろうと立ち上がりかけたその時――。

【お前には守るための強い決意があるらしい。力があれば守れるか

？」

（え？）

【これは契約。力をあげる代わりに私の願いを一つだけ叶えてもらう。契約すればお前は人の世に生きながら人とは異なる理で生きる事になる。異なる摂理、異なる時間、異なる命。王の力はお前を孤独にするかもしれない。その覚悟があるのなら】

声が聞こえたかと思うと、女性には瞬間的に様々な映像が見えた。何処かの惑星と思われる星やそこに住んでいるのかも知れない人々、惑星の後ろから見えた太陽の様な光。

（何、これ？）

それらが何を意味しているのかは全く分からなかったが、一つ決意した事がある。誰かを守る事が出来る力なら手に入れたい、と。

（結ぶよ、その契約。貴方の願いを私が叶えてあげられるかは分からないけど、それでいいなら）

女性はハッと我に返った。周囲を見回してみると特に変わった事は無く、先程の奇妙な体験をする寸前に少女に腕を掴まれたかと思っただが、その少女も変わらず横たわっている。結局何があったのか、それとも自分の意識が一瞬飛んでいただけなのか分かりはしなかつ

た。だが不思議にも自分は守るための力を手に入れたという事だけは理解出来ていた。

「あとで迎えに来るから」

せめて遺体だけでも丁重に葬ってあげたいと、誰にも届かない言葉を告げながら女性は空へと上がっていく。

ある程度の高さまで達したところで上昇を止めて周囲の状況を確認する。相変わらず仲間とロボットとの戦闘は継続しており、状況は四対六程度で自分達が不利だった。

「局員は全員地上へ降りて下さい。あとは私が一掃します」

『しかし、いくらエースオブエースでもこの数相手では』

「大丈夫です。直ぐに終わらせます」

『りよ、了解』

モニター越しに女性の強い意志の宿った瞳を見た通信相手は『本当にいいのか?』と、戸惑いながらも了承の返事を返した。そして次々に仲間が降下していき、十数秒後には空に居るのは女性とロボットだけとなった。

「レイジングハート、デivainバスターエクステンションをお願い」

<Divine Buster Extension? What do you intend to do?>

「説明は後。今は私を信じてレイジングハート」

<If you say so.>

「ありがとう、レイジングハート」

<Yes, I believe you anytime. Divine Buster Extension.>

女性は杖に話しかけた後、それを天へ向ける様に掲げた。足元には桜色の巨大な魔法陣が展開し頭上には同じく桜色をした球体が次第に膨れ上がっていく。

こんなことをしているのだから目立って仕方がない。ロボット達は女性に群がる様に集まりだした。その数は数十。一人で相手にするには厳しい数だ。だというのに女性の顔には余裕の表情を浮かべているようにさえ見受けられた。

「デivainバスターーーーーー!」

発射される寸前に女性の左目には鳥の様な模様が浮かび上がった。

そしてどの方向へ発射されるのかと思えば、その光球からは何本もの光の筋が四方八方へと伸びていく。それが周囲のロボットを全て飲み込み、光が収まった時にはロボットは一機たりとも残っていなかった。

「・・・終わった？」

<There is not the reaction nearby.>

「そう、ありがとう」

<Still, I was surprised. Magic like that during when?>

「詳しい事は後でね。早くあの子の所に行かなきゃ」

<I understood it.>

ロボットの反応が消えた事を確認すると、その女性は再び少女が横たわる場所へと降りて行った。

「あれ？」

先程の場所に降りたのは良かったものの、そこに横たわっているはずの少女の遺体は無かった。彼女が流した血や、胸を貫いた槍は

探すまでも無く視界に映っているが、どうしても彼女の姿だけは見つけられなかった。

「どうして？ 一体何が・・・」

「大丈夫ですか高町一尉！」

「え？ あ、はい。私は何とも」

「ですがバリアジャケットにこんなに血が」

「これは私のじゃないんです。それより黒い服を着た緑の髪の女の子を見かけませんでしたか？」

自分の周りに何人もやって来た仲間に問いかけてみても誰も見ていないという。確かに胸を貫かれて息絶えたというのに、一体何処へ消えてしまったというのか。もしかしたらと思い、救急隊に問い合わせてみるがやはりそちらも保護していないし、見ていないという返答だ。しかしこうして何時までも考え込んでいる訳にもいかず、彼女の事を気にしながらも他の隊員達と共に救助活動を始めるのだった。

この女性——高町なのはと緑色の髪の少女、そして此処とは別の場所——臨海第八空港での二つの出会いが未だ未解決である二年前の事件に繋がることをまだ誰も知り得なかった。

STAGE 01 王のチカラ（後書き）

ようやく一話目を投稿できました。

課題とか課題とかゲームとかで忙しかったんですよ。

そして先に投稿するはずだった鉄の女王は未だ・・・

次は必ずそっちを更新します。てかさっちするまでこっちは書き溜める程度にしておかないと。

感想を頂けるとバサラ技ゲージと戦刻ブーストゲージが増加します。

（笑）

では。

STAGE 02

折れない ツバサ（前書き）

今回は男前の・・・
感想頂けると嬉しいです。

STAGE 02

始まります。

時は少し遡り、高町なのはが自宅にて例の少年に宛てた手紙を若干唸りながら書いている頃、ミッドチルダ北部に位置するベルカ自治領内に建てられている聖王教会本部の駐車場に一台の黒い車が止まっていた。

少し話がずれるが、そもそも聖王教会とは管理局と同じく危険なロストログアの調査と保守を使命としている宗教団体であり、聖王教会の依頼を受けて管理局が動いていたり、管理局の任務に教会が協力するなど基本的に管理局とは良好な関係を築いてはいるものの、管理局に所属しているという訳ではない。

また次元世界で最大規模の宗教組織であり各方面へに対し大きい影響力を持っている。なぜ此処まで信徒が多いのかというと、聖王教会は他宗教に比べ禁忌や制約が少なく、それらが緩い事がかなり影響している。

ちなみに周辺の景観が良いことから観光地としても有名で、若者の結婚式場としても人気があったりする。

そして聖王教会は独自に『教会騎士団』という戦力を保有しており、約三年前に起きた世界を揺るがすほどの大規模事件・JS事件においてスカリエッティラボ攻略戦に出撃している。この『教会騎士団』には管理局にも籍を置いている『カリム・グラシア』というプロフィール・シュリフテン騎士が所属しており、彼女の持つ稀少技能『預言者の著書』は最短

で半年、最長で数年先の未来を詩文形式で書き出した預言書の作成を行う事が出来る。

ただしこの能力は二つの月の魔力がうまく揃わないと発動出来ないため、ページの作成は年に一度しか行う事が出来ない。そして預言の中身は古代ベルカ語で記され、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章である事に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度でしかない。

しかし大規模災害や大きな事件に関して的中率は高く、管理局や教会からの信頼度は高いのも事実だ。また、これは未来予知ではなく世界中に散在する情報を統括・検討し、予想される事実を導き出すデータ管理・調査系の魔法技能である。

さて、聖王教会やカリム氏の能力・預言者の著書についての説明を終えたところで話を戻そう。そもそもこんな長つたらしい説明をしたのも、駐車場に止めてある車の持ち主が彼女に会いに来ているからである。というのもJS事件解決後辺りから新たな予言書が作成され、最近になって漸く解析が進みだし、それをいち早く知るために此处へとやって来たのだ。

そしてその人物は現在、騎士・カリムとティータイムを取っていた。もちろん遊んでいる訳では無くカリムなりのもてなしである。

「それにしてもまさかこんな早くに来られるとは思っていませんでしたよ、フェイト執務官」

「迷惑かとも思ったんですけど、何かこう悪い予感がして」

「迷惑だなんてとんでもありませんよ」

カリムと話をしているのは長く、美しい金髪を持ち黒い制服に身を包んでいる女性。彼女は執務官として高い評価を得ており、『エースオブエース』と呼ばれる高町なのはの親友にして彼女に並んで有名な人物、フェイト・Ｔ・ハラウンその人である。

「預言書の内容をお教えするのは全然構いませんが、まだそれほど解析が進んでいないのでお教えする事が出来る事は少ないのですが」

「構いません。どんなに少しでも、小さな事でも知っておきたいんです」

「分かりました。では早速お教えしましょう」

カリムは一度目を閉じ、再びゆっくりと開く。閉じる前と後とでは明らかに表情が違っている。優しい笑みを浮かべていた顔は一転、これ以上ないほど真面目なそれへと変わった。

「天駆ける数多の鎧と尽きぬ欲望のなずきが交わる地、円を描く鎧の元、法の塔は再び虚しく焼け落ち、数多の海を守る法の船も砕け散る」

「それって」

「お気付きの様ですね。フェイト執務官の思っている通り、スカリエッティの時の予言に極めて酷似しています」

「その続きはありますか？」

「いいえ、現在は此処までしか解析が出来ていませんし、解釈ミスもあると思います」

「そうですか」

「まだあの時の様な悪夢になると決まった訳ではありませんし、そう落ち込まないで下さい」

俯くフェイトにカリムはそういうものの、スカリエッティ時の予言に酷似しているという事はあの時と同じ規模か、それに近い規模での事件が起きてしまうと考えてしまうのも無理は無い。

「最近どうですか？何か変わった事とかあったりはしませんか？」

沈んだ表情を浮かべるフェイトの気を少しでも紛らわせればと思ったカリムは多少強引ではあるものの話を全く別の方向へ変える事にした。

「最近ですか？そうですね・・・特には無いですけど、今日はなのはがお休みなんだそうです」

「まあ、なのはさんが？だったら此処に招待すればよかったですね」

「私もそう思っただんですけど、毎日教導で疲れてるだろうしヴィヴィオもいますから。だからゆっくり休んでヴィヴィオと一緒に過ごしてくれたら良いかなって思いました」

「そうですね。なのはさん『毎日教導でヴィヴィオに構ってあげられない』って言うてましたし」

どうにか話題の方向転換に成功し、カリムは内心少しホッとしていた。無論、彼女の気遣いにはフェイトも気付いておりそれに便乗することで沈みかけた空気を戻そうとしていた。

「そうそうフェイトさん、この後少し時間はありますか？」

「え？あ、はい。大丈夫ですけど何かあるんですか？」

「ええ、ピザを焼いたのですがどうかと思ひまして」

「凄いですね。ぜひ頂きます」

「ではお待ちしますので少々お待ちを」

カリムが笑顔を浮かべて部屋を出ていくと、フェイトは窓の外に見える美しい景観へと視線をやりながら再び先程の予言の内容に思考を巡らせ始めた。

（キーワードは『天駆ける数多の鎧』に『無限の欲望のなずき』、それに『円を描く鎧』っていうのも気になる。でも何を意味しているのかまでは分からない）

気になるキーワードがいくつかあったが、これらだけでは一体何を指しているのかさっぱり分からない。しかしこの予言は既に管理局も聖王教会も目を通しており、専門の解析チームまで存在している。今更自分がちよつと考えた程度で何か出る筈も無いと、納得はしていないが一応の理解をし、この場で考えるのは止めた。

（最近忙しかったからあまり考えてなかったけど、あれからもう二年が経つんだよね）

預言の事について考えるのは止めたが、思考の海から戻って来た訳ではなかった。それどころかどんどん深く潜っていく様にすら見受けられた。そして頭に浮かんでいるのは一年と少しの間一緒に居た大切な仲間の事。

（MIAってことで探索を打ち切られたけどきつと生きてるよね）

「お待たせしました」

「・・・・・・・・」

「フエイトさん？」

「・・・えっ！？あ、カリムさん。何時の間に」

フェイトは彼の事について考えていたのだが、自分も驚いてしまう程かなり深く物思いに耽っていた様でピザを持ったカリムが部屋に入って来たのにも全く気付いておらず、彼女に声を掛けられ思考が現実に戻って来た時は心底ビックリした様な顔をしていた。

「今し方戻ってきたところですよ。それにしてもずいぶん熱心に何かを考えていらしたようですが」

「スザクの事を思い出していました」

「スザクさんですか？」

「はい」

カリムは既に八等分されたピザを丸いテーブルに置き、今度はコーヒーを淹れながらフェイトが何を考えていたのか問いかけた。大方預言の事でも考えていたのだろうと踏んでいたのだが、その予想は見事に裏切られた。

カリムはスザクに対して『強い意志と覚悟を持っている少年』という印象を持っている。彼女自身、彼に会った事は僅かに二、三回程度のものだが、実に的確に『枢木スザク』という人物を捉えていた。

「MIAってされちゃいましたけど、私は絶対に生きてるって思ってます」

「私もそう信じたいですね。今更なんですけど、彼の第一印象がとても危険な少年だと思ったんです」

「え？スザクがですか？」

カリムのカミングアウトにフェイトは『それは心外だ』とでも言いたげな表情になる。自分自身はスザクの第一印象がそのようなものでは無く、そもそも危険だとすら思った事がない。自身を顧みずに戦うのは危険だと感じた事はあるが、それとカリムが言った『危険』というのはニュアンスが違ってしている事くらい考えるまでも無く分かることだった。

「彼の眼を見た時に感じたんです。間違いなく躊躇なく人を殺せる、いえ殺してきた眼だと。ですが少し話してみるとそれは正解であり不正解だという事が分かりました」

「どういう事ですか？」

「話をしている時はずっと彼の眼を見ていたんです。その時に最初に感じたものは彼の強い決意と覚悟から来ているもので、同時に優しさも宿っているという事も感じました。ですから直ぐにその認識を改めましたよ。・・・さて、食べましょうか。冷めてしまいます。最近ピザを作ることに凝ってまして。中々の力作ですよ」

「あ、はい。頂きます」

（今はスザクに対して悪い印象を持つてる訳じゃないみたいだし、良かった）

改めてピザを見るとピザ屋にも負けなくらい本格的に作られている。トッピングはスライスカットされたトマトにマッシュルームやピーマン、オニオンなど野菜を多数使用しており比較的ヘルシーに作られている。八等分されている内の一つを取ると見事にチーズが糸を引く。これこそピザの醍醐味の一つだろう。

「凄く美味しいです。野菜がメインだからコッテリしてないですし」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

フェイトが絶賛しカリムの表情も自然と緩む。誰だって手間暇かけて作った物を褒められるのは嬉しいだろうし、少なくとも褒められて悪い気をするなんて人はいないだろう。いるとすれば余程の変わり者だ。

二人がピザを食べている頃、ミッドチルダのとある喫茶店を訪れていた親子の母親の方が『フォーエバー・ロイヤルトウラ・マリッジピザ』なるものを発見していた。ちなみに近い将来、その母親はこの謎のメニューに否応無く関わることになるのだが、フェイトが関わることは無く精神的な意味でも金銭的な意味でも助かることになるのはまだ先のお話。

フェイトが一切れ目のピザを食べ終わり、コーヒーを口に運んでカップを戻したと同時に、突然勢い良くドアが開かれた。二人が反射的にドアの方へ顔を向けると、開いたドアからは二人の良く知る女性が焦った顔をしながら足早に歩み寄って来た。

「あ、シスター・シャツハ」

「どうしたの？」

フェイトに『シスター・シャツハ』と呼ばれた女性は本名をシャツハ・ヌエラという。彼女は聖王教会に所属するシスターであり、教会から出ることのないカリムの補佐的存在で秘書を務めている。

此処には居ないがカリムの義弟であるヴェロツサ・アコースの教育係を務めていた事もあり、マナー等はちゃんとあるはずの彼女がノックもせずに飛び込んで来るとはそれほど火急の用件があるということだろう。

「騎士・カリム！大変に空港が居てロボットです！」

「・・・シャ、シャツハ、落ち着いて。そ、それでは何が言いたいのか分からないわ」

「す、すみません」

「・・・・・・・・っ」

シャツハが何か焦っているのは分かるが、二人は心の中で『こんな間違いする人現実で初めて見た』とツボに入ってしまった、込み上げてくる笑いを抑えるのに苦労していた。そうとはつゆ知らずシャツハは二、三度深呼吸をして落ち着きを取り戻していた。

「すみません。それで先程の事ですが、臨海第八空港に所属不明のロボットが多数出現しました」

「臨海第八空港に？」

「今のところ民間人への被害はありませんがこのままでは」

「私が向かいます」

「ですが」

「此処からならそう時間も掛かりませんから」

「分かりました。ではお願いします。シャツハ、あなたもお願い」

「はい」

「地上本部へは私から連絡を入れておきます」

「お願いします、騎士・カリム」

臨海第八空港とは七年前に起きた火災の現場であり、今現在も尚

封鎖されている筈の場所である。場所はミッドチルダ北部に位置しており、同じく北部に位置する聖王教会からならば地上本部から向かうよりも遥かに早く到着する。即断するにはそれだけで十分だった。そしてフェイトとシャツハは臨海第八空港へと向かった。

全身が気だるい。身体が重く思うように動かない。しかも地に足が着いている様には感じられない。浮遊感、というよりは落下しているような感覚の方が強い。そんな感じの良く分からない感覚を感じる中、思い瞼をゆっくりと開けていく。

数秒という時間を掛けて開かれた眼に映ったのは見渡す限りの水色と白色だった。左右に首を回してみても見える色は変わらない。続けて下を向くと感じていた通り足元には何もなく、やはり同じ色が続いている。

「・・・どうなってるの？」

ポツリと呟いてみるがそれで解決するはずもなく、状況は何も変わらない。眼が覚めたばかりなためなのか、全身が気だるいからな

のか、はたまたその両方なのか、いずれにせよ思考が上手く働かず状況がまったく掴めない。

前にも左右にも下にも何も無かったため、あと確認するとすれば上か後ろしかない。とりあえず下を見た流れで上を見てみる事にした。すると視界に映ったのは――。

「・・・は？」

思わずそう言ってしまふ程驚く光景だった。その人物の眼には頭上の離れた場所に空港の様な大きな施設が映っていた。しかしその人物は意外と冷静だった。自分が感じている感覚や頭上に大地らしきものがある事を考えると、導き出される結論は一つしかなかった。

「私、落ちてる？・・・って冷静にそんな事言ってる場合じゃない！何とか着地しないと！――って、え？」

その人物は自身の現状を認識して尚平静を保っていたが、一つだけ全くの想定外な事があった。

「何よコレ。鎧？」

自身が何時纏ったかも分からない鎧をその身に纏っていたのだ。体が重く感じたのはコレのせいかと思ったが、そうでもないらしい。

重く感じるのは本当に身体が疲労感などを感じているからのようだった。

「でも何かコレ見覚えがあるような・・・まさか！？でもそんな事」

自身が纏っている鎧について思案している間にもどんどん大地は迫っており、もうあまり時間は残されていない。

「考えるのは後、まずはちゃんと着地しないと」

身体を大の字に広げて逆さまになっていた身体を地面と平行へと近付ける。それに意外と手間取ってしまい大地は目の前に迫っている。

「上手く行ってよ」

成功を祈り、施設から空へと突き出た二つの塔の様な建物に両肩にある鋭いパーツが前方を向き勢い良く発射された。それらは建物の最上部に突き刺さり、繋がっているワイヤーを巻き取ることで一気に近付いていく。落下のエネルギーがあるため完全に巻き取るとどう考えても危険すぎるため、ある程度巻き取ったところでそれを止め、振り子の重りの様にそのまま建物の大きな窓へと両足から突入した。

窓ガラスが大きな音を立てて砕け散り、ガラスの破片で全身のあちこちらを切ってしまうが深くは無かった。着地も足の装甲に付いていたローラーを使って滑る様に着地したため大怪我をすることも無かった。しかしぶっつけ本番で良くこんなスタントが出来たものだ。普通なら縮みあがってまともに身体が動かないだろうに。

「ふう、上手くいった」

この人物——紅い髪に紅い装甲、その下には紅を基調としたボディースーツらしきものを着用している少女は改めて自分の身体を見回す。全身にあると思っていた装甲だが、右腕にはまともに装甲が残っておらず、左腕も右腕に近い状態。鳥の頭部を思わせる胴体や肩、足のそれは残っているがボロボロであることに変わりはない。無かった。

「やっぱり間違いない。これ・・・紅蓮聖——何っ!？」

突然、少女の耳に爆発音が届いた。外から聞こえたその原因を確かめるべく、すぐさま自分が突き破った窓ガラスの元へ向かい外を見渡した。

「あれは・・・まだ終わってないの? ううん、違う。あのナイトメア小さい。人間と同じくらいのサイズだ」

爆発音が起きた原因は多数のロボットがこの施設を攻撃しているからだ。そしてこの紅い少女もまたそのロボットを『ナイトメア』と呼称した。あの緑の髪の少女と何らかの繋がりがあるのかもしれない。

「考えるのは後でも出来る！まだ終わって無いなら私がやらなきゃ。こんな状況ありえないし、夢かもしれないけど、それでもあいつ等は倒さなきゃいけない。敵がどれだけ居ようと！」

自らを鼓舞し、突入した大きな窓から飛び出した。空を飛べないため先程と同じように落下を始めるが再び両肩のパーツが回転して前方を向き、今度は少女の掛け声と付きで発射された。

「スラッシュハーケン！」

それは前方に居た群青色をした二機の胸部に突き刺さり、即座にワイヤーを巻き取る。すると落下を始めていた少女はそれを止め、逆にその二機に接近していく。

ワイヤーを完全に巻き取る直前に『スラッシュハーケン』と呼ばれたパーツが抜けて両肩へと戻った。しかし勢いは残っており、そのまま二機のロボットへと到達した。それらを踏み台にして跳躍し、背部から鎧通しと十手を融合させたような形状をした小型ナイフを逆手に抜き取ると、跳躍先に居たロボットに前方宙返りから小型ナイフを振り下ろした。

空中に居る力を失い、落下していく少女の頭上では三つの爆発が起きた。だが少女はそれには目もくれず、右肩のスラッシュハーケンをつい先程まで自分が居た建物に再度発射した。

「はっ！」

ワイヤーを巻き取りつつも落下していく過程で擦れ違い様に小型ナイフを振ってロボットの頭部を斬り落とした。そして建物に刺さっていたスラッシュハーケンを回収し、自身の下方に居たロボットに飛び乗るかの如く着地する。

落下のエネルギーに耐えられなかったのか、それとも一人と一機分を飛行させる出力が無いのか、少女とロボットは地上へと落ちていく。ロボットが何とか逃れようともがいているが、如何せんポジションが悪い。まるでサーフボードにされたかのように成す術無く落ちていくしかなかった。

地面に激突する前に少女はロボットから飛び降り、足にあるローラーを使用して再び滑る様に着地した。踏み台にされたロボットはいえ、言うまでも無く地面に激突するという結果から逃れる事は出来ず、文字通り木端微塵に爆散した。

「はあはあ、やっぱり身体が重い。こんな状態で相手にするのは中々きついわ」

そのような状態であるにも拘らず僅か数秒で五機のロボットを破

壊してしまった。如何に少女の能力が高いか伺える。しかし身体が重いというのは本当の様に苦悶に満ちた顔をしている。

この数秒の出来事にロボット達が少女を敵だと認識するには十分すぎた。もしかしたらこれが無くても敵だと認識していた可能性は十分にあるのだが。

そしてロボット達はこの少女を倒すために彼女の元へと集まり始めた。

「くっ、この数・・・せめて飛翔滑走翼があれば。無い物ねだりしても仕方ないか。ほら、掛かって来な！」

空に浮かんでいる群青色のロボット達が手にしているライフルと
思わしき物から何発もの光が生まれる。それを蛇行して器用に避ける少女の元に大型の槍を持った紫のロボットが突っ込んで来る。

（この光、銃弾じゃない？何なのこれは）

少女がそんな事を考えている間にも紫のロボットはお構い無しに突っ込んで来る。少女を貫かんと槍を突き出す。

「ああ、もう！考えてるのに邪魔なのよ！」

少女は身体を右に旋回させながらロボットの右側へと回避し、擦れ違い様に小型ナイフによる一閃を叩き込んだ。ロボットはそのまま直進をし続け、施設に激突して爆煙の中に姿を消した。

尚も続く射撃に回避行動を取らざるを得ない。そして先程の攻撃で学習したのか、突っ込んで来るロボットはいなかった。身体が気だるく重い上に数では圧倒的不利、その上こうなってしまうと分が悪過ぎる。

『ここまでか』と彼女が死を覚悟したその時、十前後の金色の光がロボット達を貫き一撃の元に撃墜していく。

「な、何？」

少女の眼に映り込んだのは斧らしき物を持った美しい金髪の女性と、トンファーにしか見えない物を持った赤紫の髪をした女性だった。ちなみに赤紫の髪の女性は何故か金髪の女性に抱きかかえられていた。

「あの娘、怪我をしているようですね。それにかなりの衰弱も見られます」

「さっさと終わらせましょう、シスター・シャッハ」

「はい」

<H a k e n S a b e r . >

「はあああああ！」

斧であるはずの武器に金色の刃が形成されたかと思うと、金髪の女性は斧を投げるかの如く振るった。すると金色の刃のみが分離し、ブーメランの様に回転してロボット群に突入して次々と斬り裂いていく。

「烈風一迅！」

シスター・シャツハと呼ばれた女性もトンファーであるはずの武器で、地を駆けるロボットをいとも容易く切断・破砕していく。紅い少女はその様子に見惚れているのか微動だにしない。

「仕上げだよ、バルディツシュ！」

<Yes,sir. Plasma Lancer,Get set.
Fire.>

金髪の女性の周囲に十数発の金色の光が出現する。物凄い勢いで発射されたそれらはたったの一発たりとも外れる事は無く、全弾が命中してあつという間にロボット群を全滅させてしまった。

「大丈夫ですか！」

周囲にロボットが居なくなった事を確認した金髪の女性は紅い少女の元へと降り立ち、赤紫の髪的女性も駆け寄って来た。少女に声を掛けるものの彼女は俯いており表情は伺えず、一切の返答が無い。そしてゆっくりと身体が傾いていく。

「危ない！」

金髪の女性が咄嗟に抱き止め、少女の顔を見ると瞼は閉じられ死んだように眠っていた。一体何時から意識を失っていたのだろうか。そして立つたまま意識を失う程の強い想いがこの少女にはあったのか、それは分からなかったが、こんな状態で一人戦っていた少女に今はただ、ゆっくり休んで欲しいと思っていた。

「フェイト執務官、至急この娘を聖王医療院へ」

「シスターは？」

「私はもう少し周囲を見て回ります。それに此処に到着した本部の方々に説明もしなければなりません」

「分かりました、お願いします」

金髪の女性は少しの間少女の鎧を見つめた後、彼女の胸に手を置いた。すると少女が身に纏っていた鎧は一瞬にして消え去り、女性

の手には紅いUSBメモリの様な物が握られていた。それをポケットにしまつと少女をしっかりと抱きかかえ、空へと上がって行った。

STAGE 02

折れない ツバサ（後書き）

や、男前少女の回でした。

これedyouやく二人がこの世界に來た訳ですけども、さてどうしようか。

魔女の方は大体決まってるのですが、男前少女の方はまだ決まって無かったり。

それと、時々で良いのでタグを見てみてください。カオスなタグが追加されている時がありますw

それではまた次回お会いしましょう。

鉄を読んでくれる方はそっちで（次は多分鉄を投稿するはずですので）。

STAGE 03 邂逅（前書き）

ほ、ほんとにお待たせしました。約一か月ぶりですね。

STAGE 03 邂逅

リビングには少し大きめのテーブルが置かれており、そこでは明るい緑色をしたロングストレートの髪を垂らしている少女と、少しウェーブの掛かったプラチナブロンドの、これまたロングヘアの車椅子に座った少女が何やら作業をしている。車椅子の少女の両目は閉じられており、盲目か、あるいは他の何らかの理由で目が開けられない事を伺わせる。

彼女等の手元を見ると、赤や緑、水色等の色とりどりの紙が置かれている。それらはこの国——日本に昔から存在していた『折り紙』という奴だ。これは一枚の紙を何度も繰り返して折り、時には開いたりして最終的に『何かを模った物』を作り出す、一種の伝統工芸である。

日本は七年前に超大国・神聖ブリタニア帝国との戦争に敗れ、帝国の属領となり、自由と、権利と、そして名前を奪われた。ARE^{アリ}A11。その数字が敗戦国日本の新しい名前だった。

しかし名前を奪われようと、自由をや権利を奪われようと、古くから伝わる伝統を奪う事は出来ない。《折り紙》のように、生活必需品として何処にでも当たり前前のようにある紙だけで出来てしまうようなものなら尚更に。

そして今、彼女達はその《折り紙》をして遊んでおり、テーブルの上には兎や鶴などが折られていた。

「お前は上手だな。最近折り始めただけなのだろう？」

「はい。でも小夜子さん比べたらまだまだです」

「小夜子・・・成程、確かあいつは日本人だったな」

「ええ」

「ただいま、ナナリー」

二人の少女が折り紙をしている最中、黒い髪をした長身の少年が入室してきた。『ただいま』と言っている事から外出先から帰って来たのだろう。

少年の存在を認めた緑の髪の少女は、『ただいま』と言われればおそらく誰もが返すであろう返事を返した。

「お帰り、ルルーシュ」

しかし、その少女を視界に入れた黒髪の少年——ルルーシュはまるで幽霊でも見るかのような、とどのつまり、驚愕の表情を浮かべて微動だにしない。そして数秒の後にようやく再起動に成功した。そして驚愕の表情が浮かんでいた顔は、まるで鬼の様なそれへと変わり、少女を睨みつけて言い放った。

「誰だお前は？」

その言葉が耳に届き、頭が理解するまでおよそ三秒の時間を必要とした。少女からすればただ普通に返したただけであり、『誰だ』なんて言われるとは微塵も思っていなかった。その証拠に、今度はその少女が驚愕の表情を浮かべている。

「私は冗談はキライだ。知っているだろう？」

「お兄様のお友達ではないのですか？———さんはそう仰ってましたけど」

「ナナリー、俺にこんな知り合いは居ない」

「何を言っている、私だぞ？———だ」

「自分の名前も名乗れないのか？」

「ま、待てルルーシュ！」

緑の髪の少女は急に焦りだす。それもそのはず、ルルーシュが彼女に拳銃を突き付けたのだ。妹のナナリーの目は相変わらず閉ざされているため、声だけでは今何が起きているのか分からない。分かるのは一つ、ルルーシュが相当怒っているということくらいだろうか。

（何故だ。何故ルルーシュは私分からない。それに何故私の名前が聞こえていない）

「今すぐ出て行け。そして今後一切俺とナナリーに近付くな」

「待て！私は――」

「しつこい」

ルルーシュが引き金を引いた瞬間、少女の世界は真っ白に染まった。

ロボット群の襲撃から三日が経過していた。それだけの日数が過ぎても、守れなかったあの少女の存在が高町なのは脳裏から薄れる事は無かった。むしろ時間が経てば経つほど色濃く浮かび上がってくる。

デイベインバスターエクステンションを不思議な力によって四方八方に拡散発射してロボット群を蹴散らした後、廃棄都市区画で建

造物の解体作業を行っていた民間人の救助にも参加した。それが終わった後で救急隊員達にも確認を取ったが、緑の髪の少女の記録は無かった。その後も周囲を飛び回って探してみるものの、やはり発見には至らなかった。

そして現在、彼女本来の仕事である教導を行っているのだが、その最中であるにも拘らず頭にはその少女の事ばかりが浮かんていた。

（あの子、本当にどうなったのかな。血の痕跡はあったからお化けだった、とかじゃないし。でも確かに胸を槍に貫かれてた。普通なら即死。動ける訳が――）

「・・・た・・・きょう・・・ん」

「え？」

「高町教導官、どうかされましたか？」

いつの間にか少女について深く考え込んでしまっていた。意識を現実に戻されると、目の前には少し前に出した課題をクリアした教え子たちが心配そうになのはを見ていた。

「あー、ううん。何でも無いよ。ごめんね教導の最中にボーっとしちゃって」

「いえ、お体の具合が悪いのであれば」

「大丈夫、そんなこと無いから。さ、続き続き！」

「は、はい！」

なのはは身を入れて教導を行うために、存在感をより一層強めている緑髪の少女を無理矢理に頭の片隅へと追いやった。そこまでやってもやはり意識から彼女が消える事は無かった。そして『どうしてなの？』と考え、振り出しへと戻ってしまう。

何故ここまであの少女の事を考えてしまうのか、それがなのはには全く分からなかった。今までだって目に映った人の全てを助けて来れた訳ではない。確かにそんな時はしばらく被害者の事が頭から離れず、『もつと早く助けられていたら』なんて考えることもある。

忘れこそしないが、確実に時間の経過とともに薄れては行く。しかしあの少女に関してはそれとは正反対なのだ。教導しんどうに集中しなければならいと分かつてはいても、どうしても少女に意識が行ってしまう。結局この日の教導中もなのははボーっとした状態が続いていた。

ハッと目を開けると同時に、魚が飛び跳ねるかの如く上半身を勢いよく起こした。周囲を見回せば在るのは隠す気など微塵も感じられない、剥き出しになったコンクリートの壁がただただ視界を埋め尽くしていた。

「・・・夢、か。まさかあんな夢を見るとはな。夢の中とはいえ随分な嫌われようだ。笑ってしまいうくらいにな」

自嘲的な笑みを浮かべる少女は見たくも無い夢を見ていたせいなのか、心拍数が僅かながら上がっている。少女が見たものは所詮ただの夢にしか過ぎず、現実には何の影響も与えない。その事をよく理解している彼女の心拍数は直ぐに平常に戻った。

「まさか私に嫌そんなわれる事を恐れる感情があつたとはな。いや、アイツだからこそ、と言ったところか」

少女が一人で納得していると、薄暗いこの部屋の窓ガラスすら無い窓から柔らかな光が差し込んできた。それが朝を告げるモノだと理解するのに時間を要する事は無かった。

「この服はもう駄目だな。中々気に入っていたんだが」

ここで少女は此処までの経緯いきさつを思い出した。あのロボットが投擲した巨大な槍によって胸を貫かれ、一度は意識を手放した。しかし

あの白服・茶髪の女性に強い意志を感じ取り、王の力を与えた。しかし周囲に居た人間は彼女一人では無かったため、あの状態で生きている事を知られないためにあの場から立ち去った。

そして今、即死級の攻撃を受けたにも関わらず平然としているし、胸部には傷跡一つ見つからなかったが、服だけは穴が開いている。そのせいで少女の背中、そして適度に自己主張している二つの胸の膨らみは丸見えになっていた。破れた服がそれらの頂を辛うじてカバーしているのがせめてもの救いだろうか。

「替えの服は持っていないしな、どうしたものか。私は別にこれでも構わんが・・・捕まる、だろうな」

その後、暫くどうするか考えていた少女は立ちあがってお尻を軽く叩いて埃を落とし、部屋の片隅に置かれている古びたロッカーを物色しだした。

廃棄都市区画だからこそ、建造物の中にある不必要となったものは一緒に破棄するためにそのまま残されていた。そして幸運にも白いカッターシャツを発見した。新品と呼べるような状態では無いが、綺麗に折り畳まれている事から、洗った後の物であると推測が出来た。おそらくここを利用していた人物が忘れていった物だろう。

「ま、これでいいだろう。さて、次の問題だな」

少女は自分の身体を見下ろす。胸部を貫かれたのだから当然大量

に出血している訳で、破れているワンピースの様な黒い服や上半身には赤い色がべっとり付着していた。しかもそれが固まっているのだから、変な感覚がして落ち着かない。しかし不幸中の幸いという奴で、白いホットパンツやブーツの付着量は少量であつたため、洗えば何とかなる程度で済んでいた。

だが、何処で洗えば良いのかという話になる。この場所は見るからに廃棄されている。そんな場所に水が引かれているとは到底思えなかった。しかし他に当ても無く、ダメ元でこの建物内の水場を探すためにこの部屋を後にした。

教導が終わつたのはもう夜も更ける頃。なのはの教え子たちは地獄の様な教導を終え、重い体を引きずりながら部隊の寮へと引き上げて行つた。対して教導官殿はそれほど疲れた顔をしている訳でも無く、相変わらず例の事を考えていた。

そんな状態でも彼女の足は勝手に歩いて行き、とある一室のドアの前で止まつた。

「・・・あ」

足が止まったことによって自分が目的の場所に到着した事に気付いた。此処まで来るともうかなり重症だろう。もしこんな状態で戦場に出れば危険極まりない。もちろんなのはだつてそんな事は分かっているが、それでも勝手に頭が考えてしまう。

「高町です」

「おう、入ってくれ」

「失礼します」

入室したなのはを出迎えたのは、色素の薄い茶髪のショートヘアをした初老の男性。鍛えられた体は長身の彼のスタイルをより良く見せている。

「それでどうしたんですか？」

「いやなに、三週間の教導お疲れさまって言おうと思っただけなんだがな」

「それならまだ明日が残ってますけど・・・」

「明日は俺、本局に行かなきゃいけなくてな。言えそうになかったから今の内に、つてな」

「あ、そうなんですか」

なのはが話しているこの人物はこの部屋の主にしてこの陸士部隊の部隊長——クルト三佐。部下を大切にする人で、父親の様な人でもあり、当然この部隊に所属している局員からはとても慕われている。

そんな人であるのだから、他人の悩みなどを見抜くのが上手い訳で・・・。

「高町、何か悩み事でもあるんだろ？」

「え、と？」

「おまえさんの顔を見れば分かるさ。でかでかと書いてあるからな」

「そ、そんなにですか？」

「ああ」

今こんな話をするという事は、暗に『相談に乗ってやる』と言っている様なものだという事はなのはにも分かっていた。しかしなのはは、話していいのかどうか迷っていた。

あの少女が即死級のダメージを負って尚姿を消したという事は、生きているという事であるはずだし、管理局が欲しがらないはずが

ない。局員としてか、被検体^{モルモット}としてかは別として。

クルト三佐がそんな人物ではない事は分かっている、情報というのは案外簡単に漏れてしまうものだ。例の少女や自分が手に入れたあの未知の力の情報を守るためにも、それは避けたかった。そんな最悪の事態が浮かび、口を開けないでいるのは見たクルト三佐はゆっくりと口を開いた。

「高町、お前が何を悩んでいるのかは分からん。言いたくないなら言わなくてもいい。けどな、ちゃんと前を向いて歩けよ」

「・・・クルト三佐」

「そうやって下向いて囚われ続けると、色々見えなくなっちゃう。・・・俺が言いたいのはそれだけだ。悪かったな、こんな時間に呼び出してよ」

「いえ、ありがとうございました」

「明日も早えんだろ？ ゆっくり休みな」

「はい、失礼します」

なのはが一礼してソファから立ちあがりかけた時、クルト三佐は急に何かを思い出してなのはを引き止めた。

「ああ、そうだ高町。言うの忘れてたんだが、今日も例の集団の襲

撃があつたんだとよ」

「え！？場所は何処ですか？」

「海上だそうだ。一隻の客船が巻き込まれたらしいが、ゲンヤの所の娘が居る救助隊の活躍で乗客全員無事って報告があつた」

「あのロボットの集団の方は？」

「そつちなら首都航空隊が全部落としたとよ」

「そう、ですか。よかった」

救出に向かった部隊に嘗ての教え子、撃墜に向かった部隊にはおそらくあの人の部隊も加わっていると思つた。とにかく彼女等の活躍のお陰で犠牲者が出ずに済んだ事に胸を撫で下ろす思いだつた。

「お前さんは教導で知らねえと思つたから報告までによ」

「ありがとうございます」

「おう。じゃ、しっかり休めよ」

「はい。失礼します」

今度こそ退室したなのは、これからあの集団の襲撃事件が増加して犠牲者が出るかと思うと胸が痛かつた。だけどそれは絶対に防

いでみせると、強く誓うのだった。何故なら、守るための力は既に得ているのだから。

コンクリートが剥き出しになっている一室に水音が響き渡っている。音源を辿ってみると、狭い個室の中で緑の髪の少女がシャワーを浴びていた。

「それにしてもまさかシャワーが使えるとはな。水道が使えるばと思っていたんだが」

一糸纏わぬ姿の少女に頭上から冷水が降り注ぐ。欲を言えば温水がいいのだが、ここは廃棄都市区画。タダでシャワーが使えるだけで良しとすべきだろう。

そして彼女がシャワーを浴びている今現在に至るまで、多少の苦労があった。

—— およそ30分前

水場、というかとにかく血を洗い流せるだけの水を求めて建物の中を探索しだしたのだが、水場自体は直ぐに見つかった。少女が最初に居た部屋にシャワールームがあったのだ。

「なんだ、あるじゃないか」

早速水を出そうとレバーを回すが、反応がない。ただの屍のようだ。・・・いやいや、違う。無機物なのだから屍じゃない。このシャワールームは直ぐに諦めたが、同じような部屋があるかもしれないと思った少女は隣の部屋に入った。すると部屋は同じ構造をしており、やはりシャワールームがあった。直ぐにレバーを回すが、結果は同じだった。

「それにしてもこの部屋の構造・・・ホテルか？」

少女は気付いた。これほど同じ構造の部屋となると、ホテルの様な建物としか考えられない。となれば他の部屋にもシャワールームがあるはずだと。そうなれば彼女の行動は早かった。とにかく手当たり次第に部屋に入ってはシャワーのレバーを回す。ダメなら次にと。

そしておよそ30分。もうどれだけのレバーを回したか覚えていない。息も上がっている。これで駄目なら諦めるか、とこれが最後のつもりでレバーを回すと、終に少女が求めている物が頭上より降

り注いだ。

——そして今現在

さすがにスポンジやボディークリームなどの類は無かったため、固まった血を手のひらで擦って少しずつ落としていく。だが血が付着してから時間が経過しすぎているせいか、手のひらで擦ったくらいでは中々落ちる気配が無かった。その事に少女は苛立ちを感じているのか、表情は次第に険しいものへと変わって行く。

肌をなるべく傷付けまいと悪戦苦闘していたが、いい加減にイライラが蓄積された少女は爪を立てて掻き始めた。すると先程までのしつこさが嘘の様にみるみる落ちて行くではないか。それによつてイライラが解消されたのか、険しかった表情は緩和されていた。

それからおよそ十五分程度が経過しただろうか。赤さのレベルでいえば、真っ赤に染まっていた彼女の身体はうっすら赤味を帯びているという状態にグレードダウンしていた。

鏡に映した一糸纏わぬ自身から、それを真っ赤に染めていたモノが無くなった事を確認するとバスルームから出ようとして、重大な事実が付いた。

「しまった・・・タオルが無い」

そう、タオルが無いのだ。それが無いという事は体が拭けないということであり、服を着れないという結果に繋がる。

「隣は洗面所だったな。そこならもしかすれば」

明るい緑色の髪から水滴を垂らしながらバスルームを出ると、隣接している洗面所にてタオル発見の望みを掛けて手当たり次第に物色する。結果、タオルどころか何一つとして見つからなかった。

「使えんホテルだ」

廃棄都市区画にある建物なのだから、そんな物無くても当然である。むしろ冷水とはいえシャワーを使えた事に感謝すべきだとさえ思う。なのにこの少女ときたら、恩を仇で返す様な発言をする始末だ。これではこのホテルが可哀想過ぎる。

「仕方ない、乾くのを待つか」

少女はバスルームに戻ると浴槽に腰掛けた。シャワーを浴びる前は破れた服がギリギリで二つの膨らみの頂を隠していたが、一糸纏わぬ姿となった今はピンク色をした頂が堂々とその存在を主張していた。

それからおよそ十分後、少女の身体に纏わり付いていた水滴は蒸発して無くなっていたが、長い髪は簡単に乾く物でもない。まだ結構湿っていたが、それが乾くのを待っていると何時になるか分からないため、さっさと服を身につけ始めた。

ブーツに飛んでいた血は体を乾かしている間に簡単に洗い流しておいたが、ホットパンツは洗う訳にもいかなかったためそのままになっている。しかし幸いな事に、拝借したカッターシャツのサイズが少し大きかったお蔭で、その裾がホットパンツの血が付いている部分を見事に隠していた。

「これなら大丈夫だろう。さて、行くとするか」

地肌の上にカッターシャツ、下は白のホットパンツに白いブーツ、手には血の付いた破れた服を持つという何とも奇妙な格好でその場を立ち去って行った。

もうすぐ日付も変わろうかという様な時刻に、高級住宅地を思わせる一戸建てから一台の車が走り去って行った。後には長い髪をサイドアップにしている女性——高町なのはが残されていた。

その後、最寄駅までリニアールに乗って来たのはだが、さすがにこの時間に徒歩での帰宅はしなかったようだ。もちろんそれは

深夜に女性の一人歩きは危険だと思った訳ではない。なのはなら一人で歩いていて、オオカミ的な意味で襲われても全然大丈夫だろう。むしろ彼女を襲った人物の勇氣に敬礼せざるをえまい。

それはさておき、なのはが態々タクシーで帰って来たのは理由があった。別に動けなくなってしまうほど疲れていたとかそんな理由では無い。あの少女について考えていたら無意識の内にタクシーに乗っていた様で、気が付いたら既に車内だったのだ。

「はぁ・・・ホントに重症かも」

一応自覚はあるだけまだマシだろう。もし自覚が無かったとしたら、本当にどうしようもない。なのはは『情けないなあ』と呟きながらも玄関の扉を開けた。中へ入るとリビングの方から明かりが漏れているのが目に入った。

「あれ？アイナさんまだ居るのかな。それともヴィヴィオが起きてるのかな？」

いつものこの時間ならヴィヴィオは寝ている筈だし、アイナはとつくに返っているはずである。

ちなみになのはのいう『アイナさん』というのは、かつて存在していた機動六課の寮の寮母さんであるアイナ・トライトン氏だ。六課解散後はなのはとヴィヴィオの要請によって高町家のホームキーパーに転職し、寮母の時から継続して今現在もヴィヴィオの相手を

している。ちなみに六課に居た時から三年が経過しているため、彼女は三十六歳になっている。

話を戻すが、リビングから漏れている光を不思議に思ったのは直ぐにそこへと向かいドア開けた。

「おかえり、なのは」

「ママ！おかえりなさい！」

なのはの目に飛び込んできたのは、愛娘とテーブルの上に置かれた何枚ものピザ、そしてここ数日の間休みも無しに彼女を悩ませ続けている原因だった。

STAGE 03 邂逅（後書き）

ようやく魔女がなのはさんの家に出現しましたw
ちなみにどうやって此処へ辿り着いたのかは、次々回に出る簡単な
説明で明らかになります。

次回 STAGE 04 偽りのともだち

今後もしよろしく願います。
ではまた！

STAGE 04 偽りのトモダチ（前書き）

長らくお待たせしました。

気が付けば前回の更新が一月前・・・。

言い訳はあとがきに・・・。

10・9

誤字脱字修正と僅か一文だけ加筆しました。

10・10

一部表現の変更をしました。

ミッドチルダ北部に位置するベルカ自治領。ここには聖王教会の本部意外にも教会に付属している病院、聖王医療院が建てられている。また教会本部と同様に周囲の景観は良く、山に囲まれた自然豊かな土地である。

しかし教会本部とは違い、こちらはあくまで『病院』である。そのため観光に訪れたり、結婚式場として使われるということはまず無い。さて、それではこの聖王医療院のとある一室を覗いてみる事にしよう。

真っ白な天上、真っ白な壁、真っ白なベッド。部屋の中は、まるで天使の羽根を思わせるような純白で統一されており、清潔感が溢れんばかりの造りとなっている。

その純白の世界の中、ベッドの上では紅い髪の少女が静かに寝息を立てていた。開放されている窓からは午後の柔らかな日差しが差し込み、優しい風が少女の髪を揺らしている。

と、そのとき、一匹のテントウムシが入り込んで来た。フラフラと、まるで泥酔しているおっさんの様に蛇行する軌跡を描きながら飛ぶそれは、少女の鼻先にちょこんと留まった。6本ある足を懸命に動かしては少女の鼻の周囲を歩きまわっている。

「……………んん」

テントウムシが歩く事でそれが刺激となり、眠っている少女は僅かに反応を見せる。少女が少しばかり苦しそうに息を吸いだした。と思った次の瞬間――。

「クシュンツ!？」

テントウムシが刺激を与え過ぎたせいか、少女が大きなくしゃみをした。その勢いでテントウムシは少女の鼻先から飛ばされ、再び部屋の中をフラフラと蛇行するようにあっちへ行ったりこっちへ来たりしている。

「うゝんっ!はぁ・・・」

テントウムシから意識を戻してみると、自分のくしゃみで目が覚めたのである。少女が両腕を大きく広げて身体を伸ばしていた。空気を一杯まで吸い込み、そのまま呼吸を止めて頭も身体も意識を覚醒させる。2、3秒の後に吸い込んだ空気を全て吐き出し、広げていた腕からも力を抜いてだらりと垂らしている。

「よく寝た・・・、のかな?でも身体も重くないし、体調は問題なしね」

一先ず自分の体調を気にしてみたが、特に問題があるとは思わなかった。極めて普段通りの好調さをキープしていた。

「それにしてもここは一体・・・。ダモクレスでスザクと戦って相打ちみたいな形で決着がついて、ええつとそれから・・・。確か海に落ちたんだ。なのに・・・、私生きてる?紅蓮は機能停止して飛べなかったはずなのに」

自分がここに居る原因を探るためにごく最近、というか一番新しい記憶を辿ってみた。すると思いついたのは、空中要塞とでも呼ぶべき兵器である物の上で、白い人型ロボットと戦っている記憶だっ

た。

その決着と同時に少女が乗る紅いロボットも機能停止に陥り、遙か下方に見える海へと落下していった。

だから自分が生きている筈が無かった。あの高さから落ちれば、例えばロボットに乗っていたとしてもそれごと木端微塵になるに決まっている。だから少女は自分が生きている事が不思議で仕方ないと言いたげな顔をしていた。

「まあ生きてるってことは誰かが助けてくれたってこと・・・、かな。でも誰なんだろ。まさかルル——な訳無いか。あの場所に居ないのに助けられる訳・・・、それ以前に私たちは敵同士。助ける理由なんて・・・。あっ!？」

小難しい顔つきで少女がブツブツ呟いていると思ったら、今度は何か重大な事を思い出したように大声を上げた。

「戦いは!？日本とブリタニア、どっちが勝ったのよ!とにかくこんな事してる場合じゃないわ」

慌ててベッドから飛び降りると、急いでいるというのに律儀にもスリッパは穿いて部屋を飛び出した。廊下に出て左右を見渡すが誰も居ない。左右のどちらに進むか数秒悩んだ末に直感で右を選んだ。そのまま進んでいくと途中で通路が合流しており、そこからナースが1人歩いて来た。

「あの」

「はい。あ、103号室の方ですね」

「え?あ・・・、えっと」

「病室でお待ちいただけますか?目を覚まされたら連絡を入れる様に頼まれていますので」

「あ、はい。分かりました」

ナースは踵を返して少女の目の前から姿を消してしまった。103号室と言われた少女が『私の病室って何号室だっけ?』などと考えているうちに話が進んでいき、彼女はその流れで返事をしてしまった。

おかげで聞きたいことも聞けず、少女はため息を吐いて来た道を引き返して行った。

金髪の美人執務官ことフェイト・T・ハラウンは、この日もピザを食べていた。もっと正確にいうのであれば、聖王教会騎士、カリム・グラシア提供によるものである。この日のピザはシンプルでチーズが使われている事は言うまでも無く、輪切りにされたピーマンとトマト、小さく切られたベーコンというトッピングだった。

トッピングの内容は置いておくにしても、今この場はとにかく和んでいた。午後の柔らかな日差しが差し込むこの部屋で、フェイトとカリムが優雅にティータイムと洒落込んでいた。

まあカリムはいつものこととしても、局員がフェイトを見れば『仕事しろよ!』と言いたくなるだろう。しかし残念なことに、彼女は今日も仕事の一環としてここへ来ていた。正確には『仕事の一環の途中』であるが。

「今日のピザはどうですか？」

「はい、美味しいです。トッピングもシンプルな分、ピザって感じがします」

「そうですね。それは良かったです」

「それで医療院の方からは？」

「いえ、まだ連絡はありません」

フェイトが切り出した話は、先程も述べた『仕事の一環』というのに関係している。昨日の、丁度今くらいの時間帯に臨海第8空港で謎のロボット集団による襲撃事件が発生した。

その事件の発生当時、この聖王教会に居たフェイトは教会所属のシスターであるシャツハ・ヌエラと共に現場に急行した。

現場に到着した2人が見つけたのは、ロボット集団と戦う紅蓮の少女だった。彼女が今回の事件に関与しているのか否かは現時点では不明である。しかし封鎖されているはずの第8空港に一般人が立ち入る事は無論禁止されている。

となれば、その少女が関与している可能性は高く、フェイトは彼女に事情聴取をするためにベルカ自治領まで来ているのだ。

しかし当の本人は今だ眠ったままであるため起きたら聖王教会に連絡してもらうように頼み、その間にカリムと意見交換でも思っ
て立ち寄ったのだった。

「それにしてもあの少女は一体何者なのでしょう」

「あのロボットと戦ってましたから、関係者である可能性は否定できません」

「そうですね。あ、そういえばあの子が使っていたデバイスというのは？」

「ああ、これです」

フェイトが胸ポケットから紅いUSBメモリを思わせる小さな物を取り出してテーブルに置いた。カリムはそれを手にとってまじまじと見つめている。

「結構酷い破損状況だったと聞きましたが、ここにあるという事は修復はもう終わったんですね？」

「はい、一応は。これがそのデバイスを起動させた画像です」

テーブルにはピザとティーカップ以外何も無いが、2人の間の空間にモニターが出現した。そこにはこの紅いデバイスのみを起動させた状態の画像が表示されている。

鳥を思わせるボディ、脚部に付けられたローラー、背部にはX字型をしたパーツ。その中でも一番注目を集めるのが、何ととっても巨大なクローになっている右腕である。長さは左腕に比べて1.5倍程の長さがある。

「これが・・・」

「術者が鎧のように身に纏って使用する、所謂アーマーデバイスです。このデバイスのデータバンクによると、名前は^{グレン}Guren Flight-Enabled Version^{イネイブルドヴァージョン}とされています。長いのでとりあえずはグレンと呼称していますが」

「そうですか。右腕が巨大なのは理由でもあるのでしょうか？」

「はい。この右腕は徹甲砲撃右腕部という名称なのですが、クローであると同時に、手のひらに強力なエネルギー砲のような武装も搭載されているんです」

右腕の説明に移ったフェイトがモニターを操作して手のひらのズーム画像を表示した。右腕は黒色で爪に当たる部分は銀色をしているが、手のひらは円形に少し凹んでおり、いかにも何かの発射口というように見える。

「その――」

「騎士カリム、よろしいでしょうか？」

カリムが何かを言いかけた時、扉をノックして入室の許可を求める声が聞こえて来た。声からしてシスター・シャツハで間違いないだろう。

「大丈夫よ」

「失礼します」

案の定、入室してきたのはシャツハだった。彼女が来たという事は、おそらく何か伝える事があって来たのだろう。

「フェイト執務官、昨日はどうも」

「いえ」

「シャツハ、何かあったの？」

「ああ、はい。つい先程、聖王医療院からあの少女が目を覚ましたと連絡が入りました」

「状態の方は何か言っていましたか？」

「ええ。今すぐにもでも退院出来るくらい健康だそうです」

「よかった」

シャツハの報告を聞いてフェイトは安堵のため息をついた。彼女が目覚めたということは、自分の仕事を果たさなければならぬ。明らかに犯罪者というわけでもなさそうな少女の取り調べはあまり気が進まないが、特に問題が無いのであれば逆に彼女の身の潔白を証明することにも繋がる。

「では行ってきます。ピザとお茶、ありがとうございました」

「いえいえ」

「お気をつけて」

「はい」

少女の身の潔白を信じてフェイトは自分の黒い車に乗り込み、聖王教会を後にした。

紅い髪の少女が病室に戻って20分程が経過しようとしていた。ベッドの上には腕を組み、胡坐をかいた少女が、右の人差し指をトントンさせながら少々不機嫌そうな顔をしていた。

「……………もうっ！あれから20分経つていうのに。まだ来ない訳？」

ナースから面会に来る人がいると伝えられ、色々聞きたい事もあったのだが渋々病室で待っていた。しかし、待てども待てども一向に面会者は来ない。

いい加減腹が立って来た少女が先程のナースに文句を言いに行つてやろうと、胡坐をかいていた足を崩して立ち上がろうとした時、『コンコン』とドアをノックする音が部屋に響いた。

「はい」

「失礼します」

少女の返事を聞いて入って来たのは、黒のスカートスーツに黒いストッキングを穿き、これまた黒のハイヒールを履いた金髪の美女だった。

「待たせちゃったみたいで、ごめんね」

「自分から面会希望してたくせに20分も待たせるなんて」

「ごめんね。ちょっと離れた場所に居たから来るのに時間掛かつちやって」

（この人日本人じゃない。ブリタニア人・・・、に近いかな。ってことは勝ったのは・・・）

少女は自分の目の前で話す金髪美女を視界の端に入れて見ていた。ブリタニア人だと確定した訳ではないが、少なくとも日本人でないことは明らかだ。

そんな人物が自分に会いに来たのであれば、『おそらく日本は再び敗れてしまったのだろう』という予想になるのは当然だった。

しかし分からないのは何故『日本人』として戦った自分に会いに来たのか、ということだった。

「まあいいわ。それより聞きたいことがあるんだけど」

「何？」

「日本・・・、超合衆国とブリタニア。勝ったのはどっち？まああなたが私に会いに来ている時点で予想はつくけど」

「あ・・・、えっと。」

少女が質問すると、女性は急に困り出した。どうやら何と答えていいのか分からない様だ。それを少女は、『答えにくそうにしてい

る』と解釈した。

「そんなに難しい質問はしてないつもりだけど？はつきり答えなさいよ。ブリタニアが勝ったんでしょ？」

「うーんと……。あのね、落ち着いて聞いてね」

「落ち着いてるわよ」

「多分この世界はあなたが居た世界とは違う世界」

「……………は？」

大抵の場合において、そんな事を言われれば誰しもが少女の様な反応を示すだろう。この少女も例に漏れる事は無かった。

「ふざけてないで真面目に答えなさいよ」

「ふざけてなんかないよ。この世界には日本も超合衆国も、ブリタニアも存在しない」

「そんなことありえる訳無いでしょ。世界は超合衆国とブリタニアで二分されていたのに、両方が存在しないなんてありえない」

「うん。だからここはそのどちらもが存在することのない、第一世界ミッドチルダ」

「はあ？じゃあここは——」

「地球じゃないよ」

「え……」

少女の言葉を遮って女性はこちらが地球では無いことを告げた。まるで、少女が地球じゃないことを聞くと分かっていたかのように。

「あなたの話を聞いていたら、あなたは私の知ってる人と同じ世界から飛ばされて来たんじゃないかって思ったんだ」

「知り合いの？」

「そう。神聖ブリタニア帝国と、大小様々な国が連合国家を成して

世界の命運を賭けて戦争してる世界」

「なら、この世界が地球じゃないって証拠は？」

「これならどうかね？」

女性は人差し指を立てた。何をする気なのかと少女がじつと見てみると、指の上に拳大の黄色い球体が出現した。

するとそれは部屋の中をゆっくり移動していく。手品か何かだと少女は思った。だから女性が自分を馬鹿にしているのかと感じた。

「馬鹿にしてるの？そんなの手品でしょ」

「うん、信じられないと思うけど魔法なんだ。これは一般的に魔力弾って言われてるもの。じゃあこんなのはどうかね？」

「え？ちよつと、何よこれ」

女性の指先から光球が霧散し、指先はそのまま少女の足の方を向いた。すると少女は足首から圧迫感を感じ、原因を確かめようと見れば黄色に光るリング状の物が少女の両足を拘束している。

拘束から逃れようと力に任せて足を広げようとしても、一向に離れそうな気配は無い。そんな少女にさらに追い打ちをかけるかのように、上半身にも同じものが撒きついて全身から自由を奪い去る。いくらかもがこうが逃れられない事を悟ったのか、少女はおとなしくなった。それを確認した女性がリング状のものに人差し指でそつと触れると、彼女を拘束していたそれは上下とも砕け散った。

「今のはバインドって言われてるもの。対象を拘束して自由を奪う魔法なんだ。これで信じてもらえるかな？」

「信じるも何も、こんな体験させられたら信じるしかないでしょ。・

・、本当に違う世界なのね」

「うん」

「そう・・・」

少女は何を思っのか、それまで女性に向けられていた視線は窓の外の景観へと向けられた。それから少しの間沈黙が続いたが、少女がそれを破った。

「ねえ、私帰れるの？」

「もしあなたの世界が、私の知り合いと同じ世界なら帰れるって保証は出来ない」

「どうして？」

「その世界はまだ管理局も発見できてないんだ。あ、管理局っていうのは簡単に言っちゃえば、無数に存在する世界の文化管理とか、災害救助とかを行う警察と裁判所が一緒になった組織って思ってもええればいいかな」

「ふうん。で、あんたのその知り合いってのは？」

少女がその知り合いについての質問を投げかけると、女性の表情は目に見えて曇ってしまった。何か聞いては不味かったかと思いついたが、先程の女性の話を聞く限りでは自分と同じ世界と見て間違いない。故にどうしても聞かなければならなかった。

「その……。分からないんだ」

「分からないって……。どういうこと？」

「ちよつと長くなるけどいいかな？」

「ええ。私と同じ世界の人の話だし」

それから暫く、女性は掻い摘みながら3年前のJS事件の事、2年前のアロウズ事件の事を話した。それには女性の知り合いのことも織り交ぜられていたが、彼の名前が出る事は終ぞ無かった。

3年も前からこっちに来ていたという事は、少女の周りにも3年前から居なかったということであり、彼女の記憶にはそれに該当す

る人物が居なかった。だから少女がその人物が誰なのかを聞く事まではしなかった。もし聞いていたとすれば、この後の未来は多少なりとも変わっていたかもしれない。だが現実において『もしたられば』は全く意味の無いことなのである。

30分程が経った頃、過去の話も終わり部屋はしんみりとした空気に包まれていた。

「そんなことが・・・」

「だからあなたが戻れるかどうかは現時点では分からないんだ。ごめんね」

「別に謝らなくてもいいわよ。あんたが悪い訳じゃないんだから」

「そういえば随分話してるけど、まだ自己紹介してなかったね。私はフェイト・T・ハラオウン。よろしくね」

「私はこ——、カレンよ。カレン・シュタットフェルト」

「カレン、でいいかな？」

「ええ。私もフェイトって呼んでいい？」

「うん」

紅い少女が名乗る時に少し言い淀んだ。フェイトはそれが少しばかり引つかかったが、彼女にだって知られなく無いことくらいあるだろうと、この場は気にしない事にした。

「あ、そうだ。これ返さない」と

「これって・・・」

「カレンが持ってたデバイスだよ」

フェイトが胸ポケットから取り出して手渡したのは、紅い色をした本体に白い装飾が施されたUSBメモリのようなものだった。

それは部屋に差し込む日差しを反射し、金属独特の光沢を持っていたとても綺麗だった。

「一応修復はしておいたんだけど」

「修復？」

「うん。覚えてない？カレンは臨海第8空港で正体不明のロボット群と戦ってたんだ。そこに私や私の仲間が駆けつけたんだけど、すぐに気を失って倒れちゃって」

「うーんと………」

カレンは自分の記憶を慎重に辿った。ここで目を覚ました後に同じ事をしたが、その時には白いロボットとの決着後に海へと落ちていく辺りまでしか思い出せなかった。

しかし今回はフェイトの『空港』や『ロボット群』などのキーワードがあったからなのか、しばらく考え込んでいると突然フラッシュバックするように、とてつもない疲労感の中で体験したあの夢が現実か区別出来なかった記憶が蘇った。

「じゃああれって夢じゃなかったんだ。私は紅蓮をこの身に纏って・
・・」

「そのグレンってデバイスはね、起動すると鎧みたいになるから管理局ではアーマーデバイスって呼んでるんだ」

「そう」

呼び方には然して興味も無かったのか、カレンは生返事を返した。それでフェイトもカレンの気持ちを察したのか、さっさと次へ話を進めた。

「それでそのグレンの事なんだけど」

「ちよつと待って。なんか……、違う気がする」

「え？何が？」

「フェイトは紅蓮を紅蓮って言っていない気がする」

「グレンじゃないの？」

「言葉じゃ別に間違ってるだけ……紅蓮は紅に蓮くれないはすって書くの。分かる？」

「うん、分かるよ。私も小さい頃は日本に居たから」

「あ、そうなんだ」

「そっか、グレンじゃなくて紅蓮なんだ」

これでカレンが微かに感じていた違和感は無くなった。紅蓮もグレンも言葉にしまえばどちらも同じ発音なのだが、紅蓮とは長い付き合いになるカレンだからこそ感じ取れたのかもしれない。

「それで紅蓮の事なんだけど、実はもう完全に破損してて修復可能な箇所もあつたの」

「どこが？」

「多分フルドライブモードだと思うんだけど、そのデータが完全に飛んでて……」

「……まあ仕方ないわよ。元々かなりボロボロだったんだし」
（フルドライブモードって言うのは……、多分聖天のこと、かな
スザクを討つためとはいえかなり無茶させちゃったし）

完全な修復は不可能だったようだが、それでも普通に使用できる状態にまではなっているとフェイトは言っていた。『その原因は自分にある』と、紅蓮に謝っているカレンが居た。

「それでね、カレンに聞きたい事があるんだ」

「何よ？」

「回りくどいのは好きじゃないから率直に聞くね。カレンは昨日臨海第8空港に居たロボットたちとどういう関係なの？」

「それはこっちが聞きたいわよ。何でこの世界にサザーランドやグロースターがいるのよ？」

「あれってそういう名前なんだ。でもあれがこの世界に居るのは私も分らないんだ。昨日急に現れたから」

フエイトの言葉からウソは感じ取れなかったし、ウソを付けるような人間にも見えなかった。おそらくこの世界で何らかの事件が動き出していて、だからこの世界が自分を呼んだのかもしれない。そこまで考えてカレンは『そんな訳無いか』と自嘲するようにため息をついた。

異世界やら魔法やら、これまで考えたことも無いような出来事に会い、思考がちよつとおかしい方向へ行ってしまうていたんだろうと納得した。

「じゃあカレンはあれとは関係無いんだね？」

「あいつらは私にとつては敵。ブリタニアのナイトメアなんだから」

「え？カレンはブリタニア人なんでしょ？」

「え、ええ。でも私日本に住んでたし、他国を侵略してばっかのブリタニアは好きじゃなかったから。だから敵みたいなものなの」

「・・・、そうなんだ」

明らかに今のはおかしい、絶対に何かを隠していると思った。だがフエイトは次の話の内容次第で、それ以上の追及はしないでおうと思っていた。

「カレンにお願いがあるの。昨日の空港での戦いを少しだけ見たんだ。あの状態であんなに戦えるのはすごいと思う。だから、力を貸して欲しいんだ」

「私が？」

「さっき話したJ.S事件みたいに大きな事件が、これから先で起こる可能性は極めて高いの。多分今回のロボットたちがその前兆みたいなものだと思う。だからナイトメアの事をよく知ってるカレンに

力を貸して欲しいんだ。・・・次元漂流者のカレンにこんな事頼むのは良くないって分かってるんだけどね」
「協力しなかったらどうなるの？」

カレンの質問は最もなものだろう。その質問が来るだろうと予想していたフェイトは簡潔に答えた。協力しない場合は管理局の施設で面倒を見ることになり、安全ではあるだろうがそれなりに自由も制限される事になる。

対して協力するというのであれば、民間協力者扱いとなって比較的自由を得ることが出来る。あくまで協力者であるため給料などは無いが、そこはフェイトが頼んでいるのだから彼女がポケットマネーから出すということだった。

「どうかな？」

「そうね・・・、いいわよ。フェイトには助けてもらった恩もある訳だし。何よりどうしてナイトメアがこの世界に出現するようになったのか知りたいしね」

「そっか、ありがとうカレン」

「ま、施設に入ったらおとなしくしてなきゃいけない。それが性に合わないっていうのが本音だけだね」

「フフツ、そんな事だろうと思った」

「な、何で分かるのよ」

「だってカレンって、なんだかすごく活発そうな印象を受けるから」

実際当たっている。カレンは男勝りな性格もあって、物凄く活発な少女である。外に向かって跳ねている髪型がより一層その印象を強めている。

「改めてよろしくね、カレン」

「こちらこそ、フェイト」

フェイトが差し出した手をカレンが握り返した。協力関係が誕生した瞬間だった。

「あ、テントウムシだ」

今まで何処にいたのか。カレンを目覚めさせるきつかけとなったテントウムシが、相変わらずフラフラと2人の前に飛んできた。フェイトが顔の前で右の人差し指を軽く曲げてやると、テントウムシはそこに止まった。

テントウムシが飛んで行かないように静かに立ち上がると、ゆっくりと窓際まで歩を進めていく。カレンはフェイトの一挙手一投足をただ黙って見ている。

窓際に辿り着くと、フェイトは腕を窓の外に出した。

「ほら、気をつけてね」

テントウムシはまるでフェイトの言葉を理解しているかのように彼女の指から飛び立つと、その場で小さな円を描くように2、3回飛び回るって何処かへと飛んで行った。

彼か彼女か分らないテントウムシを見送りながら、フェイトは隠しごとをしているであろうカレンをこれから見極めていこうと心に決めていた。

STAGE 04

偽りのトモダチ（後書き）

いや、実はですね

矛盾を極力なくすためとか、戦いばかりで前作のような駄作にならないようにするために、ストーリーをちゃんと作るうとしている内にどんどん……。

ほんとサーセン。

さて、ようやくピザの人となのは、カレンとフェイトが会いましてね。

ピザの人はまだ名前出てませんけどw

それにしてもカレフェイの話だけでめっちゃ長くなってしまった。でもやっぱりこれくらいの方が読み応えがあつていいかなと。

あるかどうかは分かりませんが、作者が勝手にそう思ってます。

換装……、じゃない！感想など頂けると嬉しいです。

就職活動が結構厳しいので、更新は他作品含め遅めになると思いますが今後ともよろしく願います。

次回、エースオブエースをかつてない恐怖が襲う。

紅蓮の翼と黒き魔女

STAGE

05

ピザ アタック！

STAGE 05 ピザ アタック ! (前書き)

ハイペース更新は身体に悪いです、はい。

Information .

10/14 1:10頃

誤字脱字の修正、及び表現を若干変更。

STAGE 05 ピザ アタック !

カレンが表向きは民間協力者という扱いになってから2日後の深夜、彼女の事を現時点でまだ知らない高町なのは今、それとは別の事で非常に頭を痛めていた。いや、何も本当に頭痛がしている訳ではない。

しかし、教導を終えて漸く帰宅することが出来たと思いきや、そこに居た人物のお陰で身体を休める事すら叶わない状況に陥っていた。

なのはの目の前に居るのは緑の髪をした少女がピザを頬張っている。それだけでも結構問題なのだが、少女の格好にもさらに問題があった。何故か上半身は地肌の上にカットシャツ1枚だし、下半身は赤黒いモノが点々と付着しているポットパンツという、不審者極まりない格好をしているのだ。

そして何より、その少女は3日前の襲撃時に胸部を槍によって貫かれて死亡したはずだった。だが戦闘終了後に彼女の元に戻ってみれば遺体はそこに無く、ただ血溜まりだけが残されていた。だから『もしかしたら・・・』という淡い希望を持つても見たのだが、それは余りにも非現実的だった。・・・のだが実際に今、少女はなのはの目の前に居るのだ。それも我が物顔でピザを頬張って。

「それで？」

「ん、何だ？」

「『何だ？』じゃないよ！どうしてここに居るの！？そもそもあなたはあの時死んだはずじゃあ・・・」

自分が何を聞きたいかなど分かっている筈なのに、分からないフリをしている少女になのははつつい声を荒げてしまう。それにしても少々苛立っているエース・オブ・エースを前にしても全く動じないこの少女の神経も相当のものだろう。

「それよりまずこの子供——ヴィヴィオを寝かせなくていいのか？」

「あ……。そうだね、そうする」

「ついでの風呂にでも入って疲れをとったらどうだ？良い湯だったぞ」

「うん——って、お風呂も入ったの！？」

「ああ。待っている間することが他に無かったしな」

「ヴィヴィオも一緒に入っただよ、ママ」

「そ、そう」

最早やりたい放題している少女に、なのははただ顔を引き攣らせて笑顔になってない笑顔を浮かべることしか出来なかった。

一方、なのはと少女の関係というか空気というか、言葉では形容しがたいモノを感じ取ったヴィヴィオは立ち上がって部屋から出て行こうとしていた。

「ママ、ヴィヴィオは先に寝てるね」

「あ、ごめんねヴィヴィオ」

「ううん。大切な話があるみたいだから。おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

ヴィヴィオがリビングから出ていくと、なのはは改めてソファーに座りなおして正面に座る少女を見据える。

今はあの時と違って落ち着いて少女を見ることが出来る。こうしてピザを頬張っている姿を見ていると、とても槍に胸部を貫かれた

とは思えず、なのはの瞳には至極普通の少女としか映らない。

「私に聞きたいことがあるんだろう？」

「うん、色々だね。順番に聞いてくよ。まず最初、あなたは何者？」

「私について何を知りたいのか的を得ない質問だな。まあいい、答えてやる。私はC・Cだ。この世界とは違う世界から来た」

「っ！？・・・、違う世界から来たっていう自覚はあるんだね」

「ああ。この3日で全てではないが大体の事は把握した。だから次元世界や魔法の事についての説明は不要だ」

「分かったけど・・・、でもどうやって調べたの？」

「お前の部屋のパソコンみたいなやつを使った。使い方はヴィヴィオに教えてもらったよ」

『本当にやりたい放題だなあ・・・』それ以外の言葉が思い浮かばなかった。もしそれが壊れていたら、不法侵入や器物破損の罪で本気で訴えようかと思ったのはまた別のお話。

「それでえつと・・・、C・Cさん。あの契約って言うのはやっぱりあなたが？」

「ああ。私の願いを一つ叶える代わりにお前にはギアスを与えたはずだ」

「ギアス！？あれが・・・」

「お前、ギアスを知っているのか？」

「え？あ、ええつと・・・。まあ知ってるって言えば知ってるし、知らないっていえば知らないけど」

「どっちなんだ」

煮え切らないなのはの返答にC・Cが不機嫌さを露わにする。そんな彼女を見たなのはは内心、『あれ？どうして私が怒られてるみたいになってるの？むしろ私の方が怒っていい立場だよね？』と

思っていたが、話が明後日の方向へ行ってしまうそうだったので口にはしなかった。

「C・Cさんと契約するまでは話しに聞いてただけだから」

「誰から聞いたんだ？」

「枢木スザクって男の子なんだけど」

「スザクだと！？それは本当なのか！」

スザクの名前が出た途端にC・Cの態度は一変する。ソファーにもたれ掛からせていた身体を、なのはに詰め寄るかのように勢い良く起こした。

余りに勢い良く迫って来たものだから、なのはまるで小動物の如く『ビクッ』となった。その時のなのは実は実に可愛らしかったが、『スザク』という単語に反応したC・Cの脳にその情報が伝わることは無かった。

「う、うん。3年前にミッドチルダに来て、その一年後くらいに居なくなっちゃって……。ていうかC・Cさん、スザク君の事知ってるの!？」

「ああ……。それにしてもスザクの奴1週間居なくなっと思ったと思ったら、この世界に来ていたとはな。待て……。なのは、お前は今スザクは『3年前に来て1年後に居なくなった』と言ったな?」

「う、うん。それにC・Cさんはスザク君が『1週間居なくなっただ』って……」

「ああ……。どういうことだ」

「世界が違っても基本的に時間は同じように流れてるはずなんだけど……」

何気なく漏れた言葉の中で、大きな矛盾が見つかった。なのはが

言ったことに例を出してみれば、ミッドチルダで1時間が経過すれば地球でも1時間が経過している筈なのである。僅かな誤差はあるかもしれないが、1週間と1年というのは到底誤差と言えるようなものではない。

実際にそうだったとすれば、なのはがミッドチルダに来てもう7年が経つ。だがそれを先程の話と合わせれば地球では7週間、つまり2ヶ月弱しか経っていないことになる。しかし地球に居るのはの家族や友人はちゃんと7年分歳を重ねている。つまりそれはあり得ないということだ。

あくまでなのはの居た地球の話ではあるが。

「あつ、もしかしたら」

「何だ？」

「あのね、C・C・さんは知らないかもしれないけど、スザク君の居た地球と私の居た地球は違う世界なの」

「同じ名称の世界でも異なる世界・・・並行世界パラレルワールドというやつか」

「だぶんそう。それでね、スザク君やC・C・さんの居た地球は管理局もまだ発見できて無いの」

「管理局が発見できていない、か」

「うん。だからC・C・さんが元の世界に戻れるかどうかは・・・」

なのはの言う通り、発見できていない世界になど戻しようがない。自分が悪い訳でもないが、やはり元の世界に返してあげられない現実、なのはは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「ならスザクはどうやって戻って来たんだ？」

「え？」

なのはは自分の耳を疑った。もし聞き間違いで無いのならスザクは生きているし、元の世界に帰ることも出来たということだ。生死

不明だったスザクが生きている。それを知ったのは、心が軽く
なっていくのを感じ取っていた。

「ほ、ホントに生きてるの！？スザク君、生きてるの！？」

「あ、ああ。お前たちがスザクを元の世界に帰したんじゃないのか
？」

「うん。実はスザク君、2年前のイノベーターとの最終決戦でM
IAになっちゃって」

「・・・、そうか」

「だからスザク君がどうやって元の世界に戻ったのか誰も知らなく
て」

元の世界に戻れるかも知れないと思った矢先だけに、C・C・の
落胆は大きかった。こんなことならスザクに1週間どこへ行つて何
をやっていたか、どうやって戻つて来たのかを聞いておくべきだっ
たと後悔していたが、その当時はこのような事態になることなど予
想すら出来なかったC・C・にそんなことが出来る筈が無かった。

『振り出しか・・・』と置いていたC・C・だが、1つの仮説が
立った。

「なのは、これは仮説なんだが・・・。私やスザクが居た世界を管
理局は発見できていない、ということだな」

「うん」

「もしかすると私たちの世界は、この次元世界そのものの並行世界
なのかもしれない」

「え！？」

なのはの頭は驚愕というものに思考を邪魔されて、何も考えるこ
とが出来なかった。少しして落ち付きを取り戻し、冷静に考えてみ
ると『そんなことはあり得ない』という結論に至った。

しかし同時に、『そんな事は今まで1度も考えたことが無かった』事にも気が付いた。そもそも『次元』なんてものが存在することも魔法と出会うまでは知りえなかった事実だった。

ということは、この巨大な『次元世界』に『並行世界』が存在してもおかしくはない。ただそれを確認する方法が無いだけのことなのだ。

「確かに・・・、可能性は否定できないね。実際管理局も全く発見出来ていない訳だし」

「だとすれば尚更ギアスの世界には帰れないということか」

「ギアスの世界？」

「ああ、とりあえず分かりやすく呼称するためだ」

「そっか」

C・C・の提案で、とりあえず彼女たちの世界のことはギアスの世界と呼ぶ事にした。もちろんこの2人の間だけのことである。そしてC・C・はこの時既に帰る方法が無いことをちゃんと理解しており、あることを勝手に決めていた。

「まあ暫く世話になるんだ、もう少しくらい答えてやるぞ？」

「うん——って、ええっ!？」

「当たり前だろう」

それまでは少々軽いノリで話していたように見えるC・C・が急に真剣な表情になった。これは何かありそうだと思ったのはは次の言葉を待つ。

「それともギアスのことや私のことも知らぬまま私を追い出すか？」

「あ、それは・・・」

「それに私の事は極力知られない方がいいだろう？」

「・・・分かったよ。じゃあ質問に答えてくれるかな？」

「答えられる範囲でな」

答えられる範囲というのは実に都合のいい表現である。例えばC・が1から10まで全てを知っていたとしても、答えられる範囲が1から3だと言えはそうなってしまふ。

それくらい分かっているのはだが、もうこの際仕方ないと割り切って質問することにした。

「じゃあまず1つ目。即死の傷を負ったのに、どうして生きているのか」

「それは私が不老不死だからさ」

「そっか不老不死だから・・・、え？今不老不死って言ったよね？」
「そう聞こえなかったか？」

何故だろうか。なのはは不老不死という事を聞いてもそれほど驚きはしなかった。思い返せばC・C・と出会ってから摩訶不思議なことばかり起きている気がする。『きつとそのせいで耐性が出来ちゃったのかなあ』と、無理矢理に納得するのはだった。

なのはがそんな事を思っていることも知らずに、C・C・は前髪を掻き上げた。

「見ろ」

命令口調のC・C・に素直に従ってなのはは彼女の額を見た。するとそこには、鳥を模した様な赤い文様が描かれていた。

「それは？」

「コードだ。この身体が不老不死である証というやつだ」

「生まれた時からあった、とか？」

「そんな訳無いだろう。押しつけられたんだ、もうどれくらい昔なのかも分からない程昔にな」

「どうにかできないの？」

「出来るさ。ギアスを与えられた者がコード授受の資格を得られればな」

それを聞いたなのはちよつと嫌な予感がした。先程からの話を聞く限り、もし自分がコード授受の資格を持っていたら、コードを押し付けられるかもしれないと思ったのだ。

「も、もしかして私にコードを押し付けるのがC・Cさんの願い、とか？」

「まさか。私の願いは元の世界に帰ることだ。お前にコードを押し付けたりはしない。それに、そもそもお前はまだ授受の資格を得てすらいない」

「そ、そっか」

無論なのはだつて死にたいと思っている訳が無い。永遠に生きられたらとも思うが、自分1人がそうだったとして果たしてそれは幸せなのだろうか。そう考えたらきつと違うと思った。独り孤独に耐えて永遠を生きていかなければならないのは絶対に辛いことだと思えた。

ならばC・Cはその孤独に今まで耐えて来たという事になる。そう思うと、何故だか急に彼女の傍に居てあげたいと思った。ずっと一緒に居る事は出来なかったとしても。

「他に聞きたいことはあるか？」

「あのロボットについては何か知ってる？」

「ロボット・・・ああ、ナイトメアの事か。あれについてはスザクから聞いていないのか？」

「ナイトメアの事なら聞いたけど……。そつか、あれがナイトメアフレームなんだ。デバイス化したナイトメアなら知ってるけど、本物を見るのは初めてだから」

「デバイス化？」

「うん、こういうの。レイジングハート、お願い」

<Yes.>

なのはの声に反応し、レイジングハートはメモリー内にあったとある画像を引っ張り出した。なのはとC・C・の間の空間に半透明のモニターが表示され、そこに彼と彼の愛機が映し出された。

「スザクじゃないか。それにこれはランスロットだな？」

「うん、そうだよ。こつちの世界に来た時にランスロットがデバイス化したみたいなの」

しかし『その原因は分からない』となのはは言う。何故ロボットであったランスロットがデバイス化したのかについては、どれだけランスロットを解析しても不明だったし、ランスロットに問いかけてもやはり『分からない』という返答が返って来るだけだった。

「これでナイトメアについて説明する必要も無くなったな。もういいか？」

「うん、今の質問で大体解決しちゃったから」

「そつか」

「んゝ……」

なのはの聞きたいことには答えたというのに、何故だか彼女は今だ唸っている。気になった、という程でもなかったがC・C・は声を掛けてみた。

「どうかしたのか？」

「えっとね、なんだかC・C・さんって言いにくくて・・・」

「ならC・C・と呼ばばいいだろう。私は別に呼び捨てでも気にしない」

「うん・・・じゃあ『しいちゃん』って呼ぶよ」

「な、何だその恥ずかしい呼び方は！止める」

「よろしくね、しいちゃん」

「だから止めろと——」

その後、約30分に渡ってC・C・はなのはに抗議を続けたものの、なのはは一向に折れなかった。そしてとうとうC・C・が折れたのだった。

「さてと、じゃあお風呂入って来るね」

「ああ、そうだ。お前、自分のギアスの能力については把握したのか？」

「うん。私が出来るのは魔力のコントロールみたい」

なのはがC・C・にした説明を簡潔にまとめると以下の通りだ。

魔力をコントロールするというのは『使用済みの魔法が撒き散らした魔力』そして『自身が持っている魔力』に干渉することが出来るが、他者の魔力には干渉不可能。

干渉して行えることは集束、結合、分裂など。ただしこれらを同時に行う事は出来ない。つまり集束している最中に、違う魔法に分裂の現象を起こす事が出来ないといった感じだ。

また、複数を対象にすることも出来ない。例えば集束を行う場合、同時に複数の集束を行う事は出来無いという訳だ。

分裂は既実戦で使用しており、以前にデイベインバスターエクステンションを四方八方に放った時は、まず自分の魔力で通常通りデイベインバスターエクステンションを発動させ、発射時にギアス

を使用してそれを内部で分裂させたということだった。

そしてこの能力の一番のメリットはギアスで作り出した魔法に限るが、本来大きな負担を強いられる大威力砲撃を負担無しに使用可能という点だった。その理由としては、ギアスの能力のみによって魔力をコントロールしているためであると推測される。

ただしなのは本人に魔法を遠隔発生させるスキルが無いため、離れた場所に集束させることは出来ない。とはいえ、なのはの十八番であるデイベインバスターを自身で発動させると同時に、ギアスを使用して周囲の魔力なり自身の魔力なりでもう1発作れば、2発同時に使用が可能となるなどやりようによっては凶悪極まりない能力である。

「なら一つだけ忠告しておいてやろう。ギアスの使用を続けていればギアスは次第にその力を増していく」

「そうなの？」

「ああ。だからその力にのまれるなよ」

「うーん……。よく分かんないけど気を付けるよ」

そう言っただけなのは浴室に向かった。残されたC・C・はといえば、2切れ残っていたピザを頬張っていた。

—— 30分後 AM 1:30

入浴を終えたなのはが自室に入ると、ベッドの上に何かが居たが布団を被っていて緑色の髪の毛が少し見えるだけだ。まあそれだけで誰なのか判断するには十分だったが、床に脱ぎ捨てられたカッターシャツとホットパンツが決定的な証拠となっていた。

「・・・、ここで寝る気なの？」
「他にベッドが無い」

『傍若無人な娘だなあ』と思うと同時に『私どこで寝ればいんだろっ？』という考えが過った。そんな事を考えながらベッドを占領しているテロリストもといＣ・Ｃ・を見ていた。するといきなりＣ・が布団から顔を出した。

「男は床で寝ろ・・・、と言いたいところだがお前は女だからな。
一緒に寝させてやるから早く入れ」

『あれ？ここ私の家だね？それにこれ私のベッドだね？』なのは疑問に思う。それをＣ・Ｃ・に投げかけてみたら、案の定肯定する答えが返って来た。なのにどうして上から目線で言われているのだろうか。

いくら考えても答えが出ないので考えることを止め、渋々ベッドに潜り込んだ。ベッドのサイズはセミダブルであるため女２人なら寝られなくはなかった。

「そうだなのは。明日は空いているか？」
「ううん。明日は教導の最終日だから、明後日なら空いてるよ」
「そうか。なら明後日はピザを食べ回るぞ」
「え？さつきも食べたでしょ？」
「あんな冷凍食品を本物のピザと同じにするな」

なのはからすれば冷凍食品だろうがどこかの店の手作りピザだろうがそんなに変わらない。しかしどうにもＣ・Ｃ・はそれで満足出来ないらしかった。

「そもそも冷凍食品のピザというのはだな——」

「え？ちょ、待つ——」

なんだか嫌な予感がしたなのはＣ・Ｃを止めようとしたが既に遅し。ピザについてあれこれ語り出したＣ・Ｃは、最早なのはに止めることは出来なかった。魔王が降臨すればあるいは止められたかもしれないが、そうするだけの気力は残っていなかった。

その後、３時間に渡ってピザとはなんたるかを聞かされる羽目になったのはが朝、目の下にクマを作ってフラフラの状態で仕事に出て行ったのは言うまでもなかった。

—— 2日後

約束の日が来てしまった。物凄く気が乗らないが、半強制的に連れだされたなのはＣ・Ｃと共にミッドチルダ中央区画へとやって来ていた。目的はもちろんピザ巡りである。・・・、楽しいのはＣ・Ｃだけだが。

ちなみにＣ・Ｃはなのはが持っていた薄いピンクのワンピースを着ている。元々着ていた服はもう使い物にならないので、オーダーメイドで同じものを注文した。昨日、なのはが教導で自宅に居ない間に。

「ではピザがある店を手当たり次第に回る。案内しろ」
「・・・、はあ。分かったよ」

2日前の深夜の出来事が今だなのはの精神面に大きなダメージを与え続けている。今のなのはの状態を『やけど』とか『どく』といった風に表すのであれば、状態変化『ピザ』だ。おそらくそんな状態変化に陥ってしまうのはミッドチルダ中を探してもなのはだけだろう。理由はもちろんC・C.を居候させているから。

そこで疑問となるのは、ヴィヴィオはそうならないのかということだ。結論から言ってしまうえばならない。C・C.がピザについて語れば然して興味も無いヴィヴィオはそのうち寝てしまう。しかも起こしてもすぐに寝てしまう故、ヴィヴィオが状態変化『ピザ』になることはない。それとヴィヴィオがここに居ないのは、今日が所謂平日だからである。

なのはも同じようにすればいいと思うかもしれないが、彼女の場合はピザの話が不思議と何かの呪いの如く聞こえてくるため寝るに寝られないのだった。

「ここだよ」

そうこうしている内に1軒目の店に到着した。店の入り口には『ピザバット』という看板が掛けられている。一応ピザ専門店のようだ。

C・C.が知っている店の名前と酷似している事から、彼女はかなりの期待感を持っていた。

「ここは合格だな」

そして実際に店内で注文して食してみれば、彼女が求めていた味がそこにはあった。文句無しに合格点を出した。

「よし、次に行くぞ」

「え？ここ合格なんでしょ？だったらこれで――」

「馬鹿を言つな。美味しいピザの店はいくつ知っていても困らないだろう。早く行くぞ」

「うう」

C・Cが『合格』と言った瞬間、なのはは『やった！1軒目で解放された！』と物凄く喜んでた。だがそれは束の間に過ぎなかった。なのはは再び奈落の底へと突き落とされた気分だった。

食べ終わったC・Cは滝のような涙を流すなのはを引き摺って『ピザバット』を後にした。言うまでも無いことだが、支払いはないが行っている。彼女の受難はまだまだ始まったばかりである。

暫くの後、2件目のピザを扱っている店の前に2人の姿はあった。この店の看板には『ピザドナルド』と書かれている。その名前からはのもC・Cもこの店のピザは大体予想出来ていた。

「おい、ここはアレじゃないのか？」

「多分そうだと思うけど」

「・・・、まあ仕方が無い。物は試しだ」

結局入ることにしたC・C。メニューに乗っていたのはやはり予想通りだった。パンにピザが挟まれている。若干期待していたのは、パンに挟まれているのがピザのトッピングだけだったら、というのがあった。しかし見事にピザが挟まれていた。

極端な話、パンにパンを挟んでいる意味が分からなかった。当然C・Cの判定は『不合格』だった。

その後、ピザ専門店だけでなく喫茶店なども含め10件は回った。そしてとうとう『あの店』に辿り着いた。いや、辿り着いてしまった。

この店の前まで来てようやくなのは重大な事に気が付いた。

（こ、このお店って・・・、『アレ』があるお店だ。どうかしいちやんが『アレ』に気づきませんように！神様仏様フェイト様！っていうかフェイトちゃん助けてえ！）

もうとにかく必死に祈っていた。挙句の果てにはこの場に居ないフェイトに助けを求め出す始末だ。自分でも滅茶苦茶だと思っているが、そうなってしまいうらい『アレ』とは関わりたくなかったのだ。

入店してメニューを見ていたC・Cがウェイトレスを呼んだ。彼女が注文するその瞬間まで、なのはとにかく必死に祈るだけだった。

「フォーエバー・ロイヤルトウルラブ・マリッジピザを1つ頼む」「かしこまりました。しばらくお待ちください」

注文を終えたC・Cが正面に座るなのを見ると、まるで魂が抜けてしまったかのように真っ白になっているのが居た。どこからともなく『チーン』という音が聞こえた気がした。

テーブルの上にはそれがあつた。果たしてこれをピザと呼んでもいいのだろうか。そう思ってしまう程ピザという物からはかけ離れている。

辛うじて縁の部分だけは見えているが、それより内側はトッピングによって完全に見えない。むしろそのトッピングをそう呼んでいいのかも分らないが。

「・・・、何コレ」

「これは驚いたな。まさかトッピングがウエディングケーキとは」

そう、ピザの上にはトッピングとしてウエディングケーキが乗っていた。結婚式場で出てくる程巨大ではないが、それでも2段あるしかも二段目の下にはこれまたピザの生地があるし、頂上にはご丁寧に新郎新婦を模ったチョコレートまで乗っている。

「み、見てるだけで気持ち悪くなってきた」

「ま、まあ大切なのは味だ」

そう言ってC・Cはスプーンですくい取って口に運んだ。スプーンですくい取った、という時点で既におかしいが、この際それには目を瞑った。

なのははC・Cがどんな味かを言う前に予想してみた。このピザの味はケーキ味だ。心の中でそう言い切っていた。

「ど、どう？」

「・・・、ケーキだな」

案の定、なのはの予想は的中した。いや、むしろこれを見てケーキ味がしないと予想する人の方が圧倒的に少ないだろう。むしろ居

るのかどうかすら疑問に思うところである。

「これいくらするかちゃんと見た？」

「さあな」

「日本円にして35000円なんだけど・・・」

「・・・、高いな」

2人の周囲には微妙すぎる空気が漂っていた。どんなピザかと少し期待して注文したC・Cですら言葉が出ない。

ピザを注文したはずなのに、出て来たのはケーキなのだ。しかも各段の下にピザ生地があるケーキ。・・・、最早意味不明だった。

少しは申し訳ないと思っっているのか、C・Cが2口目を口に運ぶ。しかしそこから先は無い。35000円もするピザという名のケーキはたったの2口でその役目を終えることとなった。

しかし自ら頼んだ手前、要らないと言い出し辛い。そんな様子を、なのはは笑顔で見つめていた。気のせいか、C・Cにはなのはの背後に黒いオーラが見えたような気がしていた。

「番組の途中ですが臨時ニュースをお伝えします。つい先ほど、中央区画の湾岸地区において先日も現れたロボット集団が出現したとの情報が入りました。これに対して地上本部は迎撃部隊出動の準備を進めているとの事です」

「ナイトメアだ！」

突然ニュースが始まったかと思えば、モニターには遠方の海上にナイトメアと思わしき機影が映し出されている。映っている数だけでも20機は下らない。なのはは立ちあがると、カードを一枚テーブルに置いた。

「これで払っておいて！」

「あ、おい！」

C・C・を放つてなのは店から飛び出して行った。残されたC・は内心『よく出現したな、ナイトメア。褒めてやる』と思っていた。

何しろなのはがいなければこのケーキピザをこれ以上食べずに済むのだから。C・C・は残したケーキピザに見向きもせず、さつさと会計を済ませた。そしてなのはが走っていった方向へ駆けだした。首に提げられている黒色で『*』の形をしたペンダントを揺らしながら。

多数のナイトメアがいる海上に到達したなのは少し焦りを覚えていた。ナイトメアの数が予想より遥かに多かったのだ。テレビには20機程度しか映っていないが、いざ現場に来てみれば100機相当の数が待ち受けていた。

地上本部の部隊はまだ到着しない。いくらエース・オブ・エースといえど、これだけの数を相手にするのは骨が折れる。しかし今はそんな事を言っていられない。仕方ないと言わんばかりに1人立ち向かっていく。

「アクセルシューター！」

12発の弾丸が向かって来るサザーランドやグロースターに飛んでいく。前回よりも目に見えて動きが良くなっているが、それでもまだなのは敵ではない。12発は全て別々のナイトメアに着弾し一撃で沈めていく。

<Protection.>

なのはの背後から迫る何機ものナイトメアが持つライフルが一斉に火を噴き、大量のエネルギー弾がなのはに襲いかかった。しかしそこは優秀なパートナーが付いている。

レイジングハートの判断により自動でプロテクションが発動し、一発たりともなのはに届く事は無い。

「こういう時には私のギアスって役に立たないなあ」

なのはの言う通り、現在の状況ではあってもなくてもそう変わらない。彼女のギアスは砲撃魔法に対して使用することで真価を発揮する。だが砲撃のチャージをする暇も無いくらい攻撃が飛んで来る現状ではとても使用できない。ギアスといえども、チャージ時間が必要なくなる訳ではないのだ。

「地道に落としていくしかないね」

<Let's do its best.>

「うん！」

<I sensed reaction backward.>

「えっ!？」

なのはが気合を入れて『さあ行こうか』という時、レイジングハートが後方に何かの反応を感知した。振り返ってみれば、何処かで

見覚えがある赤黒い光が飛んで来るのが見えた。

その軌道からして自分に当たることは無いと分かっていたなのは、自身の全体を覆うオーバルプロテクションを発動させてナイトメアのエネルギー弾を防ぎつつそれが来るのを待つ。

自分たちに近付くそれに漸く気づいたのか、ナイトメアたちは攻撃の手を休めて回避行動に移る。しかし移るのが遅すぎた。飛来したそれはなのはの左右を通り抜け、射線上に居た十数機ものナイトメアを破壊して空の彼方へと消えていった。

その赤黒い光を発射したであろう人物か物かは分からないが、最初は点にしか見えなかったそれが近付いて来る。

アクセルシューターで撃墜を続けながらもそちらに意識を向けていると、接近して来る途中で第2射が放たれた。再びそれは十数機を巻き込み、ナイトメアの数は今僅かしか残っていないかった。

「・・・、っ！？しいちゃん！」

「さっさと終わらせて帰るぞ」

「な、何でここに？それにそのデバイスって」

なのはは驚いた。C・C・Cがここに居ることもそうだが、なににより彼女が黒を基調とし、肩や腰、膝辺りに金色を含むアーマーデバイスを装備していることに。居候を始めてからただの一言もそんなことは言っていなかっただけに、余計にその驚きは大きいものだった。

「私は別にデバイスを持っていないとは一言も言っていない」

「そ、そうだけど」

「それより早くしろ。向こうは待ってくれんぞ」

なのはを急かしたC・C・Cは両腕を左右に広げた。すると両肩のパーツが展開して赤黒い光が収束しだす。2、3秒のチャージの後、

勢い良く放たれたそれは三度ナイトメア群を飲み込む。そして今回はそのまま旋回を始め、広範囲のナイトメアを撃ち落としていく。ナイトメア群は2人を挟むような陣形をしており、約半分はC・Cが撃墜した。

「そっちは任せる」

「うん。集え！」

なのはの左目にギアスの紋様が浮かび上がる。その力によってアクセルシューターが周辺に撒き散らした魔力が収束して粒子の光球の如く不安定な形を成していく。

最初はスターライトブレイカー使用時のようにただ集束していただけの魔力が、結合して球体へと変化を起こす。

「デバインバスターーーー！」

発射寸前に以前と同じように分裂させることで前方の空間は広範囲に渡って桜色一色に染まる。本来一発分のデバインバスターをいくつかに分裂させているのだから1発の威力は1/分裂数になっている。

しかしそれでもサザランドやグロースター程度を落とすには十分な威力を持っていた。それにしてもこれを負担無しに行えてしまうのだから、なのはが本気で戦った時が恐ろしい。

「とりあずはこれでお終いかな。事後処理とかあるからいいちゃん
は先に帰ってて。極力バレないようにね」

「ああ」

「それと帰ったら聞きたい事があるから。いいよね？」

「・・・。あ、ああ」

C・Cは確かに見た。今、なのはが笑顔を浮かべた瞬間、彼女が全身から黒いオーラを発していたのを。

例のピザのこともあり、傍若無人を誇るさすがのC・Cも今ばかりはなのはに逆らってはいけなさと本能で感じ取っていた。

—— 同日 PM 19:30

およそ2年と少し前まで機動六課と呼ばれていた隊舎の前に、肩に掛かるより少しだけ長い茶髪の女性と身長30cm位の蒼味掛かった銀髪の幼女(?)が居た。幼女(?)の方は女性の頭と同じくらいの高さで浮いている。

茶髪の女性は懐かしそうに隊舎を見上げながら口を開いた。

「出来ればここに帰って来やへん方が平和なんやけどな。そうも言ってられへんし」

「ですね」

「これからまた忙しくなるけど、頑張ろな？」

「はいです」

「ほんなら召集は任せるよ」

「任せてくださいです！」

それだけ話すと2人は隊舎の中へと消えて行った。

これから先で何が起こるのかはまだ誰にも分からない。しかしこの日も、月は相変わらず穏やかな光で地上を照らしていた。

STAGE 05 ピザ アタック！（後書き）

ピザネタを書くのはホントに疲れます。

それにしてもなのはホントピザに振りまわされすぎだw
そしてなのはギアス。

使用によってはホント強い。

今回みたいに1対100見たいな戦闘だとあまり役に立ちませんけど、

1対1とかなら凶悪な能力になりそうです。

さて、ここに書いておかなければならないことが。

えー……。今まで散々ピザを入れてふざけて来たわけです。

ですがここから先はシリアスなストーリーになっていくので、

ピザは今回で打ち止めです。多分。

ご飯を食べる時にピザが出るかもしれませんが、ふざける事はしませんw

それではまた次回お会いしましょう。

次回、とうとう事件が大きく動き出す。

STAGE 06 ナイト オブ ラウন্ズ

その日、日も高いうちから旧機動六課隊舎の部隊長室には錚々たるメンバーが集まっていた。

元機動六課課長にして部隊長の八神はやたと彼女の副官であるリインフォース？。前線魔導師組であり、分隊長だった高町なのは戦技教官一等空尉にフェイト・T・ハラOWN執務官。そして彼女たちの副官だったヴィータ三等空尉とシグナム二等空尉。さらにシグナムの融合騎であり、補佐官でもあるアギト。

言わずと知れたエース級のメンバーであるが、今日はここに1人だけ新しいメンバーが加わっていた。先日、フェイトが個人的に雇うという形になった紅の少女――カレン・シュタットフェルトだ。はやてはかつて自分が腰掛けていた懐かしのデスクに腰を降ろし、残りの面々はこの部屋に設置されているソファアに座っていた。

「皆、急な召集でごめんな」

「謝る必要なんてないよ。そのための部隊なんだから」

「ああ、それもそうやね」

「でもよ、2年前に結成されたのはいいけど実際に招集掛かんのってこれが初めてだろ？大丈夫かよ」

「大丈夫ですよヴィータちゃん。何しろ私たちなんですから」

「リイン、ヴィータが言っているのはそういうことではない」

リインはどこまでもお気楽そうな笑顔でそう答えたが、実際彼女の言うことにも一理ある。

カレンを除き、今までこの場に居る彼女たちがどれだけの時間を

過ごし、どれだけの苦難を共にしてきただろうか。

アギトは少し短いが、それでも2年という月日をシグナムとずっと過ごし、時には八神家一同やなのはたちとも過ごしてきたのであるから、そこは大目に見ても大丈夫だろう。

ヴィータだってそんなことくらい分かっている。だから彼女が心配しているのはそんなことではなく、この部隊そのもののことだった。

「三提督直属部隊・ナイトオブブラウズって言ってもよ、実働はこれが初めてな訳だし、色々上手く行くのかなってさ」

「まあ確かにそうやけどな。でも地上本部の指導者がレジアス中將からマネキン一佐——あ、今は准将やけど、あの人に変わったから、その分いくらかはやりやすなってると思うよ」

「ちよつと待って！」

「うん？カレン、どうしたん？」

「アンタ、今『ナイトオブブラウズ』って言ったわよね？」

「あ？言っただけど、それがどうかしたのかよ？」

カレンの思考をただ一つのものだけが支配している。何故その名を冠した部隊が存在しているのか。

おそらくその名称は数日前にフェイトから聞いた、彼女たちの『協力者』から聞いたのであろう。故にそれ自体は知っていても不思議ではない。

しかしそれを部隊名にする理由が分からない。自分にとっては最悪の国の、最悪の軍の、最悪の名前なのに。

だが彼女たちの雰囲気からしても、その名前に悪い印象を持っている訳でもなさそうである。いや、むしろその逆である可能性の方が高かった。

もしかしたらその協力者はブリタニア信者だったのかもしれない。ならば黒の騎士団はもちろん、超合衆国を巨悪の様に伝えている可

能性があつた。

（だったら余計言つ訳にはいかないわね。シュタットフェルトで通しきらなきゃ）

「いや、どうしてその名前を付けたのになつて思つて」

「ああそつか。お前の出身世界も同じだったな」

「ええ。だから、ね」

「フェイトちゃん、協力頼んだのにそれは教えてへんかったん？」

「ゴメン、忘れてた」

「じゃあどこまで話したの？」

苦笑いを浮かべながら謝るフェイトになのはが問いかける。

「JS事件とかアロウズ事件とか、大体のことは話したよ」

「そつか」

「それでどうしてなの？」

「あのな——」

はやては何か懐かしいモノを思い出そうかともしているように、2年前の事件解決後の記憶を引っ張り出す。

カレンに話しているのははやてだが、カレンを除いてここに居る全員があゝの事件に深く関わっている。

彼女たちもまた、はやてにつられて懐かしそうに彼の事を思い出していた。

—— 2年前

独立治安維持部隊アロウズは管理局の正義を信じて立ち上がった

管理局と、アロウズを裏から操っていたイノベーター、リボンス・アルマークによる管理という名の支配を許さなかった施設武装組織ソレスタルビーイングによって壊滅させられた。

この事件の1年前にはJS事件が起こっており、そう時を置かずして起きてしまった今回の事件。

これらの事件を重く受け止めた管理局上層部は2度と独立治安維持部隊というような部隊を認めない事を公表するとともに、重大な事件が発生した時に迅速な対応をするため1つの部隊の立ち上げを決定した。

それはアロウズのように独立した部隊ではなく、伝説の三提督直属部隊としての位置に配されることである程度の指揮権が与えられるが、あくまでそれは現場レベルでということに収まった。

部隊名にはJS事件、アロウズ事件の解決に多大な貢献をした協力者の世界にあった最強部隊、ナイトオブ라운ズの名が冠されることになった。

本局のとある一室にてそのことが伝えられた。

現在、この部屋には実に沢山の人間がいる。なのはやフェイトを始めとした元機動六課所属のEース組と、刹那・F・セイエイなどのガンダムマイスターやサポートメンバーを含むCB組。そして管理局上層部の人間である。

「私ですか？」

「そうだ。世界を救った奇跡の部隊、機動六課の創設からやってのけた君以外に適任者はいない」

「はやてちゃ——八神二佐すごいですう！」

「でもホントに私なんかでいいんでしょうか？私なんかナイトオブワンでも・・・」

はやては周囲に居る仲間たちを気にしながらも戸惑った顔で上官を見ている。

彼女が何に対して戸惑いを見せているのか。それはこの上官が持つて来た話の内容に他ならない。

ナイトオブラウNZは部隊員数や保有ランクに明確な制限がある訳ではない。緊急時に動く部隊だというのに、そんなものがあつては意味が無いからだ。

しかし、だからといってそこに属する隊員がそれぞれ勝手に動いてしまつても意味が無い。

つまりは緊急時に動く部隊だからこそ、仲間から絶大な信頼を寄せられている絶対的なまとめ役が必要となるのだ。

しかも過去にしっかりとした実績があり、尚且つアロウズのような危険思考が無く、世界平和を真に願っている者でなければならぬ。

そこで過去に幾つもの事件を解決に導き、確固たる信念を持つている八神はやて二等陸佐に白羽の矢が立ったというわけだ。

はやて自身そういった部隊の存在を望んでいる。だからこそ機動六課を設立したわけなのだが。

しかし今、いざそうなってみればこの部隊のまとめ役——ナイトオブワンという名の隊長という役目を任されるのには少なからず抵抗があつた。

5年前のCBの件を知らなかった自分なんかで良いのだろうか。なにより自分よりも他にもっと適任者がいるのではないか。例えば

「スメラギさんの方が向いてるんじゃないですか？」

スメラギ・李・ノリエガ。CBの指揮官である人物。

そもそもCBのメンバーはそれぞれの分野で最高クラス的能力を有している。

だからこそスメラギの指揮能力も例外になるということではなく、管理局内でも間違いなく最高クラスだと断言できた。

確かにそれは誰から見ても明白で、はやてとスメラギを比べれば10人中10人の人間がスメラギの方が優れた指揮官だと答えるだろう。

そんなことははやての前に居る上官も分かっている。

しかし管理局としてはCBという組織よりもはやての方が信頼できる。そう、これはある意味において指揮官能力よりも信頼出来るか出来ないかの問題なのである。

もちろんはやてにもそれなりの指揮官能力があるからこそこの話が来ているのだが、今はそれよりも信頼の度合いが重要視されているということだ。

「ちょっと待つて。私を推薦してくれるのは嬉しいけど、私がその話を受ける事は無いわ」

「どういふことです？」

「本来部外者である私たちをここに呼んだのは彼女たちだけでなく、私たちソレスタルビーイングもナイトオブブラウンスに加えるためです。ね？キム中将」

「・・・、さすがはソレスタルビーイングの指揮官だ。こちらとしても出来ればそちらを放置したくはない」

「俺たちはソレスタルビーイングだ。どこの組織にも属さない」

「そう言うと思っていた」

管理局からすればCBが局員となればその後は目の届く範囲に居る事になるし、何より貴重なエース級戦力が入ることになる。

しかしCBという組織は世界の抑止力——もっと端的に言えば管理局の抑止力として存在しているのだ。そんな彼らが管理局に入るはずがない。

そんなことは百も承知だったが、キム中将は入ればラッキー程度に思っただけで勧誘しようとしていた。結果的には勧誘する前に断られてしまったが。

「俺たちがここに來たのは、今後管理局がどう対応していくのかを聞いたためだ。八神はやて、お前はどうするんだ？」

「私は・・・」

刹那に問われたはやては先程までとは打って変わり、力強い眼差いで周囲に居る仲間を見る。

そんな彼女に仲間たちは何を言う訳でもなく、ただ黙って頷く。それで十分だった。

「キム中将、その話お受けします」

「そうか、分かった。ラウンズのメンバーは現時点では君たち元機動六課組だけだ。とりあえずその中から君の副官を1人選んでくれたまえ」

「ほんならリインでお願いします」

「リインでいいんですか？」

「もちろんや」

はやてが隊長を引き受けたことでナイトオブワンが彼女、副官のリインがナイトオブツゥという位置付けになった。

残りのメンバーであるフェイト、シグナム、ヴィータ、アギトがナイトオブスリーから順に席を埋めることになった。

なのははと言えば、一時的にとはいえアロウズに属していたことを理由にこの話からは辞退すると本人が申し出た——のだが、逆にその時の経験をした唯一の魔導師としてラウンズに力を貸して欲しいと却下された。

それでもなのはは辞退すると言い張っていたのだが、はやてを始め元六課組から説得を受け続けた。

最終的には『なのはちゃんがおらへんかったら戦力が足らへん』なんていう当初の理由とは全く関係ない話に発展していた。

何を言っても食い下がるはやてたちにいい加減諦めもついたのか、
なのははため息交じりに承諾の返事を返し、ナイトオブセブンの席
にその名を連ねる事になった――。

こうして2年後の現在に至るまでナイトオブブラウズは7人から
変化がない。

一応、元機動六課組であるスバルを始めとしたフォワードたちが
候補に挙げたこともあるが、なのはたちに比べれば今はまだ実力
不足ということで結局戦列に加わることは無かった。

「――まあそんなわけでナイトオブブラウズが結成されたんよ」
「へえ。ここも色々あるのね」

「それではやてちゃん、今回の招集はやっぱり・・・」

「そうや。最近頻発するようになった人型ロボット――ナイトメ
ア部隊の襲撃の件についてや」

やっぱりそうか、そう言いたげな顔をしているメンバー。

この中で実際にナイトメアと交戦経験があるのはなのは、フェイ
ト、シグナムの3人。カレンは元の世界にいた時から戦っているの
だからこれには入っていない。

彼女たちからすればナイトメア部隊は確かに数こそ多いし、性能
もガジェット各型より格段に上のレベルで完成されている。

それでも、そこまで脅威的な敵だとは思えなかった。

だから今回のナイトオブブラウズ召集にあたって、そこまでする
必要があるのかという疑問を抱かなかったわけではなかった。

「正直ここまでする必要ってあるのかな・・・、って思ってたけど」
「だがあれほどの数のナイトメアを出して来るんだ。念を入れるこ

とに越したことは無い」

「ま、シグナムの言う通りだな。何も無けりやそれで済むしな」

「私はこのまま何も起こらずに済むとは思えない」

「フェイトちゃん？」

「実はね、騎士カリムが新たな予言を解読してるんだ。それで先日解読できた部分を教えてもらったんだけど・・・」

「騎士カリム？」

「カレンには話したでしょ？ほら、昨日の」

「ああ、あれ」

昨日はカレンが聖王医療院で過ごす最後の日だった。カレンはそうなるとは思っていなかったが。

既に身体は全快しており、万全の体調に戻っていた。だということにすることが無く暇を持て余していたところにフェイトがお見舞い（？）にやって来た。

その時に、明日には元機動六課の隊舎へ移ること話された。それに合わせてカリムの予言を話し、おそらく今後は戦いが始まるであろう事も。

あの預言って騎士カリムって人のだったのか、とカレンが1人考えている内にも話は進むが内容は予言に関することで、カレンが聞いていなくても問題なかった。

「——っというのがカリムの予言なんだ」

「なんやフェイトちゃんも聞いてたんか」

「も？」

「いやあ、ナイトオブブラウズを招集したんもその予言を聞いたからなんよ」

はやてにとつてカリムは姉のような存在であるため、自然とはやての元にはそういう情報が入ってくる。

しかしフェイトが予言を聞いていたことは実に意外だったのか、少々驚いた調子で返した。

「それにしてもその予言、JS事件の時の予言と似てるね」

「似てるっつかさ、酷似してるってのが合ってんじゃねえか？」

「酷似か・・・。ヴィータ、お前にしては難しい言葉を知ってるな」
「ですう」

「だな」

「うっせえ！」

シグナムとリイン、アギトが揃ってヴィータを虐める。いや、アギトはワザとらしいがシグナムとリインは本気で感心しているようだ。

ヴィータ、一体君はどこまで子ども扱いされれば済む子なのだろう。

「まあまあ。話戻すけど、今回の予言が酷似してるのは偶然や無いと思うんよ」

「確かに偶然で済まされたらこっちとしてはたまったもんじゃないよね」

「せやからまずはどう動くのかを明確にしようと思ってる」

「どうするの？」

「数日後に開かれる公開意見陳述会の警備や」

公開意見陳述会とは、主要世界において1・2年に一度行われる会議のこと。

発表された地上本部の運用方針に対する議論が行われ、その様子の公開は当該世界のみならず各世界で行われる。

今回はアーマーデバイスの運用に対する注目が集まっている。アロウズ事件では疑似太陽炉を搭載して無人機だったとはいえ、

ジnkスとアヘッドがその高性能っぷりを遺憾なく見せつけた。

現在は疑似太陽炉の使用は認められていないため、現時に比べれば確実に性能は落ちるが、汎用性は確かだ。

よって陸空問わず魔導師たちにアーマーデバイスを支給するというのが今回の主な議論だ。

空戦適正の無い魔導師に支給されるデバイスにはランドスピナーが装備され、よりスピーディーに任務をこなせるようにとの配慮もされている。まあその配慮も、今回の議論の結果次第では意味がなくなるが。

また、なのはを始め個人専用のデバイスを持つ魔導師には支給されることは無い。あくまで一般的な魔導師が対象とされている。

「公開意見陳述会ですかあ？」

「予言が酷似してるし、可能性は高いかな」

「じゃあ決まりだな」

「ああ、他に何かがあるわけでもないしな」

「でも仮に会場で襲撃があつたとしたらますますJS事件に似てることになる」

「フェイトちゃんそれやけどな、背後におけるその何者かはJS事件を再現しようとしてるんや無いかと思うんよ」

確かに、と思う。

予言が酷似しているし、公開意見陳述会の会場が襲撃されればそれはもうJS事件を真似ている、としか言えなくなる。

フェイトはそう考えたが、はやてはその逆を考えていた。

予言がJS事件に酷似しているから公開意見陳述会が狙われる。だからJS事件の再現をしようとしているのではないかと。

ああ、やっぱりはやては優秀な指揮官だなと感じる瞬間だった。

「それとな、もう一つ気になることがあるんよ」

「何？」

「JS事件の時に当てはめて考えると、ナイトメアはガジェットの位置にあたると思う。つまりや、今回の事件では戦闘機人の位置にあたるナイトメアも出てくるとちゃうやろかって思うんよ」

「量産型ナイトメアの上位にあたるやつがってことだね？」

「そのとおりや」

それは可能性として十二分にあり得る。むしろそうでない可能性の方が低いだろう。

量産型ナイトメアであるサザランドやグロースターだけでは、とてもじゃないが管理局と渡り合うなど不可能なのだから。

「まあ今はそこまで考えても仕方あらへんし、そもそも出て来ても倒すだけやしな。まあ頭の片隅にでも入れといてな」

今日の話はここまでや、とはやてが立ち上がった。

どうやらこの後は自由にしていよいよで、カレンはどうしようか考えていた。

するとシグナムが話しかけてきた。

「シュタットフェルト、この後空いているか？」

「え？まあ空いてるけど」

「ならば手合わせを頼みたい。ここの所骨のある相手と戦うことも無くてな」

「いいわよ。ちょうど私も身体を動かしたかったところだから」
「フツ」

相変わらずバトルマニアやな、とはやては小声で突っ込み、なのはたちはシグナムの相変わらずっぷりに苦笑いを浮かべていた。

唯一フェイトが、ああしまった！とでも言いたげな顔をしていた。

そう言えばこの人、3年前にスザクとの模擬戦の話が出た時にも出遅れていた。きっと模擬戦そういふことには縁遠いんだね、となのはたちは納得していた。

10分後、はやてとリインを除いたメンバーは海上に建設された訓練施設へと来ていた。

2年振りに訪れたこの場所のなんと懐かしい事か。海上から吹いて来る潮の香りを乗せた風が鼻孔をくするぐる。

（ヒヨっ子のフォワードたちに教導してたのが懐かしいな）

（スバルたちにとっては地獄のような）思い出を掘り起こしていたのはをよそに、既にカレンとシグナムは戦闘準備に入っていた。もう、ちよつとくらい思い出を振り返る時間とかくれてもいいのに、なんて思いもする。

しかしあの2人にはそんな事どうでもいいらしく——というかカレンにそんな思い出は無いが——とにかく目の前の模擬戦のほうに大事だということだ。

「レヴァンティン、セットアップ！」

<Ja.>

「行くよ紅蓮！」

2人を一瞬だけ紅蓮と紫の光が包み込んだ。

紅蓮色の鎧を纏うカレンの右腕だけは見るからに異質過ぎる。巨大なかぎ爪と化しているそれはとてもではないが人間の腕ではありえない長さだ。

紅蓮の持ち主であるカレンと、それを修復する際に解析結果を聞

いているフェイト以外は視線を釘付けにされている。

フェイト曰く、それはカレンの右腕を覆い隠すように装備されていて、中にはちゃんと彼女の腕があるそうだ。

カレンの手がある部分の内部にはレバーがあり、彼女自身の手はそれを握る様になっているらしい。そしてかぎ爪本体はカレンの意思で自由に握ったり開いたりするとの事だった。

「では始めるとしよう」

「ええ」

カレンはランドスピナーを走らせ、文字通り地を駆けてシグナムに接近する。

シグナムは地を蹴り、一足飛びにカレンに斬りかかった。

「はああああっ！」

カレンは瞬時に背部から鎧通しと十手を組み合わせた形状をしている短剣・呂号乙型特斬刀を逆手に抜刀し、シグナムの斬りおろしを右薙ぎで弾いて逸らせた。

そこからシグナムは即座に体勢を立て直してレヴァンティンを左薙ぎに打ち込もうとした。

が、それよりも早くカレンの右腕が真っ直ぐ突き出される。

「くっ！」

咄嗟に反時計回りの方向に上半身を振ってかわす。しかしかわされず、僅かに左脇腹が切れて血が噴き出る。

傷は極めて浅く、出血量もまるで大したことは無い。それを瞬時に理解したシグナムは構わず右手だけで今度こそレヴァンティンによる左薙ぎを繰り出した。

かぎ爪の突きによる攻撃は隙が大きく、この斬撃は決まるとシグナムはある種の確信を得ていた。

それと同時にこれでもう終わりなのかと、興が削がれる思いもしていた。

「なっ!？」

「この程度？」

いや、どうして。何故決まっていない？ シグナムは今、それだけに思考が支配されている。

レヴァンティンの刀身の中腹を見れば、呂号乙型特斬刀に挟み取られているではないか。

しかし真に驚くべき点はそこではない。それを眉をピクリとも動かさず、当然のようにやってのけたカレンが信じられない。

枢木ならば、あの男ならばやってのけるかもしれんな。そういう思いはあった。

だがどうだろう。それをやってのけたのは目の前に居る、そう強くも見えない少女ではないか。

しかし今、改めて見るその双眸からは確かな力強さを感じる。先程までの普通の少女の目とはまるで違う、本物の戦士のようなそれを。

「もらった!」

「しまっ——」

レヴァンティンを挟み取られて驚いたシグナムは伸びて来るカレンの右腕に僅かに反応が遅れた。

普通ならばギリギリで避けられそうなこの距離でも、カレンが相手ではそれも出来ない。

左右で腕の長さが違うというのは実に戦りにくかった。攻撃で左

右が変わる度に避ける距離も変わる。戦闘技術も高いと来れば厄介なことこの上なかった。

回避は間にあわないと判断したシグナムはレヴァンティンの鞘を出現させ、逆手に持ったそれでかぎ爪を叩き落とそうとする。

急に鞘を出現させた事でカレンが対応できずにかぎ爪は弾かれる。それがシグナムが予想した結果だった。

しかし実際には何と驚いた事に、カレンは突然の出来事にも見事に対応してかぎ爪で鞘を掴み取った。

その瞬間、シグナムの背筋を何か得体の知れない寒気が走った。

騎士としての戦闘経験^{カン}が告げている。逃げる、と。目の前のこの紅い少女から今は逃げなければならぬ、と。

シグナムは即座に鞘を手放し、戦闘経験が発する警告のままに後ろへと飛び退いた。

「なん・・・だと？」

目の前では何が起こっているのだろうか。いや、分からない。

ただ1つだけ分かることは、カレンの右手の掌からパンツパンツという何かが弾けるような音と共に紅蓮の光が発せられ、鞘が泡立ったように膨らんでいくという、それが明らかに異常な光景だということだけ。

膨らみが全体に行き渡った辺りで鞘は限界を迎えたのか木端微塵に爆散してしまった。

直後、右下腕外側からカートリッジが1発弾き出された。

「発動前によく下がれたわね」

「何だ今のは？」

「戦ってる最中にそんなこと教えると思う？」

「それもそうだな。だが、これで心置き無く戦えるというものだった！」

正体不明の右手の攻撃。しかしそんなことでシグナムが怯むはずもない。

強く地を蹴り、カレンへと飛びかかった。

一方で観戦組は先程の攻撃に驚いていた。今回ばかりはデータ上で紅蓮の事を知っているフェイトも同じだった。

その攻撃はなのはたちが最初に徹甲砲撃右腕部を見たとき以上に彼女たちの視線を釘付けにしていた。

「フェイトちゃん、あれって一体・・・」

「あの右腕は徹甲砲撃右腕部っていうの。掌から発射されるあの紅蓮の光は輻射波動砲っていうもの」

「輻射波動？なんだそりゃ」

「それはね電磁波放射と同意で、高周波を連続的に叩き込むものなんだ。まあ要するに指向性のある超強力な電子レンジっていうのが分かりやすいかな」

「超強力なって・・・、強力過ぎだろ。レヴァンティンの鞘が一発かよ」

「にや、にやはは・・・」

「まあ電子レンジなのは無機物とか、そういう物に対してだけ。人体には魔力砲弾と変わらないよ」

「く、くっそお！おいシグナム！アタシのユニゾンが無いからって負けんじゃねえぞ！」

なのはとヴィータはあの攻撃が電子レンジかと思うとなんだか呆れてしまい、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ちょっと待って。さっき輻射波動砲って言ったよね？」

「うん」

「砲って言葉が付くってことは、もしかしてアレって・・・」

「さすがはなのはだね」

その通りだよ、とフェイトは続ける。

もちろんフェイトも見たことは無いが、輻射波動砲はビームのように発射することができるし、また広範囲に拡散させて多数の敵に攻撃を行うこともできる。

その説明をするとますます呆れてしまったのか、最早アギトまでもが苦笑いを浮かべるだけだった。

「あ、そういえばさつきカートリッジが排出されてなかった？」

「そうなんだ。元居た世界ではエナジーファイラーっていうのを使ってたみたいんだけど、この世界に来て紅蓮の構造もちよつと変わっちゃったみたいで」

「そのエナジーファイラーを装填する場所がカートリッジに代わってたってか？」

「うん。だから今はカートリッジを渡してあるんだ。装填弾数は12発だからあと11回使えるね」

そんなに装填出来るのかよ、とアギトはもう青ざめ出していた。彼女たちがフェイトから説明を聞いている間に模擬戦は終盤に突入していた。

この模擬戦は近年でも稀に見る程の血戦だった。

カレンもシグナムも一度戦いになれば徹底的に戦う性分である故か、ちよつとした切り傷などお構いなし。お陰で全身のあらゆる箇所血が滲んでいる。

「さてシュタットフェルト、そろそろ終わりにしよう。余り怪我が酷くなると主に怒られてしまう」

「そうね。そろそろ決着付けましょう」

戦いの場は既に空中に移っている。

シグナムは最初、空に上がっても大丈夫か？ と模擬戦を楽しめなくなるかどうかの心配をしたが、それも杞憂に終わった。飛翔滑走翼を展開してカレンも空に上がって来たからだ。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

<Explosion.>

レヴァンティンからカートリッジが排出されると同時に刀身を炎が包み込む。

勢いよく燃え上がるそれはまるで何かの生き物のようだ。

シグナムは空を駆けてレヴァンティンを振りかぶった。

カレンは右腕を構えて、シグナムが来るのをじっと待っている。

「紫電・・・、一閃っ！」

迫り来る炎の剣に向けて右腕を突き出す。

レヴァンティンが右手に触れる寸前に輻射波動を発動させた。

紫電一閃は魔力を込めた斬撃というただそれだけのあまりに基本的な技法だ。

だがそれ故に威力と精度は極めて高く、かつて数多くの敵を撃ち落としてきたシグナムの必殺の一撃でもある。

受け止めることには成功したが衝撃までは殺せない。物凄い衝撃がカレンの全身を駆け巡った。

「ぐうつ」

「はあああああああっ！」

「うああっ!？」

シグナムが力任せに振り切った結果、カレンは後方へと弾き飛ば

された。

尚も追撃に向かってくるシグナム。その瞬間、カレンはここだ！
と思った。

後方宙返りの要領で体勢を立て直し右腕を前に突き出す。今度は
手首の周りにある6本の円柱状のパーツが展開される。

「喰らいなあっ！」

ほんの1、2秒程度の溜めの後に紅蓮の光が一条、シグナムに向
かって発射された。

「何っ!？」

<P a n z e r s c h i l d . >

シグナムの前にベルカ式魔法陣が出現し、輻射波動砲を受け止め
る。

集中していないと今すぐにでもバリアが破壊されてしまいそうで
それ以外の行動が取れない。

照射が終わりバリアを解除して再びカレンの元に駆け出すが、既
にその時にはカレンはシグナムに向かって飛翔している。

輻射波動を防いだ上で攻撃に移るとなると、やはりどうしても出
遅れてしまう。

しかし幾分か距離があつたことが幸いしてか、攻撃の姿勢に移る
には僅かながら時間が残されていた。

「これでっ！」

「おおおおおおっ！」

右腕の突きとレヴァンティンの横薙ぎが同時に相手に到達する――
かと思われたが、その寸前でお互いの攻撃は止まっていた。

「実に心躍る戦いだった」

「強いわね、シグナム」

「お前もな」

（いや、本当に強いな。まるで枢木を思いださせるほどにな）

血戦というのは実に心臓に悪い。

2人の模擬戦があまりに本気過ぎて見ているのはたちは終始ハラハラドキドキしていた。

模擬戦終了直後など目が点になり、大きく開けられた口からは何か白い、かなり大切だと思われるものが出ていた。まさにそれこそ魂が抜け落ちたという表現がぴったりだろう。

その後、沢山の切り傷を作ったカレンとシグナムは医務室へと向かった。

そこではナイトオブブラウズ召集に伴い、サポートメンバーとして来ているシャマルに説教をされながら治療を受ける2人の姿があった。

—— 某所

薄暗い部屋の中、球体の形をした大きな機械が光を発している。

同じ部屋の中には幾つもの培養カプセルらしきものが設置されており、その中の一つが稼働していた。

中には成人男性と思われる姿をした人物が眠る様にして入っている。

「フハハハハ。もうすぐだ、もうすぐ……」

どこからともなく聞こえてくる不気味な声だけが部屋に木霊^{こだま}していた。

STAGE 06 ナイト オブ ラウンズ（後書き）

お、おまたせしました。

ストーリー自体は結構出来あがってるんですが、文章にするとと中々むずかしくて・・・。

感想を頂けると非常に嬉しいです。

STAGE 07 血染めの 魔女

STAGE 07

血染めの魔女（前書き）

前回から間が空きすぎて、自分が書いてるものなのに色々困ってました……。
おかしい個所とかあるかも……。

—— 7月15日 中央管理局 地上本部 AM 03:10

今、この場所ではかなりの人数の管理局員が警備にあたっている。それは管理局地上本部に属している部隊の魔導師が主となっていて行われているようであったが、その中には本局所属であるのはたちの姿も含まれていた。

何故こんなにも厳戒態勢が敷かれているのだろうか。その理由は至って簡単である。明日—— いや、もう日付が変わっているのだから今日か。ともかく本日7月15日、この場において公開意見陳述会が行われるのである。

例年よりおよそ2ヶ月早い、早急に議論すべき議題があるとして早期化された。内容は『アーマーデバイスの本格的な実用化』について。

2年前の事件にて疑似太陽炉搭載型は禁止され、現在では疑似太陽炉の生産自体行われていない。しかしアーマーデバイスそのものの汎用性については高く評価されており、疑似太陽炉非搭載型で生産をしようという動きが高まって来ている。

非搭載型ならば例え破損したとしてもドライブが爆発して死亡することも無く、且つ高い汎用性を生かして魔導師部隊の強化を行うことも出来る、というのが大多数の意見。

それに対して異を唱える者はほぼおらず、この案件はほぼ通っているに等しいというのが管理局内外を問わない見解だった。だから、陳述会が早期化されたのである。

そして、今回の警備にナイトオブブラウズが当たることは既に周知の事であり、何ら問題も無く警備に当たることができていた。そ

れは単に、事実上の地上本部最高司令官であるカティ・マネキン准将の柔軟な対応によるおかげであった。

もしも、という話に意味は無いが、もしレジラス・ゲイズ中將が生きていて、現在もかつての地位にいたとしたら、こう上手く事は運ばなかったであろう。

ナイトオブブラウンスは緊急事態に早急な対応をするための部隊として結成されたわけだが、あくまで本局所属の部隊であることを忘れてはいけない。ヴィータ曰く『普通の老人会』らしい、かの伝説の三提督直属部隊ではあるが、そもそも彼らの所属が本局なのだから結局は本局所属の部隊という事になってしまうのが現実だ。

だから本局との中が最悪なレジラスが生きていたとすれば、彼は間違いないナイトオブブラウンスそのものに猛反発し、この部隊が今日この警備に当たること困難極まりなかったに違いない。

しかし幸いにも、現在は彼に代わってマネキンが統括している。彼女には本局がどうだの、地上本部がどうだのと言った思考は無い。そのような下らない事に構っているくらいならば、より良い明日のために出来る事をするという、まさに局員としても人間としても鑑の様な人であった。

時間からしても日など昇っている筈も無く、辺りは2つの月と無数に存在してる星の光、そして外灯にみよって照らされていた。雲はほとんどなく、空気は澄んでいる。単純に綺麗だと思う者も居れば、こういう時に空が綺麗過ぎて、返って不気味だと思う者も少なくは無かった。

警備に当たっている局員の中になのはたちが居るわけだが、当然のことながら全員が固まって行動している訳では無かった。

なのはとヴィータ、フェイトとカレン、シグナムとアギトという3組に分かれて警備を行っていた。シグナムとアギトが組んでいるのは言うまでも無く、相性抜群の騎士と融合騎だから。フェイトとカレンという組み合わせは、カレンが一番見知っているのがフェイトだからという理由から。ぶっちゃけ、なのはとヴィータは残り者

同士という組み合わせだった。彼女達は彼女達でとても仲がいいので全く問題は無い。

もともとは各自別々に警備に、という案があった。しかし、さすがにカレンを1人で警備に当たらせるのはどうかという事になり、結局は念には念を入れてという運びになり、2人1組になった。

部隊の指揮官であるはやては現在、リインと共に旧機動六課隊舎に居る。一応部隊の隊長であるため、彼女も陳述会に参加することになっている。故に今、彼女は夢の中だった。

午前3時を回っている深夜だというのに、少々の蒸し暑さが残っている。厳戒態勢での警備が行われている事に合わせ、普段よりも多くの外灯が付けられている事が原因だろうか。

そんな中、ヴィータと共に警備に当たっているのは高町なのは。22歳になった彼女は以前よりもさら落着いた雰囲気を出しており、少しずつではあるが大人の女性の魅力を持ち始めていた。しかしどこか幼さも残しており、彼女の事を知る者からすれば『昔と変わらない』と答えるであろう。

結局のところ、あまり変わっていないのである。彼女は今、警備の真っ最中だというのに深い深い――もしかすればマリアナ海溝よりも深い、かもしれないため息を吐いていた。

「はあ……」

「どうしたんだよ、何か心配事でもあんのか？」

「え？ うん、まあ……ね」

「どうせ襲撃があつたら、って心配してんだろ？」

大丈夫だって。と、無駄な心配をするなとヴィータは言う。しかしその言葉は、なのはに対して効力を持ち得なかった。

何故ならば、なのはは今、そのようなことに思考を巡らせている訳では無かったのだ。

そもそもそれ以前に、この件に関して心配など元からしていない。以前のＪＳ事件に比べて警備は増員されたし、今回は自分達も最初から屋外の警備に当たっていて、何かあればすぐに動く事が出来る。襲撃が起きてしまったとして、今回はＪＳ事件時に比べても被害を抑える自信はあった。いざとなればギアスを使用し、火力を増大させるつもりでもいる。

だから今、なのはを悩ませているのは全くの別件であつた。

（はあ……しいちゃん、大人しくしてくれ、よね？）

「？」

これ以上は何も言わない方がいいのか？ と、半ば疑問に思いながらもそう判断したヴィータは、それ以上何かを言う事は無かつた。そして、なのはを悩ませているのは何を隠そう、彼女の家に我が物顔で居候中である緑の髪をした魔女、もとい少女であつた。

—— 7月14日 高町なのは邸 P M 0 8 : 2 6

これから公開意見陳述会の会場警備という超重要任務が入っているのはは今、自宅のリビングにて緑の髪の少女、Ｃ・Ｃ。——通称しいちゃんに厳命を出していた。

そのＣ・Ｃ。であるが、相変わらず常日頃から宅配ピザを注文しており、それは今日も例外では無かつた。そして今もなのはが厳命を出している途中だというのに、口いっぱいにピザを頬張っている。頷いてはいるが、ちゃんと聞いているのかどうか激しく疑問に思うところである。

「——そういう訳で、私はこれから警備に行かなきゃいけないの。それで、この前みたいにガウエインで出てくるとか止めてね？」

「分かつてはいるが、襲撃があるかもしれないんだろ？ もしもの事があつてお前に死なれるのは困るんだが？」

「死にません！ 私こう見えてもしぶといんだから」

「絶対、と言い切れるのか？」

「それは……」

Ｃ・Ｃ。の言う通り、戦いの場においては予想外の事などいくら

でも起きる。故に絶対大丈夫などと言いきれるはずが無い。そのことはなのにも良く分かっており、やはり言葉が出て来ない。

「でもしいちゃんモルモットの存在を公にする訳にもいかないでしょ？ 最悪実験動物モルモットつてこともあり得るんだよ？」

「それは分かっている。大きな組織の前に不老不死の人間が居れば、その謎を、原理を解明したいという奴などいくらでもいるだろうからな」

「それに、会場警備にはカレンも来るし」

「そうなんだ、それが1番の問題だ」

「それが1番なの！？ と、突っ込みたくなるのはだが、そこはC・C・にも何らかの事情があるのだろう。それにもうすぐ家を出なければならぬ。変に話が発展して時間を喰いたくは無く、喉まで出か掛かった突っ込みの言葉をなんとか飲み込んだ。

「ま、出来る限りバレないように上手くやるさ」

「ちよつ、だから来ちゃダメだってば！」

「そういうな。気になることもある」

「気に、なること？」

「そうだ、とC・C。彼女が持ち出したのは、以前になのはがポロツと話したカリム・グラシアの予言の件だった。

その中の一つのワードがどうしても気になる、そうC・Cは言う。なのはおるか、予言をした当の本人であるカリムでさえもよく分かっていないのに、一体何が気になるというのか。あまり時間が無いのはが簡潔に説明を頼むと――。

「そのカルム……、カリムだったか？ とにかくその女の予言に『天駆ける数多の鎧』『無限の欲望のなずき』『円を描く鎧』というのがあっただろう？」

「うん、確かにあったけど？」

「最初の2つは良く分らなかったが――いや、最初は全部分らなかったんだが、3つ目について色々と考えていたら煮詰まってきた。それでシンプルに考えてみたんだが、もしかすればそれは

『ナイトオブブラウズ』の事かもしれん」

ナイトオブブラウズ。なのはも属する、時空管理局本局の部隊の1つ。でもどうしてそれが？ 考えても答えは出ない。

なのはあくまで頭の中で考えていたつもりだったが、どうやらそれは無意識のうちに声に出していたらしかった。

「お前達のことではない。私の世界にあったナイトオブブラウズだ」
「え、しいちゃんの？」

「サザードやグロースターが出て来ているんだ。そうであったとしても何ら不思議ではない。そして、そう考えるなら『天駆ける数多の鎧』というのは量産型の事ではないのか？」

確かに、となのはは妙に納得できた。実際、C・C・Cが言った程度のことは確たる理由にはならないのだが、不思議と説得力があった。

そして、そうだったとすれば気になるのはC・C・Cの世界のナイトオブブラウズの戦力がいかほどのものかという事である。仮にも超大国である神聖ブリタニア帝国最強の十二騎士で組まれた部隊なのだ。下手すれば枢木スザクが十二人分という事態もあり得なくはない。その光景を思い浮かべたなのはは背筋を何か冷たいモノが駆け巡った気がした。

「えと、ギアスの世界？ のナイトオブブラウズってどれくらいの戦力だったの？ まさかスザク君並みの人が12人とか言わないよね？」

「スザクを他と混ぜるな。アイツはちょっと特別だ。だがまあ、その認識はあながち間違っではないか」

「え……」

「スザクと同程度とまでは言わないが、そいつらもナイトオブブラウズである事には変わりはない」

スザクと戦えば誰でも分かることだが、彼にいくら戦術を練って仕掛けても、彼はそれらを尽く潰す。要するにスザクの戦術の方が上なのだ。

だからギアスの世界のナイトオブブラウズといえども、彼に及ばないのであれば勝ち目などいくらでも見つけれれると思った。

しかし――。

「私達は局員だからいいけど、そんな相手が出てきたらカレンを戦わせる訳には……。協力者ではあるけど一般人だし」

「……カレンなら大丈夫だろう。アイツは強い」

「強いのは分かるけど、そんなに？」

「ああ」

「しいちゃんそういうなら……」

フェイト達はもちろんのこと、Ｃ・Ｃ・と同居までしているのはですらカレンの本当の素性は知らない。だからカレンがスザクと同等の力を持っている事を知らないのはは彼女の事を懸念したのだ。

それはＣ・Ｃ・なりにカレンの事を考えた結果だった。Ｃ・Ｃ・が考える限りでは、なのはたちは相当スザクと親密な関係であり、そんなところへカレンが敵対していたと伝えればどうなるか分からない。

だからカレンの事は知っていると云ったが、素性までは喋らなかった。

（ゼロレクイエム完遂の日に――いや、富士上空での決戦後から居なかったからてつきり死んだと思っていたが……まさかこっちに来ていたとはな）

決戦後に来たのであればゼロレクイエムの事など当然知っている筈が無い。とすれば、会ったところで敵対心剥き出しで話をするどころでは無いと思ったＣ・Ｃ・はカレンに会う気にはならなかった。それに、そのせいでなのは達との関係を壊してしまうのは得策ではないだろうと思ったからだった。

「とにかく私は行くぞ？ このままこの家に居ても事態が解決するわけでもなかるう？」

「それはそうかもだけど……。はあ、もう言っても無駄みたいだし、

分かったよ。でも絶対バレないように細心の注意を払ってね？ 絶対だよ？」

「分かっているさ」

この時からなのはが頭を悩ませる時間は始まった。とにかくＣ・Ｃが変に事を起こさないかどうか気がかりだった。

じゃあ行くね、と言残して思い腰を上げ、深いため息を吐きながら自宅を後にした。

—— 7月15日 中央管理局 地上本部 PM00:21

時刻はすでに正午を回っており、おそらく大抵の人間は昼食を摂っている時間帯であろう。

警備に付いているなのは達にも立つたまま食べられる簡単な昼食が配られており、つい先ほど食べ終わったところだった。

警備を始めてから現在に至るまで特に何も変わった様子は無い。

警備で巡回を行っている最中、まさかと思いＣ・Ｃを探してみたが、さすがに見つからなかった。

胸を撫で下ろす思いをすると共に、お願いだから終わるまで何もしないで、と祈っていた。

「今回はそんなに時間掛かんねえだろうな」

「ん、そうだね。アーマーデバイスの実用化に関してはほぼ反対意見も無くて、もう通ってるようなものだし」

「陳述会終了予定時刻は13時だったっけか。あともちつとだ、気い抜くなよ？」

「グイータちゃんこそ」

陳述会終了予定時刻まで残り約40分。あと少しではあるが気は抜けない。気合を入れ直した2人が歩き出した、まさにその時だった——。

突如として辺りにけたたましい警報が鳴り響き始めた。一体何事

だ？ 一瞬そんな思考が脳裏を過るが、瞬時に答えが弾き出される。襲撃が始まったんだ、と。

「ヴィータちゃん！」

「分かってんよ！」

「「セットアップ！」」

すぐさま各デバイスを起動させ、バリアジャケットを装備すると空へと上がる。四方八方の様子を確認すれば、東西南北の4方向から4つのナイトメア部隊が攻めて来ているのが分かる。

「別れようヴィータちゃん」

「っ、分かった。氣い付けろよ！」

「うん！」

ヴィータと別れたなのは西側から来る部隊の迎撃に入るべく、そちらへと飛翔する。

途中、ラウンズへの全体通信でフェイトとカレンが東側、シグナムとアギトが南側へと向かうとの連絡が入った。

敵ナイトメア部隊が射程圏内に入ったことを確認したなのは足を止め、砲撃の体勢へと移る。ナイトメアの数はかなりのもので、なのはの予想を超えている。これではおそらく、いくらかのナイトメアはなのはを突破していくだろう。

もちろん最終防衛ラインの魔導師達が撃墜してくれるだろうとは思っているが、出来る限り数を減らしておいて損は無い。

「行くよ、レイジングハート。デイベインバスターエクステンション、いいね？」

<All right. Divine Buster Extension.>

ナイトメアと比べれば、当然なのはの方が射程は長い。それはつまり、砲撃のためのチャージ時間が十分に取れるということだ。

なのはは迷わずデイベインバスターエクステンションを選択し、チャージに入っている。向こうもさすがになのはが長距離砲撃を行おうとしている事を察知したようで、散開しつつ速度を上げて接近

してくる。

余裕を持つてチャージしているのはは気付いたことがある。襲撃部隊は何も空を飛んで来るばかりではない。中には地上を滑る様に移動して来るナイトメアもいる。それらは元々陸戦兵器だったということが、すっぽりと頭から抜け落ちていた。

「しまった……。やっぱりヴィータちゃんと一緒の方がよかったかも」

魔法には非殺傷設定という便利な物があるとはいえ、建物などに当たればそれらは破壊されてしまう。あくまで人を傷付けないためのものでしかないからだ。

だからもし、デイベインバスターを地上に向けて撃てば、ナイトメアをいくらかは排除できるだろうが、周囲の建物にまで被害が出てしまうだろう。だがそれ以前に、そうしてしまうと今度はなののは向かってきている空戦タイプのナイトメアを落とせない。

<There is not time doing two times of charges. Which do you bombard? I ask for the choice of the action.>

2度もチャージをしてる暇は無く、レイジングハートにどちらか一択を迫られる。少し悩んだ末に、なののは空にいるナイトメアを落とす事にした。地上にはあの子がいるから、と。

「デイベイーン……バスター……！」

放たれた砲撃はナイトメア部隊へ一直線に向かって行く。レーザービームの如く空を走る一筋の閃光は的部隊の中心を捉えている。だが、このまま進んだとしても、既に散開しているナイトメアは数える程度しか落とせないだろう。

それが分かっているのか、ナイトメアの方も特に行動パターンを変える様子も無い。そしてデイベインバスターがナイトメア部隊の眼前に迫った時だった。

なののは左目に鳥の様な文様が浮かび上がる。

「こっつ！」

すると突然ディバインバスターの先端が、何か鋭いモノにぶつかったようにして裂けていく。裂けて何本もに別れたそれは、本来なら散開していて当たるはずの無かったナイトメア達の装甲を否応無しに貫き、吹き飛ばし、次々に撃墜していく。

撃ち終わったのは、ふうつと一息入れる。敵の数を確認してみるが、それほど減っているようには見えない。だいたい3割程度良くて4割程度落としたといったところだろうか。

距離的に考えても残りは長距離砲では落とせない。近距離、中距離で落として行くしかない。やっぱりヴィータがいてくれたら、と思わざるを得なかった。

「でも、やるしかないよね」

小さく呟いて自らに言い聞かせると、レイジングハートをバスターモードからアクセルモードへと変形させ迎撃態勢に入った――。

「えっ!？」

その時だった。ナイトメア部隊の後方より大型の何かが接近して来る様が見て取れた。全高はナイトメアの優に5倍はあろうかというほどの塊。

本体は球体に近い形をしており、オレンジ色に染められている。その円周上に深い緑色をしている円錐状のパーツが5つ付属されている。

ほかにそれと同じものが無いところを見る限り、おそらくそれが指揮官機に相当するものなのだろう。

とりあえず、なのははそれを他と区別するために見たまま『オレンジ』と名付けた。

「あれは絶対に落とさなきゃだね」

<I think so.>

「まずはワンショットで様子見！」

<Axel Shooter.>

手のひらに収まる程度の大きさをした桜色の光球――アクセル

シューターを1つ作り出し、接近してくる巨大な機械に向けて放つ。アクセルシューターは直線ではなく、緩やかなカーブを描きつつオレンジに向かって空を走る。すると突然オレンジが素早く右へと動き、アクセルシューターを回避した。攻撃目標に寸前のところで避けられたそれは、後方にいたナイトメアを破壊するに終わった。

「結構速いね」

<Yes. But it is not the speed that it cannot chase.>

その間にもオレンジはなのはに近付き、とうとう攻撃の範囲内に捉えた。

放射状に外へと向いていた緑色の突起の内、上部にある2つが正面へとスライドしてなのはに向けて放たれる。

スライドした事には驚いたなのはだったが、その程度で隙が出来るほど彼女のレベルは低くない。アクセルフィンで華麗に避けて見せるが、突起は円錐の底面にあるらしいブースターを噴射して執拗になのはを追いかける。それは、どこか見覚えのある武器だと思った。

（もしかして、スラッシュハーケン？）

形状こそ全く異なるものの、射出音といい、ブースターを噴射して軌道を変えて来るあたりといい、なのはの知る限りそれはスラッシュハーケンの部類に当てはまった。

（なら、まずは武装から破壊する）

これだけ大型のスラッシュハーケンを搭載しているという事は、それが主力武器と見て間違いなさそうだった。それ以外には特に目立った武装も見当たらない事からもそう判断した。

「アクセルシューター！」

跳んで来るハーケンを避けつつも瞬時に桜色の球体を作り出す。今度は先程より二回りほど大きく、発射と同時にいくつもに分裂してオレンジへと向かう。その数は12。それらが全てオレンジの本体へと向けられている。

これだけの数が直撃すれば間違いなくタダでは済まない。とすれば、オレンジは防御行動なり回避行動なり取るだろう。それこそがなのはの狙いだった。そうして出来た隙を突いてハーケンを破壊してしまおうという算段だった。

そしてなのはの狙い通りオレンジはどちらかの行動に移るのか、後退しつつハーケンのワイヤーを急速に巻き戻していく。アクセルシューターで四方八方から狙い撃っているものの、オレンジは器用にも右へ左へと動いて上手くかわしていく。

オレンジを追尾しながら感覚を研ぎ澄ませて隙が生まれる瞬間を待ちつつ、砲撃のチャージを行う。12のアクセルシューターを操りながらチャージを行う様子は、さすがはエースというところか。

ついにその瞬間はやってきた。オレンジが避けられないよう、12のアクセルシューターを同時に突撃させ、同時に砲撃を行う構えを見せた。

アクセルシューターが到達する直前――。

「うそっ!?!」

さすがのなのはもそればかりは予想外だった。アクセルシューターが到達する直前、オレンジは高速回転を始め、到達したそれを全て弾き返してしまったのだ。

数瞬硬直したなのはだが、すぐに我に返ると回転しているオレンジに砲撃を放った。

「ショートバスターー!」

それはデイバインバスターのバリエーションの一つで、なのはの最速砲撃魔法。威力や射程などの長所をやや犠牲にして欠点を補う方向で編み出された。なのはは本来、大威力砲撃を行う場合は足を止めなければならないのだが、これに関しては高速戦闘中にも使用できるようになっている。

ともかくそれを放ち、オレンジにダメージを与えようと試みる。本来の砲撃よりも威力が落ちているとはいえ、砲撃は砲撃だ。アクセルシューターよりも威力は高い。

だが、それでも結果は変わらなかった。ショートバスターもアクセルシューターと同様に弾かれ、回転しているオレンジの前では役に立つことは無かった。

ただ回転しているだけの相手に攻撃が弾かれたことには軽いショックを受ける。しかし今はそんなことに一々振り回されている場合では無い。すぐに気持ちを切り替える。

どうやって倒そうかと、どうにか打開策を捻りだそうとするのはに、オレンジは高速回転したまま突撃を敢行してくる。

こうなると攻撃が通じない事は目に見えている。執拗に突撃をかわすオレンジを避けながら反撃の機戒を伺ってはいるが、向こうもそれを察しているのか回転を止めようとはしない。

せめてディバインバスターをチャージすることができれば、と思わなくもないが、そんな時間を与えてくれるわけが無い。今のなのはに可能な攻撃で止めるしかないのだ。

しかし射撃や砲撃を撃とうが、バインドを試みようが、高速回転によって弾かれる。もしくは器用にも合間を縫うようにして回避して来る。ちよつと不味いかも。なのはがそう思い始めた時だった。

地上より赤黒い閃光が駆けあがり、なのはに接近するオレンジの土手っ腹に突き刺さった。その光はなのはがよく知っているものと酷似している。ハドロンバスター、それが瞬時に弾き出された答えだった。

一瞬、スザクが救援に来てくれたのかと考えてしまうが、それはすぐに否定される。彼はもうこの世界にはいない。そして、現状において自分の味方でそれを撃てるのはたった一人しか知らない。

「苦戦しているようだな」

そう言いながら空に上がってくるのは、なのはの家の居候――

C・Cである。

「もう、しいちゃん！ 出て来ちゃダメって……」

仕方が無いだろう。まるで反省していないようにC・Cは言う。ダメだこの娘。言うこと聞く気無いや。戦闘中にもかかわらず、た

め息が出てしまうのはだった。

それはさておき、この状況での救援は確かにありがたい。……のだが、戦闘スタイル的には2人とも後衛である。正直微妙なところではあるが、C・C・ならあの機体を知っているかもしれないし、弱点を知っていればそれだけでも十分だ。だから、なのはは期待を込めて聞いてみた。

「しいちゃん、あの機体のこと知ってる？」

「あの機体ならば知っている。ナイトギガフォートレスとかいう部類に当て嵌まる機体だ。名前はジークフリート」

「違うかなとは思ってたけど、ナイトメアフレームじゃないんだ。弱点とか知ってると助かるんだけど」

「そうだな。電磁装甲を発生させるための部位を破壊するしかないだろうな。もしくは――」

C・C・は何やらなのはに耳打ちしていた。

一方でジークフリートだが、C・C・が放ったハドロン砲が命中するより早く彼女の反応を捉えていたらしく、高速回転によってそれすら防いでいた。

向かってくるジークフリートにC・C・はスラスターを吹かせ、単身立ち向かっていく。右手を前に突き出し、指先にある小型のスラッシュハーケンを射出した。

その程度はジークフリートにとって回避することは容易く、軌道を少し右にずらすことでかわす。そのまま突進してくるそれを、C・C・もまたハーケンを巻き戻しながら右へ軌道をずらすことでかわし、擦れ違った直後に左手のハーケンを射出する。

それを避ける事は出来ず、ジークフリートの背面の装甲に喰い込む。再度スラスターを吹かせ、その勢いを乗せた右膝蹴りを浴びせた。命中した個所はハーケンが刺さっている背面。そこには円状の緑色に光る部位があり、それが破損し、バチバチとショートしている。

ここは以前、ギアスの世界で戦った時にも破壊した事があり、そ

「——っ！ ショートバスター——！」

C・C が不老不死だという事は知っている。だから爆発に巻き込まれた程度で死ぬはずがないことくらい理解している。頭では分かっている。

だからといって、痛みまでもが無いわけではない。だから心が受け付けない。しかしこのまま迷っていてもどのみちC・C は電磁場によるダメージを受け続けるだけだ。

なのは苦渋の表情でショートバスターを放った。それは狙い通りジークフリートのみに命中し、そして予想通りに爆発を起こす。

爆煙の中からはC・C が後退するように飛び出してきた。その様子を見る限り、今の攻撃によるダメージはそれほど無いように見えた。

「しいちゃ——」

「っ！？」

なのはがC・C の元に行こうとした瞬間、彼女を追って爆煙から緑色の円錐が飛び出し、深々と腹部に突き刺さった。本来なら避けられたかもしれないが、今で終わつたと多少の油断があつたのが反応できなかった。

さらに爆煙の中からは半壊したジークフリートが飛び出してくる。半壊しているとはいえ、なのはのバスターを受けて全壊していないあたりから、なのはもおそらくC・C の事を考えて無意識のうちに威力を抑えていたのかもしれない。

ジークフリートはハーケンを巻き取る力を利用してC・C にタックルをかます。先程の様に、取り付いている体勢——いや、C・C が自ら取り付いていないこともあつてか、それに張り付いているような状態になってしまう。

C・C はスラスターを吹かせて押し返そうと試みるも、負傷している事も相まって今更ジークフリートの勢いには勝てず、そのまま連れ去られるように現空域から離れていく。

「ゴフツ—— オレンジの分際で悪、あがき、をっ！」

腹部から大量の出血をし、吐血もしている、誰が見ても満身創痍の状態。そんな身体でもう一度肩の発射口を開き、ハドロン砲をゼ口距離から浴びせる。

既に半壊しているジークフリートには一撃目、ショットバスター以上に効力があり、今度は今まで以上に規模の大きい爆発を引き起こした。

数十メートル後方で追いかけていたなのは前方で起こった爆発を目の当たりにし、唇を噛み締めながら急行した。

「しいちゃーん！」

爆発が起こった辺りで地上へと降り、Ｃ・Ｃ・を探す。

すると大きな鉄屑の下敷きになっている緑の髪の少女を見つけたのだが、それを撤去している蒼い短髪の人物も同時に視界に捉えていた。

身体つきからして性別は女性でありなのはもよく知る人物だった。彼女は大丈夫ですか！？　すぐ助けますから！　とおそらくは意識の無いＣ・Ｃ・に声を掛けていた。

「スバルっ！」

「っ！？　なのはさんっ！」

なのはが声を掛けると、彼女は驚いたように振り返った。蒼い短髪に鉢巻き、なのはのものによく似たバリアジャケット。そして右手には黒いナックルを装備し、ローラーブレードを履いている。

彼女はかつてのなのはの教え子——スバル・ナカジマだった。

しかし再会を喜んでいる暇などなく、今はＣ・Ｃ・を助ける事を優先しなければならない。

手伝ってください、とスバル。２人でやれば元ジークフリートだった鉄屑の撤去は速く、すぐに助け出す事が出来た。

しかし——。

「そん、な……くっ！」

２人がしゃがみ込んでＣ・Ｃ・の容体を確認する。腹部に刺さった緑色の円錐状のパーツ。おびただしい量の出血。破損してボロボ

口になっている黒い鎧——ガウエイン。そして、なのはの予想通り彼女に意識は無かった。

どう考えても生きている状態とは思えない。つまり、それらは彼女が既に死亡している事を理解させるには十分な素材だった。

スバルは助けられなかった事を悔み、地面を殴り付ける。なのはも辛そうな、悲しそうな表情を浮かべてはいる。

しかし感傷に浸る暇も無く、なのははバリアジャケットが血で汚れることも厭わずにＣ・Ｃ・をお姫様抱っこの要領で持ち上げる。

「なのは、さん？」

「大丈夫だから」

「え、でも——」

その人はもう——。スバルはそう続けようとしたが、出来なかった。スバルの言葉を聞かずになのははＣ・Ｃ・を抱えて空へと上がっていつてしまったのだ。

その後ろ姿をスバルは茫然と見つめていた。

なのはがそこを離れたのには理由がある。Ｃ・Ｃ・が不老不死であることを知られないようにするため。もしあんな状態から意識を取り戻して起きるようなことがあれば、誰だって不審に思わざるを得ない。

「ごめんね、しいちゃん……」

治療をして少しでも早く治してあげたかったが、やはり先と同じ理由からそれは出来ない。今のなのはに出来る事は、一目の付かない場所にＣ・Ｃ・を連れていくことだけだった。

なのはは彼女に対してあまりにも無力な自分に苛立ちを募らせていた。

STAGE 07 血染めの魔女（後書き）

あのですね、ホントは今回で陳述会編（なのは&C・C・サイドとフェイト&カレンサイドを両方書くつもりでした）が終わるはずだったんですが、予想外に伸びて行きました。

で、結果として次回、また陳述会でフェイト&カレン編になります。それにしても、不老不死だからってC・C・が負傷してばっかだw彼女はDSだというのに、これではDMになってしまいそうだ……

次回、STAGE 08

「ブリタニアの白き死神」

STAGE 08 プリタニアの白き死神

——7月15日 中央管理局 地上本部 AM03:07

午前3時を回っている深夜、夏故に湿度は高く、沢山の外灯が付いているせいか蒸し暑い。こんな深夜に外灯が点いているというのも、公開意見陳述会が行われるにあたって、夜通し会場の警備が行われているからである。

そんな中、緊張感の欠片も無く『暑っっ』と頂垂れている、紅い髪の少女——カレン・シュタットフェルトが居た。

「ホントに暑いわ」

「仕方ないよ。これだけ外灯が点いてたら、ね」

「付け過ぎよ」

こんなに要らないでしょ。カレンは言う。本当に嫌そうにしている彼女の隣では、金髪の女性——フェイト・T・ハラウンがただ苦笑いを浮かべている。しかし、かく言う彼女も暑いのは同じで、額は僅かに汗ばんでいた。

会場の中の警備だったら、こんなに暑く無かったかもしれない。もしかしたら、空調を効かせてくれているかもしれない。外の警備に当てられた事を——いや、宛ててきた人物をちよつと恨んだ。

彼女達を外の警備に当てた原因は、元六課の隊舎ですやすやと快適な眠りにについている。言うまでも無く、八神はやてである。しかも彼女は、夜が明けて陳述会が始まれば、確実に空調が効いたこの会場内に居られるのだ。これが終わったら、絶対何か奢らせてやると思わずにはいらなかった。

「そうそう、ちよつと聞きたいんだけど」

「ん、何？」

「この陳述会、だっけ……これって紅蓮みたいなアーマーデバイスってやつについて議論するのよね？」

「うん、そうだよ。まあ、名目上は議題になってるけど、もう通ってるみたいなものだし」

「だったらする意味ないじゃない」

カレンは、どうにも無駄な事が嫌いな性質たちのようで、心底面倒臭そうにしている。そんな彼女に、フェイトは世間体とか色々あるからね、と不機嫌な子供をなだめるように言う。カレンは特に態度を変えるでもなく、分かっているわよ、と返した。

「それで、アーマーデバイスっていうのはどんなやつなの？ やっぱリナイトメアなの？」

「ううん、違うよ。何種類か候補があっただけで、結局はジンクス？とブレイヴの2種類が生産される予定なんだ」

ジンクス？は言うまでも無く、2年前の事件でも使用されていたジンクス？の発展強化型のデバイスである。ただし、疑似太陽炉を搭載しないため、トランザムシステムは使用できない。

そして新規デバイスであるブレイヴは、2年前の事件に関わっていた人物、ミスターブシドーもといグラハム・エーカーが使用していた専用デバイス、マスラオと発展強化型のスサノオの流れを酌んだものだ。こちらジンクス？と同じく、疑似太陽炉は搭載していないため、トランザムシステムは使用できない。

2つのデバイスの説明を受け、ちよつとした疑問が浮かんだ。

「そのジンクスとブレイヴって、ナイトメアより強いのか？」

「え？ うーん、どうだろう……やっぱり扱う人によって変わってくると思うけど」

「そうじゃなくて、デバイスの性能だけ比べたらどうなの？」

「あ、それなら……ナイトメアの方が下、かな？」

「そう。まあそれなら大丈夫じゃない？ ラウンス機でも出てきたら別だけど」

「ラウンス機？」

カレンは言った後でしまった、と後悔した。余計なことを言ってしまった、と。如何にも知っている風に言っと、詳細の説明を求められるのは必至だろう。

そんなのは面倒だし、何より自分で自分の首を絞めるような事になるのは避けたかった。

フェイト達がどこまでラウンズの事を知っているかは分からないが、適当に誤魔化してしまおうと思った。

「えっと、ほら！ ラウンズって強いから、出てきたら厄介でしょ？」

「ああ、うん、そうだね。ビスマルクとか、ルキアーノとか、ホント……強かった」

「えっ！？」

また大きなリアクションをしてしまった。明らかに、彼らを知っていなければ出来ない反応だった。当然、フェイトはそれについてつつこんでくる。

だが、冷静に考えてみれば、どうということとはなかった。自分達の世界のことなのだ。知っていたところで何の不思議も無い。

「やっぱりカレンも知ってるんだ？」

「ま、まあね。ラウンズって言えば有名だし」

（でもまさか、ビスマルクやルキアーノまで来てるなんて……）

ここで、カレンの脳裏にとある映像が浮かんた。白い躯体で圧倒的な強さを持ち、他国からは白き死神と呼ばれた、ブリタニア軍最強の騎士の事が。

カレンがこの世界に来る前、つまり元居た世界での最後の記憶がその騎士との死闘だった。

お互いのナイトメアには武装も無く、エナジーも尽きかけていた空を手にするための翼も失い、残っているのは両機とも本体のみ。

近接戦闘にて戦うも、中々決められずにいた。だが、その時は来た。

紅蓮の両腕と高所から落下していくことを引き換えに、紅蓮の右腕は確かに白い躯体の胸部を貫いていた。

その後の記憶は、カレンには無い。だが、どう考えても白い機体を撃破した事は間違いない。何しろ爆発したところまでは記憶にあるのだから。

問題はここからだ。もし、フェイトが言うようにビスマルクやルキアーノがこの世界に来ていたとして、どちらもカレンの居た世界では戦死しているのだ。特にルキアーノなどは自身の手で倒した相手だ。

ということは、白い騎士がこの世界に来ていても何ら不思議はない。そして前に戦ったナイトメア集団は、そのすべてがブリタニア軍の機体だった。そのことから敵指揮官はブリタニアに関わっている人物である可能性が高く、その騎士もまたブリタニア軍所属だ。つまりは――。

（まさかアイツが？）

「カレン、どうしたの？ 何か考え事？」

「え？ ええ、まあ」

（まさかね。でも……）

黙り込んで険しい顔をしているカレンは何かを隠しているとは思えず、フェイトは多少の疑心が込められた瞳でじっと見つめていた。そんな彼女に全く気付かず、カレンが険しい表情を崩す事は無かった。

カレンの考えていた事は当たってはいなかった。だが、明後日の方向という訳でもなく、この数時間後、アレらと対峙することになる。だが、今はまだそんなことを知る由も無かった。

―― 7月15日 中央管理局 地上本部 PM00:15

時刻はすでに正午を回っており、おそらく大抵の人間は昼食を摂っている時間帯であろう。

警備に付いているカレン達にも立ったまま食べられる簡単な昼食

が配られており、現在昼食を摂っているところだった。

「建物の中の警備ならこんなに暑い思いしなくても済んだのに。はやての奴……」

「そう言わないで。中だとデバイスを持ち込めないし、もし何かあった時にすぐ対応出来ないから。そうになると、私達が召集された意味も無くなっちゃうし」

それはそうだけど。と、カレンはドリンクに口を付ける。この暑さで、カレンはまだアッシュフォード学園に通っていたころの事を思い出していた。

あの時はそう、学園祭が行われていた。カレンのクラスはお化け屋敷だったかで、彼女はお化け役を担当していたのだが、それはもうとにかく暑かった。

もう戻って来ないであろうあの日々に、懐かしさを噛み締める。

本当の自分で居た訳ではなかった。それでも、楽しい時間であった事は確かだった。

「カレン、どうしたの？」

「ん？ まあ色々向こうの世界の事思いだしてただけ」

「そっか。やっぱり早く帰りたいよね」

「……まあね。それにしてもフェイト、アンタって私に『どうしたの？』って聞いてばっかりね」

「そ、そうかな」

「そうよ」

何がおかしかったのか、カレンはクスクスと笑っている。それがフェイトの羞恥心を煽り、彼女の顔が赤くなる。そのことが余計にカレンを笑わせるのだった。

一頻り笑ったカレンが落ち着き、昼食も食べ終えたところで警備を再開する。

「そういえば、終了予定時刻って13時だっけ？」

「うん、そうだよ」

「だったらどうして昼食なんか出るんだろ？ 終わった後に各自で

摂ればいいのに」

「うーん……きつと、管理局側の配慮じゃないかな。マネキン准将
って部下の事とかしつかり考えてくれる人だから」

「ふうん、配慮ねえ……」

予算の無駄じゃない？ と、呆れた調子で返すカレンに、フェイトは苦笑いを浮かべていた。

「それはともかく、残り約40分、気を抜かずにしつかり警備しようね、カレン」

「はいはい、分かってますって。ハラOWN執務官さん」

「もう、ちゃんと聞いてよ」

フェイトはちよつと剥れている。どうにもフェイト・T・ハラOWNという女性は弄られやすい傾向にあるようだ。本人が弄られている事に気付いているかどうかは定かではない。が、先の様子を見る限りでは気付いてない可能性が高いかもしれない。

ほら、行くよ。と、フェイトが歩き出した時、突如として辺りにけたたましい警報が鳴り響いた。緊急事態が起きなければ警報が鳴ったりすることはない。つまりは、そういうことだった。

「来たの！？」

「そうみたいだね」

『こちらロングアーチ02、シャーリーです！』

元機動六課隊舎であり、現在はナイトオブブラウンス隊舎として使用されている場所から通信が入った。

ナイトオブブラウンスの招集に伴い、いくらかの局員はバックヤードスタッフとしてこの部隊の支援のために集められる。その中の一人が、元六課メンバーであるシャーリーである。普段は執務官であるフェイトの補佐官の、彼女に招集が来ることに疑問を抱く必要はないだろう。

シャーリーの通信に、2人はすぐに、うん、と返事を返す。

『かなりの数の機影を捕えました。四方から同時強襲です。西になのはさん、北にヴィータ副隊長、南にシグナム副隊長とアギト補佐

官が向かいます。フェイトさんとカレンのお二人は東の部隊を迎撃してください』

「了解」

通信で聞こえるシャーリーはヴィータやシグナムの事を副隊長と呼ぶ。六課の時の呼び方がそのまま定着してしまつたらしく、解散からもう2年経つというのに、未だに階級で呼んだりしなかった。それがなんだか懐かしくて、こんな時に不謹慎だとは思いつつも、フェイトはクスリと笑みを零していた。

『ただ、敵の中に2機だけ量産型とは違うタイプのナイトメアが確認できます。注意して下さい』

「分かった」

（違うタイプ……まさか？）

続くシャーリーからの報告に、カレンは顔をしかめる。嫌な予感が嫌なくらいにする。そしてこういう場合、嫌な予感というのは大抵の場合当たってしまう。

カレンがそんな事を感じているとはつゆ知らず、フェイトは一瞬の内にバリアジャケットでその身を包む。手には閃光の戦斧を携えて。

「カレン、早く！」

「え、ええ……」

（今は考えてても仕方ないか）

「紅蓮、セottoアップ！」

紅い光が一瞬の内にカレンの武装を作り出す。紅蓮に染まる重厚な金属の鎧。右腕は相変わらず長大で、彼女の身の丈ほどもあるうかと言うほどに長く、鉤爪は全てを斬り裂かんとばかりに鋭く尖っている。

「飛翔滑走翼、展開！」

カレンの背中にある、左右に伸びているパーツが上下に開き、その間から紅い色をした薄い菱形の様な板が数瞬出現したが、すぐに見えなくなった。

2人は飛翔し、会場の東側へと急行する。飛んでいると、先程の暑さがウソのように涼しい。空気を切り裂くのにも似た感覚は、爽快感を与える。だがそれにばかり浸っている場合では無く、すぐに敵の部隊が視界に映り込む。

やはりというか、主に部隊を構成してるのはサザーランドとグロースターだった。その中に、少数ではあるがカレンが知り、フェイトが知らないナイトメアが混じっている。

「新型が混じってる」

「あれは……ヴィンセント？」

少数混じっていたのは、ブリタニアが『とあるナイトメア』を元にして量産機化した機体、ヴィンセントだった。この機体、フルスペックでの量産はコストの面が厳しく、実際には一部の武装などオミットし、ヴィンセント・ウォードとして生産されていた。ただ、ヴィンセントが生産されなくなった訳では無く、指揮官などの高官クラスのみ、通常のヴィンセントが支給されていた。

そして今、2人の前にいるヴィンセントは、そのどれもがウォードでは無かった。つまりフルスペックという訳であり、機体性能のみを見れば、元となった『とあるナイトメア』にも匹敵する性能を保有している。

無論、フェイトがそのことを知るはずはない。だがそれでも、初めて見るため新型だという認識を持っており、サザーランドやグロースターに比べて警戒心を強めているのも事実だった。

「カレン、数が多いけど、いける？」

「もちろん。それより、ちょっと下がってて」

「え？」

数を減らすわ。と、言うが早いか、カレンはスピードを上げ、フェイトを置き去りにして単独先行する。後ろの方で、先行しすぎだよ！ という声が聞こえるが、いちいち気に留めてはいられなかった。

「あんたら、ちょっと数多すぎだよ」

鬱陶しそうに右手を突き出すと、シグナムとの血戦——もとい、模擬戦の時の様に、右手首辺りのパーツが展開して、細い円柱状のものが伸び、右手を囲う。

「弾けるっ！」

紅蓮の光が前方の広範囲へと、波紋の様に広がる。ごく僅かな時間の照射だった。それでも、たったそれだけでも、威力は絶大だった。

カレンが接近し、敵部隊が戦闘体勢に入っただけの所へ、いきなりの広範囲攻撃。彼らには避ける暇すら無く、何かをすることも無く、爆散していった。

「ワ、ワイドレンジ……」

シグナムとの模擬戦で見たゼロレンジ、ロングレンジに続き、ワイドレンジを目の当たりにしたフェイトはほんの数瞬、今は考えるべきでない事を考えていた。

カレンの輻射波動は誰がどう見ても強力だ。集束させて放つ零距离や遠距離は、間違いなく一撃必殺の威力を持っている。その上、いくらか威力は落ちるであろうが、広範囲にまで照射出来るとなれば、彼女を敵に回した場合、近付く事すら難しいのではないかと思えたのだ。

もし戦う事になったら勝てるのか、と考えてしまう。しかも、あれでフルドライブは使用していない。現在、修復できないため使用不可能だが、もし使えたとしたら——。結果、何だか恐ろしい事になりそうで、途中で考えるのを止めるのだった。

そんなことないよ！ と、思考を切り替え、既に先の一撃で半数近くを失った敵部隊に向かって行く。

「プラズマランサー！」

<Fire.>

6発の円錐にも似た金色の魔力弾を作り出し、ナイトメア達に向けて発射する。誘導性能は皆無で、真っ直ぐ向かって行くしかない攻撃だが、その分威力や到達速度は高い。

ターゲットになっているナイトメアはそれを撃ち落とそうとしているのか、アサルトライフルを連射している。だが、プラズマランサーの弾速は速く、掠りすらない。

金色の閃光が6機のナイトメアに触れた瞬間、炸裂し、まるで小さなゴミでもぶちまけたかのようにそれらを金属片へと変貌させた。カレンだけでなく、フェイトにもナイトメアは押し寄せる。3機のサザーランドが対ナイトメア戦闘用大型ランスを、2機のグロースターがメーザーバイブレーション^sソードを装備して突撃して来る。
<H a k e n F o r m . >

3方向から同時にランスによる突きが繰り出される。それらが到達する寸前、フェイトは軽く飛び上がる様にして避ける。直後、バルディッシュは死神の得物を思わせるハーケンフォームへと変わり、三日月状をした金色の刃が形成された。

「はあっ！」

まるで自らの手足であるかのように、華麗にバルディッシュを振るい、各機に一閃ずつ叩き込む。斬り裂く事に特化しているそれは、量産型のナイトメアの装甲で耐える事など到底出来る筈も無かった。決り取られたかの様な装甲。切断面は熱を持っているのか、オレンジ色に発光しているようだった。

攻撃を叩き込んだフェイトは即座に後退し、彼女が居なくなった空間で3機のサザーランドは爆散した。

撃墜したからと言って、気を緩めている暇は無い。尚も向かってきている、2機のグロースターがいる。

後退したところへ右からMVSで斬りかかって来る。さらに後退してそれを避けると、今度は左からもう1機が斬りかかる。

「そんなの当たらない！」

さらにそのまま後退して避ける。

<S o n i c M o v e . >

フェイトと距離ができ、彼女の方を向く時に出来る僅かな隙を突いてソニックムーブを発動する。2機の間に出て来た直線の道を、フ

エイトは音速で駆け抜ける。もはや、フェイトというよりは、まさに金色の閃光だった。

両機とも、上半身と下半身を真つ二つに切断されており、もう結果は言うまでも無い。

音速の世界から抜け出たフェイトに、正面から来た1機のナイトメアが双刃の剣というより、槍を思わせる武器を振り下ろす。それを受け止めたバルディッシュの柄が火花を散らしている。

「新型か……これもMVS?」

当然、そのナイトメア——ヴィンセントが答える筈も無い。新型であるせいか、パワーはグロースターなどに比べ、やはり高く感じる。しかし、所詮は量産機だった。

「この程度で!」

フェイトがヴィンセントの両腕を弾き上げる。その時に左手がランスタイプのMVSを離れ、右手だけで保持している状態になっている事を、フェイトは見逃さない。

バルディッシュの鋭い一閃が、ヴィンセントの右肘から先端を挟り取る。これでヴィンセントの武装はスラッシュハーケンしか無くなったと思ったのだが、フェイトに向けて左肘を突き出す。

「っ!?!」

<Defenser.>

バルディッシュの自動詠唱で発生したディフェンサーにより、直接フェイトに届く事は無い。だが直後、肘の部分が青白く光ったかと思うと、衝撃がディフェンサーを砕く。その上で、真つ直ぐ駆け抜けるそれがフェイトの身体にも伝わり、吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ば中で、斧のアサルトフォームに戻したバルディッシュをヴィンセントに向ける。

<Plazma Lancer.>

バルディッシュの先端から金の槍が一つ、ヴィンセントに向けて放たれる。回避できないヴィンセントに直撃し、木端微塵に破壊した。

一方でカレンは、敵が散開しているためにワイドレンジでの輻射波動を撃てずにいた——かと思いきや、構わずに撃っていた。

そのおかげで、敵部隊はあっという間に数を減らして行く。

「ふう……輻射波動は残り5発か。ま、これだけ減れば大丈夫か」
残存機を確認しているカレンだったが、自身に迫る赤黒い光を見つめる。回避する事はそう難しいことでは無かったが、その光はカレンにとって、とても見覚えのあるものだった。

「これは……ハドロン砲!? ガレス? ううん、違う。この大きさは……」

自分の横を駆け抜けていくその光。一人を軽く呑み込んでしまふ程の大きさがあった。これほどのハドロン砲を撃てる機体はそうそういない。そして、カレンの記憶の中ではたったの1機しか該当するものがなかった。

飛来した方向に目を向けると、予想通り、それが居た。いや、予想外に、もう1機もいた。

常人の2倍はあろうかという、ワインレッドの巨大な躯体。その前にあった砲門のようなものは方に両肩スライドして盾のようになった。一目見て、明らかに火力重視の超重量級ナイトメアである事が分かる。

もう一方はトリコロールのナイトメア。真っ白な頭部の両側にある、長い角の様なものが特徴か。あとは両腕に巨大な装甲があるといったところだろうか。

「モルドレッド……それに、トリスタン。ジノ? っと、ただの機戒なんだっけ」

決定的だった。その2機共が、ブリタニア軍所属のエース機だ。これでもう、後ろに隠れている存在を引きずり出さない訳にはいかなかった。

もともとブリタニアに好意など持っていないカレンである。例えここが自分の世界で無くとも、ブリタニアの横暴など許せるはずが無かったのだ。

「最終的には一応仲間として戦ったけど、アンタらはジノやアーニヤじゃない。本気で行くよ」

呂号乙型特斬刀を抜き放ち、自身がトリスタンと呼んだトリコロルのナイトメアに向かって飛翔する。カレンを迎撃するトリスタンは姿を変える。それは何も異質な物に変わったわけではない。各部のパーツがスライドするように稼働し、戦闘機に酷似したそれ――フォートレスモードへと変わったのだ。

より一層速度を上げ、カレンへと向かうトリスタンは他のナイトメアと同様に、蒼色をした銃弾タイプのエネルギー弾を連射して来る。

「そんなのっ！」

カレンは軌道を右へとずらすことでそれを避ける。が、その先に青色の物体がブースターを吹いて迫る。それは、トリスタンの腕に装備されていた、巨大な装甲だった。

これはただの装甲では無く、スラッシュハーケンだ。だが、トリスタンのそれは通常のものとは大きく異なり、かなり巨大に造られており、名称も異なっていてメギドハーケンという。

ともかくそれがカレンに向かってくるのだが、呂号乙型特斬刀を叩き付けるように振りまわして弾き返す。

フォートレスモードのトリスタンは直線的なスピードに優れている。メギドハーケンを回収しつつも、あっという間にカレンとの距離を潰した。それどころかあまりの速度故に彼女を通り過ぎてしまった。

だが、それこそがトリスタンの狙いだった。通り過ぎた直後、各部のブースターを逆噴射してスピードを殺し、バックするようにしてカレンへと向かう。その途中、KM Fモードへと再び姿を変え、2基のハーケンタイプのMVSを取り出した。それらを連結させて双刃の剣にし、カレン目掛けて振り下ろす。

しかし、カレンには通じなかった。彼女は、トリスタンの事をよく知っているのだ。その程度、予測の範疇だった。

振り下ろされたMVSを伸ばした右手で掴み取る。

「残念だったわね」

パンツ、パンツ、という破裂音と共に、右の掌から紅蓮の光が発生する。掴まれているMVSはブクブクと泡立つように膨らんでいく。それが反対側へと伝わっていくが、それよりも早くトリスタンは連結部をパージし、もう片方のMVSを破壊するには至らなかった。

MVSの片方を破壊されたトリスタンは怯んだのか、後方へと上昇しながら一気に距離を取る。直後、カレンは背後から迫る圧力に気付いた。つい先程と同様に、大きな赤黒い光——ハドロン砲が轟音と共に迫ってくる。

だがこのハドロン砲、やはりサイズが尋常ではない。C・Cもハドロン砲を使用するが、彼女のものとは比べる事自体間違っていると思うほどのものだ。

ではどうして違うのか。C・Cが両肩にあるハドロン砲をそれぞれで放っているのに対し、モルドレッドは両肩の装甲を連結させ、内側にある4基のハドロン砲を一斉発射しているからなのである。
シユタルク故に4連ハドロン砲と呼ばれているのである。

「紅蓮を舐めるなあ！」

しかしカレンはそれも知っている。重火力型故に、大火力攻撃の際には足を止めなければならぬことも。

シユタルクハドロン砲を飛び越えるようにしてかわすと、そのまま真っ直ぐにモルドレッドへと突っ込み、スライディングをするかの様にその頭部へと蹴りを打ち込む。だがやはり超重量級といったところか。それくらいの威力では多少バランスを崩す程度で、ほとんどダメージにもならない。

モルドレッドは体勢を立て直すと同時に、全身の装甲がスライドし、現れたいくつもの小さな穴からは赤黒い光が放出され、後退するカレンを追尾する。

「通用しないよ！」

ワイドレンジの輻射波動を放ち、一瞬にして自身に向かうそれらを排除してしまう。さらに、立て続けに輻射波動を放つ。今度はロングレンジで、モルドレッドを直接狙う。

「くっ、ブレイズルミナスか……でもね！」

輻射波動が届いたかどうかという瞬間に、モルドレッドの周囲には淡い緑色の面——ブレイズルミナスが幾つも現れ、それを覆ってしまう。輻射波動はブレイズルミナスを突破できず、弾かれてしまうのだった。

だがその時、ブレイズルミナス内部で小規模な爆発が引き起こる。輻射波動は防がれたはずだったのだが——。

「輻射波動の方が、ちょっとだけ早かったみたいね」

そう、確かに輻射波動はそのほとんどが防がれていた。だが、ブレイズルミナスの展開前に、ほんの少しだけであつたが、届いていたのだ。

それが肩の装甲の片方にダメージを与え、破壊したのである。爆煙から後退して出てきたモルドレッドには、左肩の装甲が存在していなかった。

「これでもう4連ハドラ砲は撃てないわね」

ここで、モルドレッドに代わってトリスタンが攻撃に入った。背後から接近するそれがMVSを横薙ぎに振るう。

「しつこいよ！」

カレンはその場から右へと飛び退き、容易く回避して見せた。トリスタンは両腕をカレンに向けて構えると、そこにあるメギドハーケンを2基とも撃ち出す。そのまま両腕を交差させたかと思うと、大の字に開き直す。

するとどうだろう。メギドハーケン同士が連結し、一つの塊へと変わる。直後、ハーケンの間から吹き出るようにして青い光がカレンへと放出される。

「それくらい！」

青い光に向かって、カレンもまたロングレンジでの輻射波動を放

つ。2人の中間地点で激突し、より一層明るい光が辺りを照らす。数秒間に渡ってぶつかりあっていた2つの光は、臨界点を迎え、激突しているポイントを中心にして爆発が起きた。

輻射波動砲弾と同等の威力を見せた蒼い光はハドロンスピアという。メギドハーケンを連結させなければ使用できないという欠点は存在するが、これが主力武器では無いトリスタンにとっては大した問題ではないだろう。

トリスタンはメギドハーケンを回収すると、すぐに次の攻撃に移ろうと前進する。だが次の瞬間にはその場から飛び退くようにして左へと飛んだ。ほぼ同時に、後ろから来た金色の閃光が、今の今までトリスタンが居た場所を通過した。

それはカレンのすぐ傍で急停止したのだった。

「カレン！ 遅くなってごめん、大丈夫？」

それは、量産機の粗方を撃墜し終わったフェイトだった。心配そうな顔を向けて来るフェイトに、カレンは軽く返す。

「当たり前でしょ」

「あの2機を落とせば……」

後は雑魚ばかりよ。カレンがそう続けようとした瞬間、彼女達の前方で2人の様子を伺うようにしている2機の間から、ブレイズルミナスの色に似た、淡い緑色の球体が飛んで来る。それは掌に簡単に収まってしまふほど小さなものであったが、かなりの速度で飛来する。

カレンとフェイトはお互いの間に空間を作る様に、それぞれが左右へと飛び退き、その空いた空間をそれは通過していった。

2人は接近してくる機影を、確実に捉えていた。白と金を基調とし、背中には赤いユニットを装備し、さらにその上にも群青のユニットが取り付けられている機体だ。

当然、カレンはその機体に見覚えがあった。幾度となく戦い、最早宿命の様な関係になっていた、日本人ながらブリタニア軍に所属していたパイロットが駆る機体。

フェイトには、トリスタンもモルドレッドも見覚えがあるはずもなく、全く知らない機体だった。だが、その機体にはだけは見覚えがあった。それを、完全なナイトメアの状態で見た事は無い。だが、フェイトが知っているデバイスと、あまりにも酷似していたのだ。同一のものではないと考える方が不自然だった。

カレンが『あれは……』と、反射的にその機体の名を口にしようとした時、フェイトの言葉によって遮られてしまった。

「ランス…… ロット…… ス、スザク！ スザクなの！？」

（えっ！？ フェイト、スザクを知ってる？ この感じ、まさか？）
「ねえっ！」

フェイトの口から予想もしていなかった名前が出てきた事によって、カレンは驚きの表情で彼女を見る。

スザク、といえば、カレンの記憶にはたった一人しか該当者が居ない。しかもランスロットを見てその名を発したという事は、枢木スザクだと断定して間違いないだろう。

しかし、やはり信じられないというのがカレンの気持だった。ダモクレスでの決戦において、紅蓮聖天八極式の大破と引き換えに、ランスロット・アルビオンを破壊したのだ。どう考えても、スザクがああ状況で生きていたとは考えにくかった。

いや、それ以前に、カレンがこの世界に来たのはその直後なのだ。今のフェイトの反応からすると、スザクとは親しい間柄である事は容易に想像がついた。

かといって、ブラックリベリオン敗北後の約1年間、ブリタニアから逃げ回っていたとはいえ、その間にもスザクが世界各地で戦っていたという情報は入って来ている。

つまり、どう考えてもスザクがこの世界に来ている時間など無いのである。

ゴチャゴチャ考えていても、全く答えは浮かんで来ない。だからカレンは考えるのは後回しにした。この戦闘が終わってからフェイトに聞けば済むことだ、と思考を切り替えて、今は戦う事に集中し

ようと意識を現実に取り戻す。

幸か不幸か、それはギリギリのタイミングだった。ランスロットが背部にあるコンクエスターユニットをヴァリスに連結させていたのだ。既に照準は合わせ終わっていた様で、すぐにハドロンプラスターが放たれた。

どうやら狙いはフェイトのようだった。だが彼女はランスロットの参戦で動揺でもしていたのか、反応が遅れていた。

「くっ、バカッ！」

カレンはブースターを吹かせ、ハドロンプラスターが届くギリギリのタイミングで間に割って入り、右腕を突き出す。輻射波動で受け止めるも威力は向こうの方が高く、目に見えて手甲砲撃右腕部にダメージが蓄積していく。

「っ！？ カレン！」

右腕の状態に気付いたフェイトがカレンの腹部に左腕を回し、ソニックムーブでその場から離脱する。

「ゴ、ゴメン、カレン……無理させちゃって」

「馬鹿じゃないの！？ 戦場で気を抜くなんて」

「う、うん……」

フェイトが申し訳なさそうにしていると、カレンが怒鳴り散らす。フェイトも事の重大さは理解していて、返す言葉が無かった。

「今はとにかく、あいつらを倒さないで」

カレンは不機嫌そうにランスロットを始め、向かってくる3機のナイトメアを捕捉する。そのまま、フェイトの顔を見ずに続ける。

「はつきり言って、私はランスロットだけで手一杯かもしれない。

だから、悪いけどトリスタンとモルドレッドはお願い。アンタのスปีドなら、モルドレッドの攻撃は問題ないだろうし、トリスタンにも後れは取らないだろうから」

「分かった」

「ねえ、フェイト？」

何？ と、カレンの問いかけに、フェイトは彼女の横顔を見つめ

ながら返した。

「後で色々聞きたい事出来たから」

「うん、分かった。でも、私もカレンに聞きたい事あるんだけど？」

「……分かったわよ」

それだけ返すと、2人は同時に飛翔した。カレンはランスロットに、フェイトはトリスタンに。

カレンを迎え撃つランスロットはヴァリスを構え、小さな淡い緑の球体を連射する。カレンは直線的な軌道をあまり変えず、身体をドリルの様に横へ回転させながらかわして接近していく。

「はあああああつ！」

至近距離まで接近したカレンは飛びあがる様にしてランスロットの上を取り、特斬刀を振り下ろした。逆手に持つているため、そうすると刃が突き刺すようにしてランスロットへと向かう。

ランスロットが左腕を盾の代わりにする様に構えるとブレイズルミナスが発生し、特斬刀の攻撃を阻む。その状態から尚もヴァリスを向け、放つ。

カレンはランスロットの隣に降り立つように避けると、特斬刀を右薙ぎに振るった。ランスロットは既に左手に抜いてあったMVSで斬り降ろし、刃同士がぶつかり合い、激しく火花を散らす。ランスロットはヴァリスの銃口をしつこいまでにカレンに向ける。

引き金が引かれると淡い緑のエネルギー弾が弾き出される。ほとんど零距离からと言っても過言ではない距離であったが、カレンは驚異的な反射を見せる。ヴァリスが向けられ、引き金を引く寸前に上体を深く沈みこませて回避したのだ。

上体を沈みこませるのと僅かにタイミングをずらし、特斬刀を振り切る。その威力はランスロットの腕ごとMVSを弾いた。間髪入れずに上体を起こしながら特斬刀を切り返す。刃がヴァリスの銃身に突き刺さり、その時点で既に使い物にならなくなったのが分かる。「もらった！」

カレンが右腕を伸ばすと、紅蓮の大きな右手が遂に弾かれていた

ランスロットの左腕を掴み取った。

「喰らいなあっ！」

直後に凄まじい勢いで紅蓮の光が生まれる。だがそれも、ほんの一瞬でしか無かった。

「そなたっ!？」

カレンの表情が、驚きと切羽詰まった色が混じったものになる。輻射波動を発動させた直後だった。ランスロットの左腕をボコボコと、泡立てるようにして破壊するはずだった紅蓮の右腕が崩壊したのだ。弾けるようにして細かな部品が飛び散り、そのうちのいくつかは紅蓮色の鎧を掠め、いくつかはカレンの顔に掠り傷を作った。手甲砲撃右腕部に包まれていたはずの右手が露出しており、赤い液体が伝っている。

傷による痛みよりも、驚きと後悔の気持ちが強く、痛みは少しも感じなかった。ハドロンプラスターを受け止めたことによるダメージの蓄積があったことは分かっていた。だが、それでもカレンは紅蓮を信じ、一撃ならもってくれうだろうと判断した。

しかし結果はカレンの信じたものとは真逆となってしまった。

「くっ!？」

紅蓮最大の武器を失った今、ランスロットが攻撃を仕掛けて来ない理由はない。その場で一回転して勢いを付け、右足にシールドを展開してブレイズキックを繰り出す。咄嗟に左腕を盾にすると、特斬刀にキックがぶつかり、一旦は止まる。しかし、ランスロットが軌道を強引に下へと修正すると足は滑る様に軌道を変え、カレンの左腕を捉えた。

「うああっ!？」

腕が吹き飛ぶような感覚に襲われ、たまらず叫び声を上げてしまう。バランスを崩し、どうしようもなくなっているカレンの胸の装甲にヴァリスの銃口があてがわれた。

「しまっ——」

ランスロットが引き金を引くとほぼ同時に、カレンの胸で爆発が

引き起こった。それによって吹き飛ばされ、ただ地上へと落ちていくカレン。瞼は力なく閉じられており、意識は無いのだろう。

ランスロットはまだ攻撃を止めるつもりはないのか、左手に持っていたMVSを収納するとそのままカレンに向けて突き出し、スラッシュハーケンを射出した。ブースターを吹かせて速度を上げて迫るそれを、今のカレンには避ける事など出来ない。

スラッシュハーケンは飛翔滑走翼に喰い込んだ。すると突然、ランスロットはハーケンを巻き戻し始めた。ランスロットのハーケンは、量産機とは比べられないほどの出力を持っている。カレン1人を持ちあげる事など容易かった。

ランスロットの元までハーケンと共に巻き上げられたカレンは、その左腕で抱えられるのだった。

トリスタン、モルドレッドと戦闘を行っているフェイトは、中々に苦戦を強いられていた。モルドレッドはシュタルクハドロンこそ撃つてこないが、全身から放たれる大量のエネルギー弾が厄介だった。雨の如く降り注ぐそれを掻い潜り、接近しようとしてもトリスタンのMVSやメギドハーケンによる攻撃で、モルドレッドには近づけない。

かといってトリスタンに攻撃しようとすれば相手は離れていくし、モルドレッドからの攻撃が邪魔をする。敵ながらしっかりと連携が取れていると、感心せざるを得なかった。

「って、感心してる場合じゃない。……真・ソニック、使うしかないかな？」

真・ソニックフォームを使えば、この2機に勝てる確率は上がるだろう。しかし、仮にこの2機を倒してもランスロットがいる。スザクが使っていた時の事を知っているだけに、ソニックで大量に魔力を消費した後でランスロットとともに戦える自身は、正直なところあまりなかった。

どうするべきか悩んでいたところへ、一際大きな爆発音が聞こえてきた。反射的にそちらに意識が持って行かれる。その先でフェイトの視界に映ったのは、胸部の鎧を砕け散らせながら落ちていくカレンだった。

「カレンッ！」

思わず叫んでいた。すぐさまソニックムーブで助けに行こうとした。しかしフェイトの視界に、横から鎌の様な物が割り込んでくる。それはトリスタンのMVSだった。

急ブレーキを掛け、アサルトフォームのバルディッシュで防ぎ、ダメージは無い。

「邪魔をするな！」

MVSを弾き、トリスタンには目もくれずにカレンの元へ向かうとするが、行かせないとばかりに赤黒い光の雨が降り注ぐ。

<H a k e n F o r m .>

「ハーケンセイバーー！」

バルディッシュから発生した金色の鎌を投げ飛ばし、ブーメランのように飛んでいくそれがモルドレッドが放った大量のエネルギー弾を切り裂き、爆破させていく。

これで行ける。そう思ったフェイトに、トリスタンが再びMVSで攻撃を仕掛けてくる。どうあってもカレンの元には行かせないらしい。

そうしている間にも、カレンを抱えたランスロットは戦線離脱していく。

「カレンッ！ お前達、邪魔をするなっ！」

<S o n i c M o v e .>

迫るトリスタンにソニックムーブを使用し、それ以上の速度で接近する。擦れ違いざまに再び発生させた魔力刃を思いきり叩き付ける。狙いは特に定めていなかった。とにかくどこかに命中させてダメージを与えたかったのだ。

結果として、フロートの左翼を切り裂いた。フロートにダメージ

を与えられたのは幸いだった。それでもう、フェイトの速度にはついてはこれない。

残るはモルドレッド。フェイトからすれば、動きはお世辞にも速いとはいえない。だがあの火力と防御力は厄介極まりなかった。

「ザンバーッ！」

バルディッシュを大剣であるザンバーフォームへと変形させ、モルドレッドへ迫る。

「はあっ！」

ブレイズルミナスの上からお構いなしに叩き付けるが、やはり強固な防御を誇っており、ザンバーフォームの攻撃力でもビクともしない。

「くっ、どうすれば……っ!？」

ザンバーとブレイズルミナスが火花を散らしているこの時、背後からの気配に気付く。攻撃は止めず、顔だけで振り返る。メギドハーケンが連結してるのが見えた。瞬間、フェイトは閃いた。

メギドハーケンからハドロンスピアが放たれる。フェイトのすぐ前にはモルドレッドが居るというのに、お構いなさだ。別に仲間を破壊しても構わないようなプログラミングをされているのか、モルドレッドのブレイズルミナスならば耐えられるとして撃つたのか。それは分からないが、フェイトには好都合だった。ハドロンスピアが届く直前、左側へとサツと華麗にかわす。するとやはり、彼女の想像通りにそれはモルドレッドのブレイズルミナスが受け止めた。

「はあああああああっ！」

チャンスとばかりに、フェイトはザンバーの魔力刃をハドロンスピアの流れに乗せ、ブレイズルミナスに向けて思いきり左薙ぎに叩き込んだ。

ハドロンスピアとザンバーの威力が合わさり、ブレイズルミナスには亀裂が生じていく。

「あああああああああああああああっ！」

フェイトはこれ以上なくらいに叫び声をあげ、バルディッシュの柄が折れてしまうのではないかと言うくらい力を込める。ザンバールの刀身が徐々にブレイズルミナスに喰い込んでいく。

次の瞬間、ブレイズルミナスがガラスの様に砕け散った。振り切られたザンバーがモルドレッドの装甲の前側に傷跡を残し、ハドロンスピアーが爆発を引き起こす。

「これでっ！」

地面を蹴るかのように飛びあがったフェイトがトドメとばかりに急降下の勢いを乗せた重い一撃を叩き込む。それは、あっさりとモルドレッドを斬り裂いた。

しかしそれには目もくれず、ランスロットが去った方へ行こうと
うするフェイト。だが、自然とその足は止まった。どれだけ目を凝
らしてみても、視界にランスロットとカレンが映ることは無かった。
「そんな……カレン……」

俯き加減でその場に留まっているフェイトに、スピードが格段に落ちたトリスタンが背後からメギドハーケンを撃ち込んだ。

それでもフェイトは振り向く素振りすら見せない。代わりに周囲に8つの魔力弾——プラズマランサーが形成される。大砲が放たれたときの様な音と共に一斉に放たれる。

2基のメギドハーケンの軌道上には2つのプラズマランサーが、2つのプラズマランサーの軌道上には2基のメギドハーケンがある。そうなればどういう結果かは考えるまでも無く、ぶつかり合うしかない。そうなるまで、そう時を要すことは無かった。プラズマランサーがメギドハーケンを弾き飛ばし、無重力であるかのように、そ

の場に漂う。

そして、まだ6発残っているプラズマランサーは一直線に空を駆け、トリスタンへと飛んでいく。

避ける手段を持たないトリスタンの胴体部分に6発全てが突き刺さった。着弾と同時に炸裂し、装甲を抉り取る様に吹き飛ばすと同時に電撃が駆け廻り、全身の回路を焼いていく。

行動不能となったトリスタンは地上へと落ちていく。だが、落ちた衝撃でバラバラになるよりも早く、ダメージによる誘爆によって空中で爆散し、文字通り木端微塵になるのだった。

いまだランスロットが去った方角から視線を外さないフェイトは固い握り拳を作り、睨みつけるように虚空を見つめるのだった。

STAGE 08 プリタニアの白き死神（後書き）

どうも、お待たせしました。

ていうかね、うん……この本文、1万7千文字弱くらい（空白、改行など合わせず、文字だけで）なんです。こまめに保存してたんですよ。

で、1万5千文字くらいで保存して、次に6千位で保存したんですよ。

そうしたら……え？570文字……は？なにそれ？おいしいの？
いいえ、おいしくありません。ふざけんな！ブツ。すぞ！

消えたのは本当ですが、別にそんな事は思いませんでした。まあ、イラッときたのは本当ですが。

前にもこんなことがあったので、保存前にはコピーしてメモ帳に張り付けてたんですね、これが。

なので消えずに済みました。でも、ホント腹立つな……

次回 STAGE 09 ゼロ

所属不明の、ナイトメアの大部隊による陳述会場襲撃から数時間が経過していた。もう既に陽も傾き、あたりは夕闇に包み込まれている。

襲撃による被害自体は軽微なもので、戦闘が行われた周辺の建物がいくらかと、交戦した魔導師の幾人かが負傷した程度であった。この程度の被害で済んだのは奇跡でも何でもない。リミッターのかかっていないエース級魔導師達の活躍があった故の結果である。

そんな彼女達が司令部として使用している旧機動六課隊舎には、見慣れぬ訪問者があった。その訪問者は武装隊の制服で身を包み、サイドアップにしたオレンジの髪の女性を背負っている少女。大きな特徴は長い緑色の髪。

少女はお世辞にも愛想が良いとはいえない無愛想な顔でやって来るなり、「医務室はどこだ？」とぶつきらばうに問いかけていた。彼女に最初に対応したのがフェイトの補佐官である、シャーリーだった。

しかし見慣れぬ人物故に、どう対応したものかと考えていたのだが、よく見れば少女が背負っている女性は、シャーリーが良く知る人物——高町なのであった。

少女に背負われているのはは酷く衰弱しているようで、ぐったりしていて意識があるのかも分からなかった。のんびり考えているわけにもいかず、直ぐに医務室へと誘導を行った。

そして今、なのははシャルルによって検査が行われており、シャーリーは少女に事情を伺っているところだった。シャルルが検査を始める前に、少女が「検査などしても意味は無いがな」といっている。

たことが気がかりだった。

「まずは……私はシャーリー。なのはさんを助けられてありがとうございます」

「礼を言われるようなことはしていない。……元を正せば私のせいでもあるからな」

「え？」

少女のボソツとした後半の呟きは、シャーリーには届かなかった。何を言ったのか少し気にはなったが、とにかくシャーリーは事情を聞きだすことにした。

「いくつか聞きたいんだけど、まずはなのはさんを発見した場所はどこか教えてくれる？」

「何度も説明するのは面倒だ。お前達が全員揃ったら話す」

「えっと、全員ってというのは？」

「全員と言ったら全員だ。ナイトオブブラウズだな」

シャーリーはイマイチ理解しかねていた。ナイトオブブラウズのメンバーは公表されているため、一般人が知っていても何ら不思議ではない。だが何故全員が揃う必要があるのだろうか。

今は話すつもりはないらしい少女であるが、シャーリーもこのまま「はい、そうですか」と引き下がるわけにはいかない。

「あのね、一応事情聴取だから話してくれないと——」

「しつこいのは嫌いだ」

「え、あの——」

「少し疲れた。揃うまで起こすなよ？」

「ちょ、ちよっと、あなた——」

シャーリーの言うことなどまるで聞く気が無い少女は、すぐに寝息を立てて寝入ってしまった。本当ならば起こすべきなのだが、何故か今は素直に聞いておくべきだと思えた。

その後、険しい表情のブラウズメンバーが戻ってくるまでの間、少女が起きる事は無かった。

緑の髪の子が旧機動六課を訪問するよりも前。もっと端的に言うのであれば、戦闘終了間際のことだった。

陳述会場の中にある大きなモニターには、黒い仮面を被り、黒いマントを羽織っている人物が居た。仮面を被っているために、それが誰なのか、男なのか女なのかさえ分からない。

そんな謎の人物を前に、会場内ではざわめきが起きている。しかし、

「私は……ゼロ」

仮面の人物の声が一言でそれを静めた。

この場にいる誰もがゼロという存在など、この時まで知っている者はいない。一旦は静まり返った会場内だったが、ざわめきが戻ってくる。

その中で一人だけゼロという存在を知っている、八神はやてだけはただ静かにモニターを見つめていた。

——これがゼロ……ホンマに魔神みたいやわ。なんて禍々しい

……

それがはやての素直な感想だった。スザク達の世界において、ゼロの正体はルルーシュ・ランペルージという少年。本当の名は、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。神聖ブリタニア帝国の皇位継承者の一人。

それはあくまでも、その世界のおいてのゼロの話であり、その世界外の人間が知っている筈が無い。知っているのはスザクと繋がりがあつた旧機動六課メンバーくらいのものだった。

「ミッドチルダ地上の管理局員諸君。気に入ってくれたかい？ ささやかながら、これは私からのプレゼントだ」

——だからこそ分かん。何でゼロが現れるんや？

ふと思いついたのが、「本当に正体がルルーシュだったら」というもの。スザクがこの世界から去って早2年。既にゼロレクイエム

が完遂していてもおかしくはない。だとすればルルーシュは死んでいるのであるが、何かが原因でこの世界に来ている可能性は否定できない——と考えたところで、それを否定した。

「世界を壊し、世界を創る、ブラックリベリオン。これはその余興とでも思ってくれたまえ」

——そんなことはまずありえへん。仮にルルーシュがこの世界に来てたとしても、世界のために命を捧げた彼が、こんなことする訳が無い。……いや、分らん。命を代償にしてまでやったからこそ、ここでもやろうとしてもおかしいことはあらへん。

結局のところ、ルルーシュの事は聞いた話でしか知らないやはてが、モニターに映るゼロが彼なのかそうでないのかを考えたところで、答えなど出る筈も無かった。

3

C・Cは疲れていた。まるでフルマラソンを走り終えた選手であるかのように。いや、彼女にはフルマラソンの経験などありはないから（生い立ちや性格からして、まずありえない）、あくまでその例えは彼女の想像の域でしかない。だがそんな例えをだしてしまいたくなるほど全身で疲労感を感じていた。

そして旧機動六課に高町なのはを運び入れた後、すぐに医務室のベッドで横になったのであった。

深い眠りに落ち、真つ暗闇の中にあつた意識が、突如浮上していくような感覚を感じた。例えるなら、エレベーターが下の階に下りて行く時に感じる、あの妙な浮遊感をもっと強くしたものだ。

それが強くなっていくにつれ、意識が揺さぶられている感覚に陥った。はつきり言つて、気持ち悪かった。

止める、治まれ。

そう念じたりしてみても一向に改善される気配は無い。いい加減我慢が出来なくなつたC・Cは

「一体何だ！」

怒りをぶつけるように叫んでいた。

「そ、そんなに怒らなくても……全員が揃ったら起こすように言ったのはあなたなんですよ？」

「ん？」

C・Cは自分の現状を理解するのに、少し時間を要した。ベッドで上半身を起こしている自分の周りには、数人の女性達が居た。茶色やら金色やらピンクやらオレンジやら。とにかく色々な髪の色があった。彼女達は揃いも揃って、少しばかり険しい表情を浮かべていた。

現状把握に努めていたC・Cが、だいたい理解したところで、タイミングを見計らったかのように、

「あ、あのお……」

シャーリーが恐る恐る話しかけてきた。

「ああ、話をするんだったな」

「シャーリーから何があったんかは聞かせてもろた。話せる事は、全部聞かせて欲しい」

「分かっている。なのはのこともあるし、お前達に頼らざるを得ない。だがその前に……カレンはどうした？ 姿が見えないが？」

「カ、カレンの事知ってるの？」

カレンの名前を出すと、金髪の女性——フェイトがいの一番に反応を見せた。だが、

「聞いているのは私だ」

C・Cはそちらからの質問は許さないとばかりの発言をした。仕方ないと思ったフェイトは、簡単に事の経緯を説明し、カレンがどうなったのかを伝えた。

「——そうか、分かった」

「ならそろそろ話してもらえるやろか？ ええつと……」

「C・C・だ」

「C・Cさんですか。私は——」

「八神はやてだろう？ お前達の事はなのはから聞いている。今更自己紹介は必要ない」

「分かった。でもまあ、その辺のことも含めて聞かせてもらおうで？」

C・Cは一度眼を閉じて

「ああ」

短く返答すると静かに口を開いた。

4

「う……ここ、は？」

薄暗く、淀んだ空気が溜まっていそうな場所にカレンはいた。意識を取り戻した彼女は、すぐに自分が居る場所が異常なものであることに気が付いた。前を見ても、左右を見ても、ちよつと強引に首を捻って後ろを見ても、そこにはただ壁だけがある。特に柄があるわけでもなく、装飾があるわけでもない、シンプルすぎる壁が。

他にある物と言えば自分が座っている——いや、座らされている椅子くらいなものか。正確には座らされているという表現でさえ適切ではないだろう。

今のカレンの四肢には、自由が無かった。要するに拘束されているのである。いくら薄暗くても手元くらいは見えるので、一体何が拘束しているのかを確かめてみた。

腕の自由を奪っているのは、椅子と一体になっている拘束具だった。そのことから、おそらくは足も同じような状態であることが伺えた。

「そつか。私はランスロットに……」

ここまでの経緯を思い出していたカレンだが、

「やあ、お目覚めかな？ 気分はどうだい？」

前の方から聞こえてくる聞き慣れない声に意識が集中する。

その声は普通ではなかった。明らかに自然に発せられるようなものではなく、人工的な加工が加えられており、二重三重に重なって

響くように聞こえてくる。

その人物はカレンに近付いてきているらしく、コツコツという足音が次第に大きくなってきている。

それに伴い、姿もゆっくりとだが闇の中から浮かび上がる様にして見えるようになっていく。ある程度視認できるようになったところで、カレンは驚きのあまり息を飲んだ。

「ウソ……ぜ、ロ……？」

「そう、私はゼロ」

「そんな……」

カレンの目の前までやって来た人物は、紛れもなくゼロだった。カレンの記憶に残っているゼロとは多少の差異があるものの、それはゼロとしか言いようのない人物だった。

「ルルーシュ、なの？」

「それを知ってどうする。それに一体どんな意味がある」

「それは……」

ゼロの正体はルルーシュなのか。それが気になって仕方の無かったカレンだったが、陳述会の事を思い出す。

「陳述会は！？ あれはどうなったの！」

「既に戦闘は終わっている。安心したまえ。死者は出ていない。今回は、ね」

「そう……」

安堵のため息を吐くカレンに、

「それにしても分からないな。どうして君は管理局に肩入れしているのか」

ゼロは本当に分からないといった口調で、まるで独り言のように呟いた。もちろん、カレンに耳にはしっかりと届いている。

「別に。私が元の世界に戻るために力を貸してくれるから、そのお返しみたいなものよ」

「そうか。そんな理由で君の正義は曲がってしまうのか」

カレンには心底呆れてしまった。そう言わんばかりの口調で話す

ゼロに、

「どういう意味よ。私の正義？　どこの誰かも知らないけど、アンタに私の何が分かるって言うのよ」

カレンは睨みつけるようにして返した。

「分かるさ。君はブリタニアという、力で他者を虐げる存在を嫌い、憎んでいる。そんな君がどうして管理局にいるのか、理解できないんだよ」

「そんなこと無いわよ。少なくとも、ブリタニアのように力の無い人達を喰い物にしたりはしない」

「君は何も知らないだけだ。時空管理局の裏側というものをね。」
S事件というのは知っているかな？

ゼロからの問いかけに、カレンは僅かに思考を巡らせると、フェイトがそんな事を言っていたのを思い出した。

「2年近く前にあった、大きな事件でしょ？　それが何か？」

「JS事件と言う通り、主犯はジェイル・スカリエッティ。己の欲望のためならば他人の命など何とも思わないし、平気で他人の身体を改造するようなマッドサイエンティストだ。彼をどう思う？」

「……最低ね。で、それがどう関係あるっていうの？」

「彼が、管理局と裏で繋がりを持っていたとしたら？」

「そ、そんなこと——」

「無いと言いたいかな？　だが事実、管理局は彼と繋がっていたんだよ。管理局とて、非人道的なことなどいくらでもしているのさ。ただ表沙汰になっていないだけだね」

「……」

ゼロの言う事が本当なのかどうかは分からない。しかし現段階でそれが嘘だと断定するには材料が不足しているのもまた、事実だった。

「黒の騎士団とは正義を行う組織。君はそこに属するエースだ。そんな君が管理局を認めるといふのかい？　カレン・シュタットフェルト——いや、紅月カレン」

「……」

カレンは何も言う事が出来ない。彼女の頭の中は様々な考えがごちゃ混ぜになり、それぞれが強く主張していた。

その中でも特に強く主張する思考が、もし管理局がゼロの言う通りの組織であれば、許せない。たとえ自分の世界の事でなかったとしても、弱者を虐げるような存在は許す事が出来ないのである。

「そうそう、言い忘れていたけれど、枢木スザクは管理局についていたよ」

「スザクがつ！？」

枢木スザク。忘れてくても忘れられない名前。日本の為と言いなからブリタニアにつき、幾度も戦った裏切りの騎士。

「ああ。どうやら彼の正義はあちら側だったようだね」

——スザクもこの世界に来ていた？　じゃあまさかフェイト達が言つてた協力者って……

「さて、君の正義はどうか？」

ゼロがカレンのすぐ隣まで歩み寄ると、床の一部が円形に生える様に伸び、台の様になった。高さはゼロの腰の辺りまでである。

ゼロはそこへ静かに何かを置いた。手に収まる程度の小さな物で、簡単に言えばUSBメモリのような形に似ているものだった。

「それ、紅蓮！？」

「君が意識を失っている間に拝借させてもらった」

「勝手に私の紅蓮を！」

「そう怒らないで欲しいな。これは君に返すよ。修復や改良も加えておいた」

「っ、どうしてそんなことを？」

「それは君が考えると良い。今後の自分の在り方と共にね」

意味深にそう告げると、ゼロは踵を返して来た道を引き返して行く。待ちなさいよ、とカレンが幾度か声をかけたが、一度も反応することも無く姿を消した。

それと同時にカレンの自由を奪っていた拘束が、ガチャリと音を

立てて外れた。

一先ず紅蓮を手にとったカレンだったが、ゼロの言葉が頭を離れず、そのあとはただ、紅蓮を見つめ続けるのであった。

5

「何から話せばいいものか」

それなりの広さがある医務室には、緊張感の欠片も無い声が響き渡った。C・C・のものである。

せっかく真面目な話をするような雰囲気になっていたというのに、その一言でそれは台無しになっていた。

「お前、ちったあ真面目に話せつての」

「私はいたって真面目だ。それに、お前の様なお子様に『お前』呼ばわりされる筋合いはない」

「あ？ あたしはこう見えても teme よりだいぶ年上だつてーの」

「そうか。お前の頭は随分と大変な事になっているようだな」

「あんだと！？ 喧嘩売ってんのか！？」

「やめい、ヴィータ！」

「C・C・もその辺にしておいて、ね？」

フンツ、と不機嫌さを露わにしているヴィータと、お子様の相手は疲れる、とため息を吐くC・C。どうにか言い争いは止めたようだった。

「そうやなあ、ほんならC・C、どんなことやつたら話せる？」

「私が話せることも限られている。まあせいぜい、なのはの事くらいだろうな」

「分かった」

「ゴチャゴチャと話すのは面倒だからな。簡潔に話すぞ？」

「それでええよ。要点を話してくれたら」

分かった、とC・Cは傍の台に置かれていた、水の入ったコップを手にとると口に付ける。それを元に戻すと、再び口を開いた。

「なのはの意識が戻らないのは、ギアスのせいだ」

「ギアス!？」

「ねえ、どういうこと!?　なのは、まさか誰かにギアスを掛けられて……」

「フェイト、だったな?　落ち付け。なのはは誰のギアスにも掛けられていない」

「そ、そつか。よかった……」

「では何故意識が戻らない?」

シグナムは落ち着いた口調で、この場にいる誰もが思っている疑問を投げかけた。

「それは、なのは自身のギアスのせいだ」

「えっ!？」

「おいテメエ、それだとなのはがギアスを持つてるって意味だろうが。アイツはそんなの持つてねえよ!」

「持つているさ。お前達が知らないだけでな」

「証拠はあるんか?」

ギアスは、なのはの中に力として存在している。なのはが意識を失っている今、それを証明しろというのは無茶な話でしか無い。

「証拠らしい証拠は無い。だがなのはがギアスを持つている事は本当だ。私がギアスを与えたのだからな」

「っ、C・C、が?」

「これを見る」

C・Cは自身の前髪を乱暴に掻き上げ、額を一同に見せる。そこには、鳥を模した様な赤い紋様があった。

「スザクからどこまで聞いているかは知らんが、これがコード。不老不死の呪いだ。これを持つ者は、他人にギアスを与える事が出来る」

「なのはは本当にギアスを……」

「今の話が本当なら、テメエのせいじゃねえか!　なのはが意識を失ったのはよ!」

「なのはには、絶対に揺るがないと思えるほどの強い思いがあった」
「だったら何だ！ それでなのはが目を覚ますって言いてえのかよ？」

「そうだ。なのはが意識を失ったのは、暴走したギアスを抑え込むためだ」

ギアスの暴走。それはいくら本人が望まなくても、いつかはやって来る。C・C・曰く、王の力なのだ。それを人の身に宿すということに、リスクが無い筈は無かった。まあ一部例外はあるのだが。

「ギアスは使用を続けると次第に力を増していく。こんなに早いとは思わなかったがな」

「なのはちゃんは助かるんか？」

「なのはは目を覚ますさ。暴走したギアスを制御して、必ずな。私が確信を持ってそう言えるほど、あいつには強い思いがある。お前達は信じて待ってればいい」

はやてを真っ直ぐに見据えるC・C・に、彼女は分かった、と短く返した。

「もうこの件に関しては何も言わへん。C・C・が言ったことを信じて、なのはちゃんの思いを信じて待つ」

「はやて、でも……」

「こいつのこといきなり信じろって言われてもさ……」

「さっきのC・C・の目は、ウソついとる目と違った。そやから待とう？ なのはちゃんが帰ってくるのを。それにもしもの時は、皆でC・C・ぶっ飛ばしたつたらええやろ？」

後半は冗談っぽく言うはやてだったが、案外本気だったのかもしれない。

「この件はこれでお終い。あとは、そやなあ……C・C・はカレンと知り合いみたいやつたけど、どうなんや？」

「確かに知り合いだが、カレンの事はカレンに聞け。私が話す事は無い」

「まあそれは、そうだね……」

フェイトは少しトーンを落とした声で呟く。カレンが自分達に隠している事がある、という確信めいた思いがフェイトにはあった。それは逆に言えば、自分達が信用されていないから、話したくないという事でもある。

フェイトはカレンとはまだ短い付き合いだが、ただ局員と次元漂流者という関係では無く、友人として向き合いたいと思うようになっていた。そこで思い出したのが、もう10年以上も前に教えてもらった、友達になる方法。

だからフェイトはカレンを助け出し、彼女の本当の名前を呼ぼうと決意していた。

6

紅月カレンを拘束してあったのは、とある一室だった。彼女を座らせてあった椅子以外には特に飾り気もない、本当に殺風景な部屋だった。

そこを後にしたゼロは通路を歩き、エレベーターで上へ上がり、とある部屋へと入った。

室内には沢山のケーブルが伸び、様々な機器に接続されている。が、それらは全て透明な板で仕切られており、床下や天井まで張り巡らされたケーブルが全て目視できるようになっていた。

その中でも一際目を引く物がある。部屋に入るドアから見て、真正面に存在している黒い球体。それには回路の様に沢山の光の筋が通っており、何らかの役割を担っている事が伺える。

さて、その球体を仕切っている透明の板を背にしている人物が居る。かなり大柄で、シルエットからしてもおそらくは男性であることが容易に想像できる。

彼はゼロが部屋に入ってくるなり、
「何故、わざわざあの小娘を連れ帰ってきた？ デバイスが目的であれば、小娘は用済みであろう」

腹に響いてくる、低く威厳の塊のような声を発した。

「上手く使えば色々面白い事になると思ってたね。まあ、任せてくれたまえ」

「口を出すつもりはない。好きにするがよい」

それだけ言くと、大柄な男は部屋を出て行こうとする。その背に向かつてゼロは声を掛けた。

「またあそこに行くのかい？」

しかし男は答えず、そのまま部屋を出て行った。残されたゼロはゼロで然して興味も無いのか、キーボードを叩き始めるのだった。

部屋を後にした男は通路を歩きながら、考え事をしていた。

——ゼロの計画などどうでもよいが、収穫はあった。まさかC・が来ていたとはな。あれも直に完成する。となれば、神を殺す日も近い。

男は終始無言で、通路には彼の靴音だけが響き渡っていた。

STAGE 09 ゼロ（後書き）

どうも、なるちです。生きてます。

今回から、また書き方をちよつと変えてみました。
どうでせうか？

あと、だらだら書くのを止めました。

ただでさえ時間が無いのに、だらだら長く書いても時間の無駄なので。

次回、STAGE 10

「聖 天 八 極 式」《究極のナイトメア》

1

陳述会襲撃事件から数日が経過していた。相変わらず、その日も晴天だった。季節は俗に言う夏というやつで、それなりに湿度もあって、ジメジメとした暑さが保たれていた。

とはいえ、それは屋外に限ったことであり、屋内は空調が効いていて適度な温度と湿度が保たれている。おかげで局員は特に汗をかくことも無く、快適な環境で仕事を行っていた。

その局員の一人、シャーリーことシャリオ・フィニーノは最早自室と化していると言っても過言ではない、デバイスの調整ルームに籠って何やら作業を行っていた。そんな彼女に、

「どうだ？」

声を掛けたのは最近ここに来たばかりの謎が多い少女、C・C. だった。彼女は椅子に座って作業をするシャーリーの背後に立ち、背もたれの上部に右手を置いて、忙しくキーボードを打っているシャーリーを見ていた。

「あ、C・C.さん。基礎フレームとか、基本的なシステムは出来たんですけど、やっぱり絶対守護領域の展開計算をC・C.さんの思考にリンクさせるといのは中々難しくて……」

「すまないな、こんなことを頼んで」

「スザクさんのランスロットの様に、発生させるパターンがあらかじめ決まっているものは簡単なんですけどね」

「私が魔法を使えばこんな面倒を押し付けずに済んだのだがな」

「いえ、確かに大変ですけど、楽しいですから」

そう言うシャーリーは本当に楽しそうで、満面の笑みを浮かべていた。何故か、某プリン伯爵や某味覚オンチ助手、某キセル女の事

が思いだされた。が、思いだすのはゴメンだとばかりに、すぐに隅へと追いやった。

「そつえばなのはさんの意識、まだ戻りませんね」

「そうだな。だがこればかりはどうしようもない。なのは自身がギアスに打ち勝たない限りはな。だが今の状態は、暴走したままになるよりは遥かにマシだろうな」

「え？　どういうことです？」

「本来ならば、ギアスが暴走するとその力を制御する事が出来ず、常時発動した状態になる。そうなるとなのはのギアスは勝手に周囲の魔力素を集めだす。とんでもないことになるだろうな」

「……で、ですね」

C・Cの言葉のままに、それを想像したシャーリーは若干、顔が引きつっていた。

「だが、そうはならなかった。なのはの強い思いはギアスの暴走を自身の内面へと押し込めた。それだけでも凄いことだ」

「なのはさん、帰って来ますよね？」

「何度もそう言っただろう。あれほど強い思いを持つ人間は、そうはいないからな」

「はい」

短く答えたシャーリーはキーボードを打つ事に神経を集中させる。なのはが戻ってくることを信じ、自分に出来る事を全力でするだけだった。

2

八神はやてが仕事を行う場所。所謂部隊長室というやつだ。そこではコーヒーの入ったコップに口を付けるはやて達の姿があった。

なにものほんとした雰囲気な訳では無く、それでいて緊迫しているという訳でもない。普段の仕事中となんら変わりの無いものであった。

「ゼロが言うつつたブラックリベリオンやけどなあ……」

「世界を壊し、世界を創る、だったっけ」

「うん。その言葉の通りやとしたら、やっぱり管理局を破壊して新体制でも創ろうってことやろうけど」

「そもそも何でそんなことしようとするだよ」

「それはゼロが管理局をよく思っていないからだろっな。まあ、奴の行いはテロとなんら変わることはないがな」

管理局をよく思っていない。それは一部、はやても思っている事だ。裏であくどい事をやっているような組織が法と秩序を語るべきではない。だから内側から変えることを望んでいる。

——やっぱり世界は簡単やないってことか……。うっん、違う。簡単やからや。簡単過ぎるが故に、皆がそれに気付けへんだけなんや。そやからゼロとも——。

結局、どれだけ考えようと自分達だけで答えなどでない。思考を切り替え、はやてが違う話でもしようとしたとき、プシューッと空気が抜ける音と共にドアが開き、緑の髪の少女が入室してきた。

「はやて、私に用とは何だ？」

「ん、C・C。ええとこに来てくれたな。どや、デバイスの方の出来は？」

「ドルイドシステムのリンクが難航しているようだ」

「絶対守護領域、っていうのに必要なんだよね？」

「確かそれってバリアのシステムかなんかだったよな？」

「演算処理システムだ。本来ならば使用者が計算しなければならないが、あいにくと私にはそんなことは出来ん。だから改良を加えて私の思考にリンクさせて自動で処理させる」

「へえ」

分かっているのかいないのか、ヴィータはそんな返事を返す。

「ねえ、本来は使用者が計算するって言ったから、C・C。が使ってたわけじゃないんでしょ？」

「ならば誰が使っていたのだ？ 話を聞く限りではかなりの計算能

力を必要とするようだ」

「……さあ、誰が使っていたんだろうな」

「何で隠す必要があんだよ？」

ドルイドシステムそのものはブリタニアで開発されたものであり、別に隠したりする必要などは無く、それはC・C・も既に話してあった。

だが彼女達が聞いているのは、このシステムが搭載されたナイトメアを誰が操縦していたかということである。

ドルイドシステムの性能は、どう考えても常人を遥かに超える頭脳の持ち主が使用するようなものである。到底、ただの演算処理のためだけのものとは思えないのである。

とはいえ、それを知ったところでギアスの世界に干渉するつもりなど無いし、そもそも出来ない。要するに興味本位だったりするわけ。

だがそれが分かっているても、C・C・は

「私がいつ、それがナイトメアに搭載されているものだった？
そんな覚えは無いがな」

事実を言うことはなかった。無闇にルルーシュのことに触れてほしくは無かった。

「う……ま、まあ確かにそうだけどよ」

「全く、お前の頭は本当に残念な出来だな。ああ、本当に残念なヴィータだ」

「んだとお！？」

懲りずに挑発するC・C・に、それを真正面から受け止めるヴィータだったが、

「はいはい、止めとき」

はやての静止で直ぐに収まるのであった。

「ところでC・C・、スザクが来たのが2年前で、カレンが来たのが今。だけど話を聞く限りでは2人共ほぼ同じ時に飛ばされたんだ。でも此処に来た時期は違う。それでもやっぱりC・C・が飛ばされ

たのも2人と同じ時期かな？」

「そうだな……。時間もある。私の話せることを、もう少しだけ話してやるう」

「やっぱりまだあつたんやな」

「女には秘密が多いものだろう？」

「いや、この話に女とか関係あらへんけどな？」と、はやてが心の中でツツコミを入れたことを、流石のC・Cも知ることは無かった。いや、それどころかこの場に居る全員がはやてと同じだったことを、知ることは無かった。

「回りくどいのは嫌いだ。単刀直入に話す。私がこの世界に来たのは、ゼロレクイエムが完遂して2ヶ月が過ぎた頃だ」

「なっ、ゼロレクイエムやて？」

「お前達がそれを知っていることも、なのはから聞いている。お前達が、スザクがどうなったかを知らないこともな」

スザクは生きている。生きて、ギアスの世界に帰還した。1年間信じ続けてきたその可能性が今、確証に変わろうとしている。

震える手を硬く握り、フェイトは微かに震える声で問いかける。

「完遂したってことは……。じゃあ、スザクは……」

「帰ってきたよ。無事にな」

直後、誰からか息が零れた。C・Cの言葉の意味を理解した時、フェイトは大きな安堵感を感じたのだが、彼女の言葉にはまだ続きがあった。

「……ダモクレスでの戦いから、1週間後にな」

え、と一同は固まる。スザクがこの世界にいたのは約1年。であるのに、ギアスの世界に帰れば1週間後だった。この差はどう考えても起きるようなものではなかった。

「どういう、ことや？」

「普通ではありえんことだ。……。何か知っているのか？」

「これは私の推測に過ぎないが、ギアスの世界はこの次元世界の平行世界なのかもしれん」

「んな無茶苦茶な」

「次元世界の平行世界だからこそ世界間を渡る時に、まるでタイムリープのような事象が起こってしまう。現に私からすれば、今いるカレンはゼロレクイエム完遂の未来を知らない過去のカレンだ。アイツからすれば私はゼロレクイエム完遂後の未来の私だ。そしてギアスの世界に戻る時、タイムパラドックスは最小限に抑えられる。だからスザクは1週間後の世界に戻ってきた。……ありえない話ではないだろう？」

「そやなあ。確かにそれが一番しつくりくるかな」

「でも、だとしたら帰る方法がないんじゃない？　いくら管理局でもそんな世界間を渡る方法なんて無いよ」

仮にC・Cの推測が正しいと仮定するならば、やはり管理局がどのような手段を用いても帰ることは出来ない。次元世界の中ならば行き来できても、次元世界の外へ行く方法など無いのだから。

しかしC・Cは諦めた様子も無く、特に態度が変わるわけでもなかった。

「だがスザクは帰ってくることが出来た。ならば帰れる可能性が0というわけではないだろう」

「だが、私達の誰一人として枢木がどのようにして帰ったのかわからない」

「悪いいな」

「構わんさ」

と、ここではやてが何かを思いついたように、ポンと手を叩いた。「今の話聞いてって思ったんやけどな、ゼロレクイエムが完遂したつちゅーことは、ルルーシュは死んだわけやろ？」

「……そうだな」

「で、元々ゼロはルルーシュやった。そやから可能性としては――

――

「この世界に現れたゼロはルルーシュかもしれない、か？」

「そうや。可能性の話としてはありえへんことやないやろ？」

「答えはノーだ」

「どうして言い切れるの？」

「私には分かる。ルルーシュはこの世界に来てなどいないからな」
自分だけが分かっているという言い草に少し腹を立てたのか、ヴィータは荒い口調で発する。

「だからよ、何でそれが分かんたって言ってるんだよ」

「強いて言えば、私がコードを持っているからだ。普通の人間には絶対に分らない。例え、ギアスを持っていたとしてもな」

そうかよ、と返すヴィータ。他の面々もそれ以上の追及は無意味と感じたのか、続ける者は居なかった。

ルルーシュの話題が出たことでC・Cは気分を害したのか、

「もう話すことは無い。私は行くぞ」

それだけ言うのと立ち上がり、出入り口へと向かう。それを誰も止めはしなかったのだが、

「ピザが来てしまう」

最後の一言には疑問符を浮かべざるを得なかったのであった。

行間

まるで夕日が差しているかのような明るさを持つ部屋。いや、部屋というにはあまりに広すぎる。それどころか、部屋同士を仕切るような壁すらない、だだっ広い空間。どこまでも果てしなく続くそこには、下の方に雲らしきものがいくつも浮かび、その上にはどこぞの神殿のようなものが存在している。そしてそこに続く無数の階段。それら総てが、この空間がこの世のものではない。

そう感じてしまうほど美しいものであった。

そして、その神殿の中央付近には、白い髪を3段ほどにロールさせ、中世ヨーロッパ貴族のような服で身を包んだ大男が仁王立ちしていた。

彼が放つ威厳たっぷりの雰囲気はハンパなものではなく、気が弱

いものであれば気絶してもおかしくはないほどであった。

「神を殺す為の鍵は、あと一つ。これで世界は変わる。……フン、今の貴様に何が出来る？ ギアスどころかその身体さえも！ 命さえも！ 愚かにも失った貴様に、一体何が出来るといふのだ？」

一人でいるというのに、まるで誰かの話しているかのような彼。どれだけ周囲を見ても、やはり誰も居はしなかった。

彼の周囲にはいくつかのモニターが存在しているのだが、そのいずれもが「旧機動六課」を映し出していた。

3

あれからさらに、3日が過ぎていた。陳述会の日からして、1週間。この間、特に襲撃があったり、他に事件が発生したりすることもなく、のどかで平和な時間が流れていた。

世間的には。

だが管理局は違う。局員には交代で休みがあっても、管理局そのものに休みなどあるはずが無い。やはり、ゼロの件に関しての捜査の日々は続いていた。もつとも、特に成果が上がっていないのが現実ではあったが。

完全に行き詰りかけたかと思われた矢先、事件は急展開を見せていた。

旧機動六課の隊舎にはアラートが鳴り響いていた。少し前からずっと。

便宜上、ロングアーチとされている司令部では、大量の熱源反応が確認されていた。場所は六課付近の海上で、それらは言うまでもなくナイトメアの大部隊だった。

そしてその進路上には六課隊舎があった。目標地点がどこかなど、明白なものだった。

現在の状況をシャーリーは

「熱紋照合、サザーランド、グロースター、ヴィンセントです。総

数およそ200。また、ライブラリに無い新型機と思われる熱源も確認しました！ 数2！」

ナイトオブラウンズ総隊長、八神はやと、彼女の後ろで待機している他のラウンズメンバーへと届くように声を張り上げて伝える。
「200か……量産型のほうはまあ、何とかなるやる。それよりも新型機の映像を！」

「はい！ 映像……出ます！」

直後、モニターには2機のナイトメアが映し出された。黒と薄紫を基調とし、大剣を背に携えた、通常の1.5倍ほどのサイズがある機体。

「これ、ギアラハッドか！？」

それは、忘れてくても決して忘れる事の出来ない、彼のデバイスとそっくりの特徴を持っていた。圧倒的な力で機動六課の前に立ちはだかった、ビスマルク・ヴァルトシュタインのものと。

「それにこれってパーシヴァル、だよな？」

もう一機は濃淡の紫色を基調とし、右腕には大きなクロー、左手に盾を持つ機体。敵から大事^{いのち}なモノを奪う事を、殺戮を楽しむイカれた男、ルキアーノ・ブラッドリー。彼のデバイスに酷似していた。十中八九間違いないだろうと思いつつも、

「ねえC・C、間違いないかな？」

念のためにフェイトが確認を取ると、やはりC・Cからは肯定の返答があった。

「色々考えてる暇はない！ 向こうがここを狙ってるんは明白や。各員、迎撃態勢！」

はやてから出撃の命が下ると、一同は一斉に部屋を出ていく。その中にはC・Cも入っていたのだが、はやてから声が掛けられた。「何だ？」

「デバイスはもうええんか？ なんや、ドルイドシステムでえらい行き詰ってたみたいやけど」

「ああ、まだ報告していなかったか。大丈夫だ、問題無い」

「……そうか。近隣の部隊からも応援が向かってきてる。それまでちょっとしんどいけど、頼むな」

「ふっ、まあほどほどにやるさ」

C・Cは軽い口調で返すと、長い髪をなびかせて、こんどこそ部屋を後にした。

4

戦局は、はやての予想以上に厳しいものとなっていた。

総数200にも及ぶ量産型のナイトメアと、それらの隊長機であるギャラハッド、パーシヴァルを迎撃しなければならない。

言葉で言うのは簡単だが、なのはとカレンが居ない今、C・Cを入れてもフェイト、リインとユニゾンしたはやて、アギトとユニゾンしたシグナム、ヴィータの5人だけで戦っている状態だ。さらに言えば、シグナムとヴィータはギャラハッドとパーシヴァルの相手をするだけで手一杯であるため、200機を3人で相手をしている状態であった。

しかも、C・Cとははやては前に出て戦うようなタイプではないため、尚更厳しかった。

<全然数が減らないです>

「仕方あらへんよ。この数やと広域詠唱の時間も取れへんしな」

<地道に落としていくしかないわけですね>

「そやな」

はやては射撃魔法で1機ずつ確実に落として行く。しかしかつてのガジェットとは違い、ナイトメアは量産機であっても避けるし、防御もする。ガジェットとの性能差は天と地ほどもあった。

「お前達、攻撃がそっちにいくかもしれんが、避けるよ」

C・Cが纏う装甲はガウエインに似て非なるもの。最高峰のシールド、絶対守護領域。絶大な破壊力を誇る拡散構造相転移砲。小回りが利くハドロショットと、攻防の両面において最高クラスの

性能を実現している。

だが、本来はルルーシュがして、初めて真価を発揮するものであり、彼ほどの高い情報処理能力を持たないC・C・ではやはり、彼ほど上手くは扱えないであろう。そのことは彼女自身も理解していた。

「はい？」

「C・C・、何言ってる——」

フェイトが言い終わらない内にC・C・が両腕を広げると、胸部の装甲が上下へスライドし、内部が露出された。

そこには何か、光を反射するようなキラキラとした物体が存在していた。

「上手くいってくれよ」

どこか自分に言い聞かせるように呟くと、そのキラキラとした物体はナイトメア部隊に向けて放たれた。

その直後。

それを追うようにして、胸部から一筋の、ほぼ白に近い紫色の光が発射された。それは先に放たれた物体よりも遥かに速く、あっという間に追いつき、命中する。

「一体何をしてるんや？」と、はやてに疑問が浮かんだ。もちろんそれはフェイトも同じ事。自分で放った物体（彼女達はそれが何かの攻撃だと思った）に、後から発射した光を当てる事に一体何の意味があるのだろうか、と。

それに自分で答えを出す前に、そしてC・C・に問う前に答えは出た。

物体に命中した光はどういう理屈なのか、四方八方へと裂かれた様に進路を変える。その先に待つのは、敵ナイトメア部隊だった。

幾つにも別れた光はその先々でナイトメアを貫き、切り裂き、破壊していく。あまりに突然のことだったせいか敵部隊は対応が遅れ、今の攻撃だけで20機程を撃墜してしまった。

その中で、

<は、はやてちゃん、なんかヤバイですっ！>

「ちょ！ こっち飛んできてるやん！」

拡散した光は、何故かはやての所にだけ飛んでいった。フェイト達の方には全く飛んでいっていないというのに。

何とか回避したはやての怒りの矛先は、当然C・Cに向かう。

「ちょいC・C！ 何で私狙ってんの！？」

「狙った訳ではない。計算を間違えただけだ」

「それも完璧狙って間違えてるやろ！？」

「バカを言っな。蜃気楼のシステムは複雑なんだ、少しのミスくらい笑って許せ」

「笑えるかつ！」

2人にとっては至って真面目なやり取りだったのだが、

「あの、2人共、ふざけるのはそれくらいにして——」

「ふざけてなどいない」「ふざけてないて！」

フェイトにはただ漫才でもしているようにしか見えていなかった。

5

一方で、シグナムとヴィータの戦いは熾烈を極めていた。刃と刃が生み出す渴いた金属音が響き渡っていた。いつの間にか空はどんよりとした厚い雲に覆われ、空から降り注いでいた光は遮られていた。それは現在の戦況を表しているかの様で、どこか不気味に感じられた。

「はあああっ！」

シグナムが肉迫し、炎を宿したレヴァンティンで斬りかかった。ギアラハッドがエクスカリバーで受け止めると、巨大な刀身から放出されているピンク色のエネルギーフィールドが炎を払いのけ、威力強化を無効化してしまっている。

<やっぱりダメだ！ アイツの剣をどうにかしねえと！>

「そのようだな。レヴァンティン！」

<Explosion.>

鞘を出現させると、レヴァンティンを収納する。電子音と共に鍰元からカートリッジが排出され、鞘内で魔力が一気に圧縮されていく。

そして、

「行くぞアギト」

<おう！>

<「飛竜」>

掛け声と同時にレヴァンティンを抜くと、その時には既に刀身は鞭状連結刃となっており、長く長く伸びていく。

<「一閃！」>

シグナムと、ユニゾンしているアギトとが同じ動きでレヴァンティンを振り下ろす。巨大な魔力に包まれ、最早砲撃と化しているそれは、まるで獲物を捕獲する時の蛇のように、疾く、ただ真っ直ぐにエクスカリバー目掛けて駆けていく。

それを叩き落とさんと、ギアラハッドはエクスカリバーを思いきり振り下ろした。

どれほど強力な魔力であろうと、エクスカリバーは払いのけていつてしまう。遂には飛竜一閃は弾かれ、後には宙を漂う不格好なレヴァンティンが残っていた。

<まだこれからだぜ！>

「剣閃烈火！」

<「火竜一閃！」>

シグナムは左手に剣を模した炎を創りだし、それでギアラハッドの居る前方の空間を斬りつけた。これはシグナムの攻撃の中で最高の威力を持つ。これならば、という期待が2人にはあった。

「くっ……」

<マジかよ>

だが、それを以てしても、エクスカリバーには届かなかった。ギアラハッドの事は以前から知っていたが、実際に戦うのはこれが初

めてであり、改めてその強さを認識させられていた。

シグナム同様、パーシヴァルと1対1の戦いを繰り広げているヴィータ。こちらの中々に面倒なことになっていた。

最初は攻撃の繰り出し合いだった。しかしパーシヴァルが過剰なまでの攻撃特化型であるため、バリアを使わざるを得ず、その結果として現在パンツァーヒンダネスを発動させ、ドリルと化している右腕を受け止めているのであった。

凄まじい威力に、防御に専念していても亀裂が生まれていく。

「くっそ、めんどくせえ野郎だな」

こうしている間にも亀裂は大きくなっていく。

「さあて、どうすっかな」と、ヴィータが考えていた時だった。

ヴィータの右上から一条の紅蓮の光が飛来した。気付いたヴィータだったが、特にアクションを起こす事は無かった。

その光の着弾点はヴィータではなく、僅かに前にずれた空間。そこには今、パーシヴァルがいた。

当然のことだ。

パーシヴァルも察知しており、回避しようとした。だが、それは許されなかった。両足首には赤いリング——バインドが掛けられていて、自由を奪っていた。

紅蓮の光はパーシヴァルだけを飲み込み、装甲は泡立ったように膨らみ、そして爆発した。

パーシヴァルの撃墜を確認したヴィータはバリアを解き、自分の知る彼女がここへ来るのを待った。

「オメエ、どうやって来たんだ？ 捕まったはずだろ？」

第一声がこれである。普通はもっと、先に心配したりするのではないのだろうか。

それはともかくとして、紅蓮の光を放った本人——カレンがヴィータから少し離れた場所までやって来る。しかしその顔に再会の笑顔等は無く、これから戦いに向かう戦士のものしかなかった。

「おい、聞いてんのか？」

「私は……私は確かめるためにここへ来た」

「はあ？ 何て言ってるんだ？」

「紅蓮、もう少し私に力を貸して」

まるでヴィータの話は聞いていないのか、ぼそぼそと何か呟いていた。そして直後、カレンは一瞬で紅蓮の球体に包まれた。

すぐにそれが消え去ると、半透明のピンクの翼がカレンの身体を覆っていた。

「お前、それって」

驚いているヴィータをよそに、カレンは翼を広げた。8枚からなる両翼は大きく、その背後には同色の、日輪のような光があった。

「おいカレン、聞いてんのか！」

少しの苛立ちを含む問い掛けに、

「ゴメン」と、チラツと目を向けて返し、カレンはその場から一瞬で飛び去ってしまった。

6

火竜一閃を受けても、ギャラハッドは無傷だった。いや、正確に言えば受けてすらいらない。全てエクスカリバーが払いのけてしまっていたからだ。

魔法が通じない以上、純粹に物理攻撃で倒すか、もしくはエクスカリバーの死角に魔法を用いるしかない。しかしそれが容易いことではないことくらい、シグナムもアギトも理解していた。

少しの間、互いに動かず睨みあっていた。考える時間が出来たからといって、良策が思いつく事も無く、プレッシャーだけが与え続けられていた。

そんな時、シグナムは後方に新たな気配を感じ取った。量産機がこちらに来たとかいうのではなく、全く新しい気配だった。しかし、どこか知っているものだった。

それは、恐るべき速度で近付いて来ていた。まだ遠くにあると思

つていたその気配はもう、すぐ背後に。直後には前方から感じた。
「っ！？」 お前はっ！」

シグナムの目に、紅い髪を持ち、紅蓮の装甲を持つ少女が映り込んだ。左手にはその独特形状が特徴的な、呂号乙型特斬刀を握り、背中には8枚の紅蓮の翼を生やしていた。

カレンを確認したときには、ギアラハッドのエクスカリバーは右へと弾かれており、その重量故に腕ごと大きくのけぞっていた。

すぐにエクスカリバーを引き戻し、カレンに斬りかかるうとするギアラハッド。しかし引き戻しかけた時には、カレンの肩口からスラッシュハーケンが放たれていた。以前とは違い、鳥の嘴のように鋭くとがったそれは切断能力が大幅に強化されており、ギアラハッドの両肩から先を胴体から切断していた。

攻撃手段を失ったギアラハッドに、さらに追い打ちをかける。金色の右手がギアラハッドの頭部を掴んだ。掌から紅蓮の光が1秒にも満たない時間発せられ、ギアラハッドは全身からエネルギーフィールドでも発生させているかのごとく紅く発光し、そして爆散した。「無事だったか、シュタットフェルト。だがどうやってここに来たのだ？」

そう問うシグナムも、ヴィータ同様に一瞥し、カレンは飛び去っていった。

7

カレンがこの場に現れる少し前、近隣部隊からの応援も到着しており、敵勢力の数はおよそ半分程にまで減少していた。

この部隊の中には、かつてのなのはの教え子である、スバル・ナカジマ、その姉であるギンガの姿もあった。

「ふう、後半分くらいかな、ギン姉？」

「そうね。この調子で頑張ろう」

「うん——って、あれ何だろう？」

「え？」

ウイングロードで空を駆け、敵ナイトメアを撃墜していたナカジマ姉妹だったが、スバルが何かに気付いた。それに伴ってギンガも同じ方向に目をやると、紅蓮の光が高速で複雑な軌跡を描いて接近してきていた。

「スバル、警戒！」

「うん！」

恐るべき速度で接近するそれには、自分達の速さでは対応出来ないという理解しつつも、諦めるわけにはいかない。例えどれだけ強いナイトメアが来ようとも、守るべき人たちが沢山いるのだから。

自然と握る拳に力が入る。

しかし。

2人の予想に反し、紅蓮の光は付近の敵ナイトメアに突撃していき、瞬く間に次々と撃墜していく。

「あれ？ ギン姉、これって……」

「う、うん。敵じゃない、みたいね」

と、2人が警戒を解きかけた時だった。それが一瞬で彼女達を襲い、目の前の景色が変わった。

何が起こったのかは分からない。自分達がただ分かるのは、全身に激しい衝撃が走り、痛みを感じていること。

それと、

「いまの……カレン」

「どう、して……」

2人の視界に一瞬だけ映ったのは、陳述会の警備の際に少し顔を合わせた、カレンの顔だった。

そして、2人は意識を手放した。

「えっ！？ カレンが！？」

フェイトは驚きの声を上げていた。

つい今し方、シグナムからカレンが現れたと通信を受けたのである。

『枢木のアルビオン級のスピードだ。すぐにそちらにも現れるだろう』

「はい、分かりました」

『一応私とヴィータも向かっている』

そこで通信は切れた。

戦闘が行われている場所は六課付近の海上だが、敵の数が数だけに範囲はかなり広く、応援部隊の到着もあつて戦闘の規模もそれに大きいものとなっていた。

とはいえ、敵もおよそ半数になり、この戦闘も沈下に向かっていった。ここにカレンも加われば、すぐに終わることだろう。

そう思う反面、疑問もあった。

確かにカレンは捕まり、連れ去られてしまったはずだった。しかし今、この場に来ている。どうやって抜け出したのだろうか。自力でだろうか。それとも向こう側が解放したのだろうか。

洗脳を受けている可能性もあったが、ならば敵勢力を撃墜している意味が分からない。その線は無いと判断した。

そしてとにかく、無事にカレンと再会出来ることが嬉しかった。

シグナムが言っていたとおり、紅蓮の光はすぐにやって来た。高速でジグザグに軌跡を描きながら。敵部隊を次々に破壊していく。

しかし――

「え？」

フェイトは自分の目を疑った。紅蓮が描く軌跡は、確かに敵を撃墜しているのだが、応援に来ている味方部隊までをも撃墜しているのだ。そこには、敵も味方も無かった。

「そんな……カレン、カレンッ！」

<S o n i c D r i v e . >

味方をも巻き込んで攻撃していくカレンを止めるため、真・ソニ

ツクフォームを起動させ、ライオットザンバー・スティンガーを両手に携え、紅蓮の光に飛翔する。

敵味方お構いなしに倒していつているカレンも、接近するフェイトに気付いたのか、目標をフェイトへと切り替えた。

右のザンバーで斬りかかってくるフェイトを、呂号乙型特斬刀で受け止め、両者の足は止まった。

「フェイト……」

「カレン、どうして？　せっかく戻ってこれたのに、どうしてこんなことっ！」

「私は、私の望む世界のために戦う。そのために、これは必要なことだから」

「何を言ってるの？　こんなのっ！」

「どけっ！　テストロッサ！」

シグナムの怒鳴り声が耳に届き、フェイトは反射的に後退した。

直後、シグナムはカレンへと斬りかかったが、カレンも一瞬で後退して回避した。

「シグナム、待って！　カレンは——」

「庇うな。既に何人もの局員が撃墜されている」

「で、でもカレンにも何か理由が」

「どのような理由があっても、公務執行妨害、及び傷害罪で逮捕せざるを得ない」

片時もカレンから目を離さず、淡々と話すシグナム。しかし彼女も内心では動揺していた。だが、まだいる沢山の仲間を守るためにも冷静でいなければならない。

剣を握る手に力が入る。

「お前はそれだけのことをしたのだ。シュタットフェルト、覚悟は——」

「その名で呼ぶなっ！　私は黒の騎士団のエース！　紅月カレンだっ！」

瞬間、フェイトとシグナムにはある疑問が浮かんた。カレンは囚

われ、ゼロにあっている可能性が極めて高い。そしてゼロは、ギアスの世界では黒の騎士団のリーダー。カレンはそのエース。彼女がゼロの正体を知っているかどうかなど、フェイト達は知らない。となれば、ゼロ側についたとしてもおかしくは無かった。

ただ、何故敵味方問わず撃墜していったのかは腑に落ちなかったが。とにかく今、カレンは味方では無いと結論付けるより他は無かった。

「シユタツトフェルト——いや、紅月……逮捕後に色々聞かせてもらおう」

「あんたらに私が捕まえられるならね」

言い終わると同時にカレンは一瞬の内にシグナムとの距離を詰め、右腕を突き出した。シグナムは身体を左回りに捻ってかわすと、その勢いを乗せたまま斬撃を繰り出す。

ここでカレンは呂号乙型特斬刀で受け止める構えを見せるのだが、刀身が赤く変化したのだ。だがシグナムは何となく理解していた。それが、MVSであるということ。

カレンがレヴァンティンを弾く。その力には逆らわず、弾かれるまま右腕を後ろへと流し、そのまま身体も捻り直していく。自然と左腕が前に来る。その手には鞘が握られていた。

「通じないよ！」

鞘がカレンに届くよりも速く、彼女がMVSを振り抜いて鞘を斬り落とした。

「くっ」

たまらず後退するシグナムに追い打ちをかけるように右腕を突き出した。

（回避は）

<間に合わねえっ！>

輻射波動の直撃を避けるために、パンツァーシルトを展開する。

だが、

「喰らいなあっ！」

カレンはお構いなしにシールドの上から輻射波動砲弾を叩き付ける。そのまま無理矢理に押し込むように、海上へと落ちていく。そして。

『ドーン』という、まるで爆弾が爆発したかのような轟音と共に海水が弾け飛び、何十メートルという高さまで到達し、潮の味がする雨を降らせた。

「シグナムッ！」

量産機の掃討を行っていたヴィータも異変に気付いて駆けつけたが、時既に遅かった。

爆発の中心から飛び出てくるカレンを見つけたヴィータはすぐに飛びかかっていく。

「ダメエツ！」

「遅いつ！」

再び右腕を前へと突き出し、今度は手首周りの突起を展開させる。ごく短時間でチャージされた輻射波動砲弾は炸裂し、

「うわっ!？」

広範囲に放たれた。

拡散させている分、威力自体は落ちている。しかし範囲の広さ故に、避けられるものではなかった。いや、避けようとか、そんなことを考える以前に、本能が身を守ろうとして反射的にバリアを張っていた。

「ぐっ、さすがに避けらんねえな——っ!？」

ヴィータが体勢を立て直した時、すでにカレンは次弾のチャージを終え、右腕には紅蓮の光が宿っていた。

拡散させず、一直線に放たれたそれはヴィータを飲み込み、下方にあるビルにまで突き進んでいった。

「ヴィータッ！ カレン、もうやめて！」

シグナムに続き、撃墜されたヴィータ。次々とやられていく仲間を目にし、フェイトは悲痛な叫び声で訴えかける。が、

「言っただけだよ。これは必要なことだって」

——そう、あんた達を見極めるために、ね。

いくら訴えようとカレンは聞き入れることをしなかった。そこへ吉と出るか凶と出るか、

「それくらいにしておけ、カレン」

C・Cが現れた。

「C・C……？……そう、あんたも来てたのね」

一目見て驚きの表情を浮かべるカレンだったが、それは直ぐに元に戻った。

「今は私たちが争っている場合ではない。それくらい分かっているだろう？」

「私は黒の騎士団、アンタはブリタニア。それだけで戦う理由になるんじゃない？ でも、今はもうアンタはどうでもいい」

「お前が私をどう思っているかわかるが、それこそ今はどうでもいい。だがそれよりも、お前はさつき、今やっていることを『必要なこと』だといった。どういう理由があつて——」

「どうでもいいアンタに、話す必要なんか——無いっ！」

最後だけ一際大きく声を発し、同時にC・Cまでの距離を一瞬で詰めると、MVSを振るう。それがC・Cに届くよりも少しだけ早く、彼女の前には六角形をした、手のひら大サイズのピンク色のシールドがいくつも現れた。MVSの刃がその表面を駆け、大量の火花を散らした。

一太刀とはいえ、紅蓮のMVSを受けてもビクともしないシールド。これが最高クラスの防御力を誇る、絶対守護領域である。

「守ってるだけじゃ勝てないよっ！」

絶対守護領域だろうが何だろうが、お構いなしに輻射波動砲弾を叩き付ける。いくら強固なシールドといえど、ダメージは防げてもし撃ちまわらない。

炸裂した輻射波動砲弾のそれによってC・Cは弾き飛ばされた。「アンタは後回し」

体勢を立て直したのも束の間、息を吐く暇もなくカレンの猛攻は

続く。だが、

「これはっ！？ ランスロットの——」

それは本来、紅蓮には無い装備だった。エナジーウイングが巨大化し、そこから紅色をした無数のエネルギー矢が放たれたのである。元々、急所に当たればナイトメアを一撃で破壊する程の威力がある武装だ。それがC・C・一人に集中的に撃たれているとなれば、それはもうそうとうな威力になることだろう。

「くっ」

無数に撃ち込まれるエネルギー矢が、C・C・の不完全な絶対守護領域を突破し、彼女を弾き飛ばした。ドルイドシステムのシンク口は完全なものでは無く、隙間なく完全に展開されていなかった。また、最高級の防御力を維持するために、魔力の消耗も激しいものだった。

そして二人の間には既に大きく距離が作られ、カレンが背を向けた直後、

「カレンッ！」

彼女の視界に金色の軌跡が映り込んだ。頭で思考するよりも速く、身体が反射を起こし、左腕がMVSを振るって火花を起こす。それは金色の軌跡を描いていたもの——ライオットザンバー・ステインガーを弾いたことによるものだった。

フェイトが続けてバルディッシュで斬撃を繰り出す。が、やはり容易くMVSで受け止められてしまった。

「カレン、もういいでしょ！ もうやめて！」

「しつこいよ。やめろって言われてやめるなら、最初からこんなことしない」

「いい加減にしとき！」

「はやてか……」

「カレン・シュタットフェルト——いや、紅月カレン！ 傷害罪及び公務執行妨害で逮捕します！」

「待つて、はやて！ もう少し説得を」

「あかん、待たへんよ。ナイトオブスリー、紅月カレンをただちに逮捕せよ。これは命令や」

何とか説得を試みようとするフェイトだが、睨むように自分を見据える、はやてを前にして命令にそむく事は出来なかった。

フェイトも彼女の理想を知っていて、そのために彼女に協力することを約束している。そしてその理想は、自身も望む事。だからこそ今、カレンを逮捕しなければならないということは理解していた。しかし、どうしても仲間意識が、情が邪魔をする。

「カレン、あんたにどんな事情があるか知らへんけど、私の理想のために逮捕させてもらうで」

「理想、ね……管理局のお偉いさんにでもなりたい訳っ！」

バルディッシュを弾くと、今度は、はやてへと一気に距離を詰め、MVSの一閃を叩き込む。はやてはそれを避けようとせず、微動だにしない。自分では避けられないと理解しているからなのか、単に反応しきれないだけなのか、それとも――

金属がぶつかる音が虚空に響き渡る。

MVSは、はやてには届かなかった。

「……フェイト」

カレンが飛翔するとほぼ同時にソニックムーブを使用し、ギリギリで間に割って入ったフェイトが、二本のライオットブレードを交差させて防いでいた。

はやてが微動だにしなかったのは、フェイトを信頼していたから。それ以外の理由などありはしなかった。

「さっき言ったな？　管理局のお偉いさんになりたいんか、て。私ら舐めるんも大概にしとき！　私らはそんなことのために戦つてるんとかやうわ！　私の理想は、世界から争いを失くすこと。血を流す事もなく、平和な手段であらゆる問題を解決することが出来る。そんな世界に変えていきたいと思ってる」

——そんなの、ただの、本当にただの理想。出来るはずなんてない。そんな世界には変えられる訳が無い。

「ごめんねカレン。最初にちゃんとっておくべきだったよね。ホントに、ごめんね」

—— だけど、どうしてだろう。こいつらを見ると、なんだかちょっとだけゼロを、ルルーシュを思いだしちゃう。理由はどうあれ、世界を変えようとした彼を。

「カレンが何を思ってたこんなことをしとるんかは知らん。けどな、それで流れやんでもええ血が流れたんは事実や。あんたを逮捕します」

「だってさ、C・C。アンタもその理想に協力してるわけ？」
相変わらず罅迫り合いが続く中、カレンの後方から拡散構造相転移砲の照準をつけているC・Cに投げ掛けた。

カレンの心中を察しているのか、いないのか、
「いや、私も今初めて聞いた。バカバカしい、子供染みた理想だ。だが、悪くない。そうそう、スザクも協力していたんだっただな」

「ルルーシュと二人で世界を手にしようとしてたアイツが、こんなのに協力するとは到底思えないけど。でもまあ——」

直後、放射波動砲弾を作り出し、拡散させて放った。フェイトごと、はやても巻き込んで吹き飛ばした。

—— はずだった。

「くっ……やるじゃない」

「カレン」

放射波動という紅蓮の闇の中、フェイトは自身が傷つく事も顧みず、ダメージを負いながらもバルディッシュをカレンの腹部に叩き込んでいた。

フェイトに身体を委ねるようにカレンは意識を手放し、同時にエナジーウィングも消失した。

カレンを抱くフェイトだが、彼女も魔力消費とダメージによつて意識が次第に薄れていく。だがそのまま落ちていくわけにもいかず、
(あと少し、あと少しだけ……)

自身に言い聞かせながら地上へと降りて行った。はやてとC・C・

もそれに続き、彼女の傍に降り立った。

「フェイトちゃん！」

「大丈夫か」

「ゴメン、二人共……あと、お願い」

そうして、カレンを抱いたままフェイトも崩れ落ちていく。はや
とＣ・Ｃはとっさに手を出し、地面に倒れてしまう前に二人を
抱きとめた。

「本当に無茶ばかりするな」

「ほんまやね」

「お前も入っているがな」

「フェイトちゃんに比べたら、私はそんな無茶してへんよ」

「Ｃ・Ｃさんも結構無茶してますよ。完成したって嘘ついて出
撃してたんですから」と、ユニゾンを解除して出てきたリインを
含む三人のやりとりは、救護隊が来るまで続いていた。

—— 7月23日 AM 11:37 紅月カレン 逮捕

STAGE 10 聖天八極式（後書き）

おまたせしました。

削りに削ってこの長さ……もういやになる。

本当はもっと描写したかったのですが、もう疲れたよ、ブトラッシユ。
（笑）

次回 STAGE 11 覚醒の白き魔導師（仮）
残り2、3話くらいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6039m/>

魔法戦記リリカルなのはStrikerS-R2 ～紅蓮の翼と黒き魔女～

2011年11月11日09時51分発行